

昭和十九年四月

史蹟名勝天然紀念物調查報告

第十三輯

六野原古墳調查報告

宮

崎

縣

## 序 言

一、本報告ハ昭和十七年九月廿二日ヨリ同十八年六月末日ニ至ル東諸縣郡八代村六野原ニ於ケル陸軍某施設ニ營リ發掘改葬ヲ要スル所カラ、同地封土墳及ヒ地下式墳ノ三十餘基ニツキ其ノ調査ヲナシタ記録デアル。

一、本縣ニ於テハ古墳ヲ上代遺蹟トシテ其ノ保存ヲ計ルコト、ナリ、既ニ古墳保存協會ノ設立ヲ見テ居ル次第デ、古墳ノ發掘ナド思ヒモ寄ラス事乍ラ公益上已ムヲ得ザル施設ニ對シテハ、ナサネハナラス事トシテ宮内省及ビ文部省ノ許可ヲ得テ調査ヲナス事ニナツタノデアル。

一、本調査ハ着手ニ先ダテ、斯界ノ權威京大教授文學博士梅原未治氏ニ囑託シテ之ニ當ル事ニナツテホタガ、同氏公務上ノ都合ト、一方軍部工事上ノ時日急迫セルガ爲已ムリ得ズ縣ニ於テ之ヲナス事ニナツタノハ遺憾ノ次第デアツタ。

一、然ルニ昭和十八年十二月、梅原教授來縣ノ際遺物ノ鑑査ヲ仰ギ、鹿角裝具ニツキ其指示ヲ得テ稿ヲ追叙シ得タルハ明治四十五年以來本縣古墳ト因縁深キ同氏ニ深ク感謝ノ意ヲ表スル次第デアル。

一、記載ニツキテハ遺物ヲ其ノ儘ニ列叙シテ、餘計ナ言議ハカメテ避クテアリ、何時ニテモ専門家ノ研究ヲ得ルヤウニシテアル。

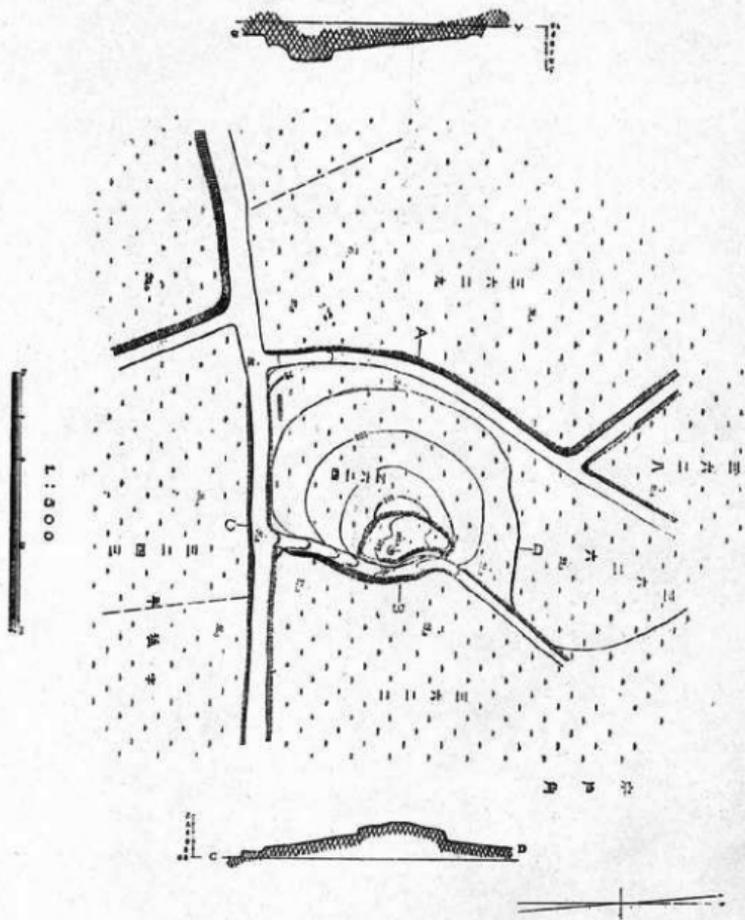
一、記載ニツキテハ石川恒太郎氏其ノ一部ヲ擔當セラレ、又測量、製圖、其他萬般ニ互リ繩渡正男君ノ援助ヲ得タ、併セテ謝意ヲ表スル。

昭和十九年一月

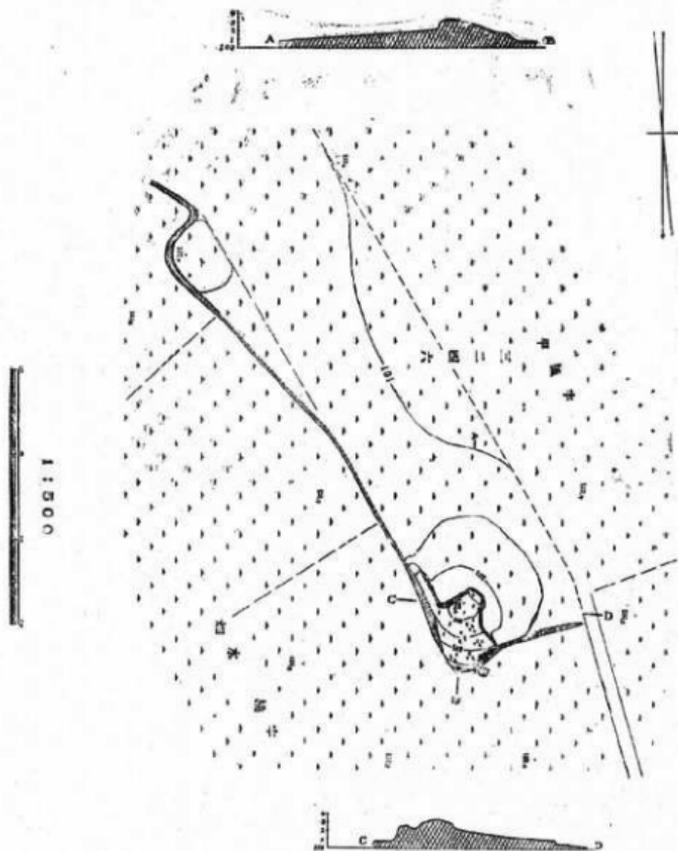
史蹟主事 瀨之口 傳九郎

六野原古墳

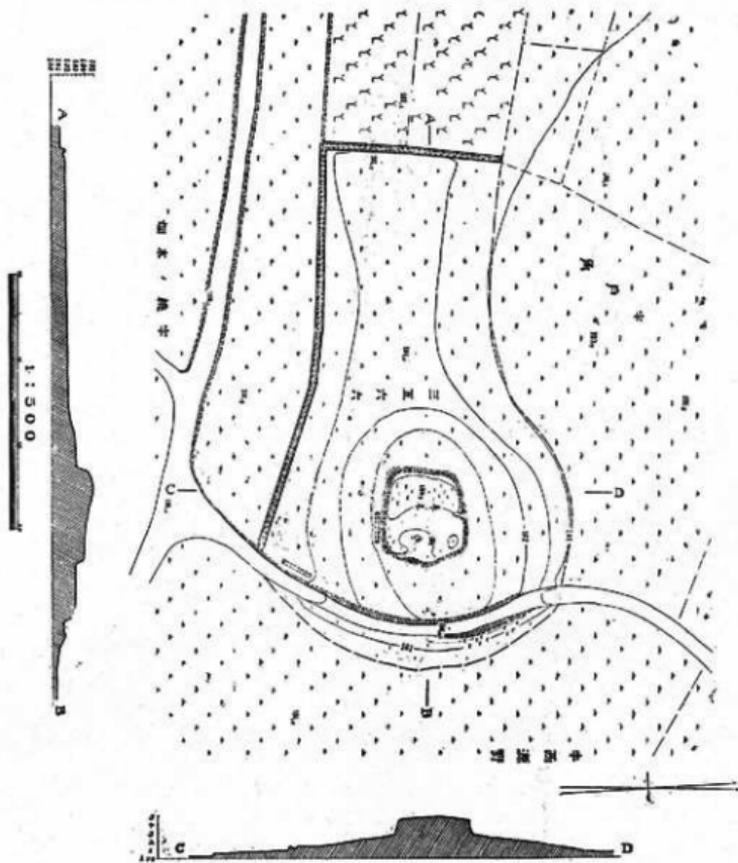
第二圖 六野原古墳第一號



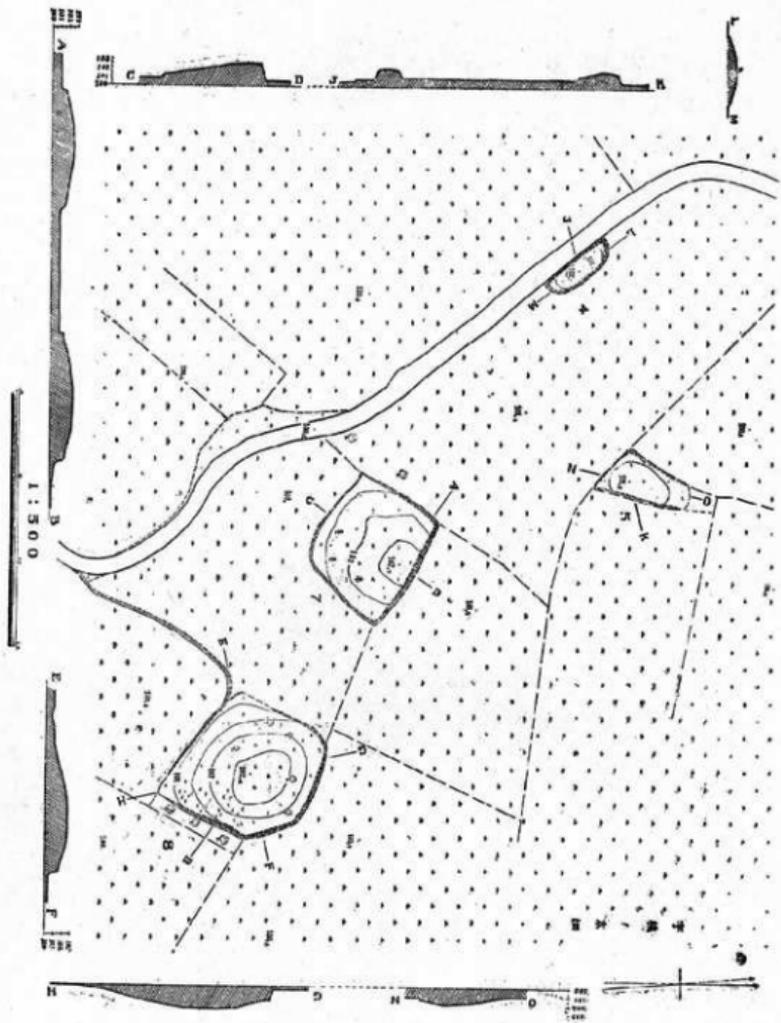
第三圖 六野原古墳第二號、第十二號



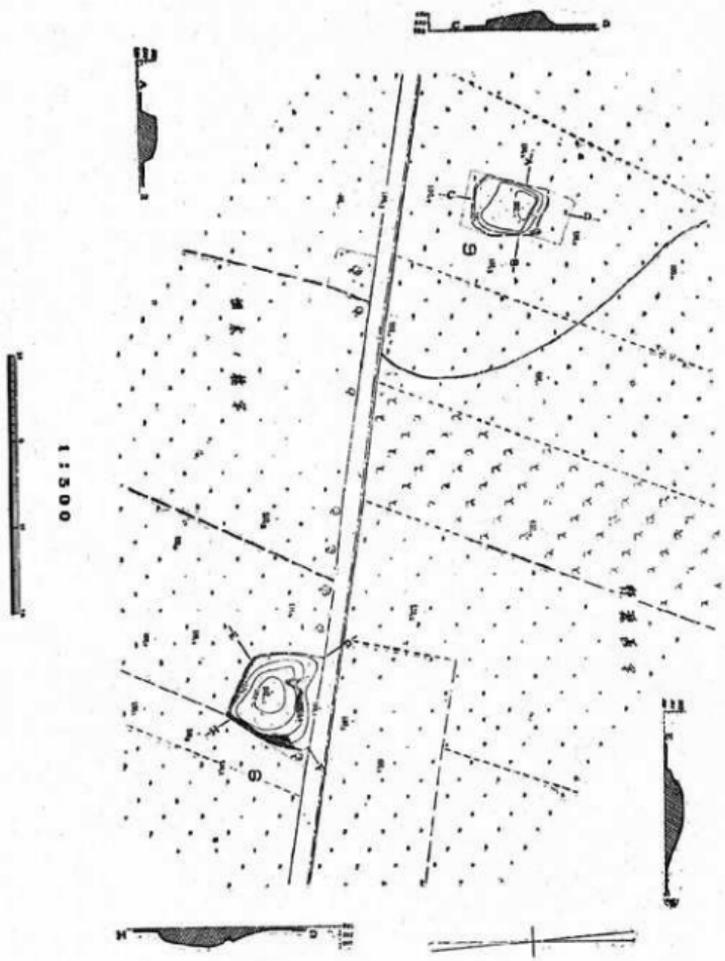
第四圖 六野原古墳第三號



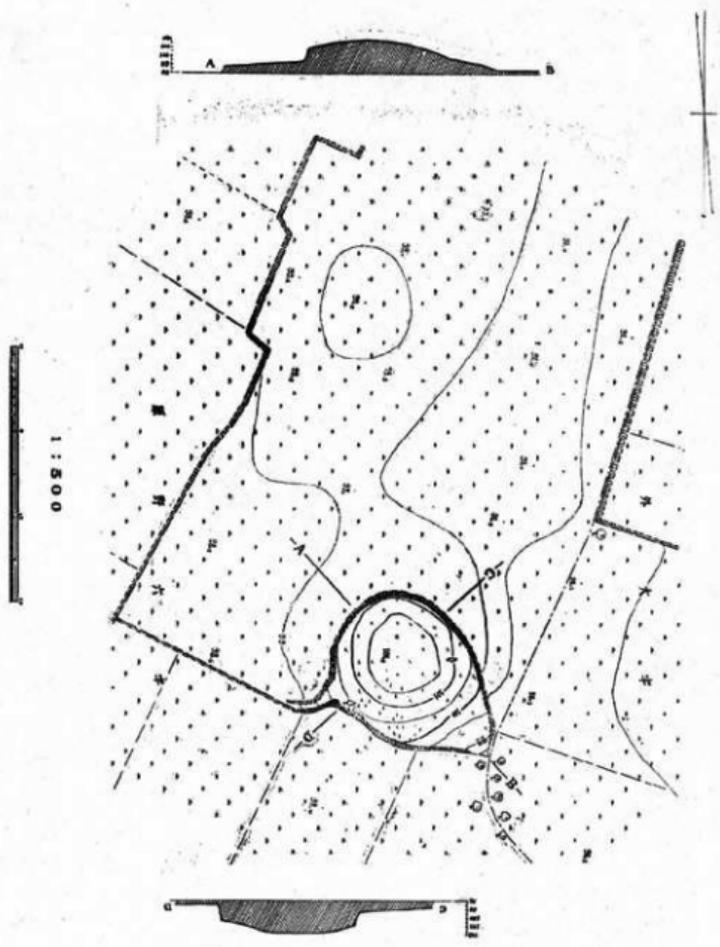
第五圖 六野原古墳第四、五、七八號



第六圖 大野原古墳第六、第九號墳



第七圖 六野原古墳第十號



# 宮崎縣史蹟名勝天然記念物調査報告 第十三輯

## 六野原古墳調査報告

### 六野原古墳發掘改葬ノ次第

昭和十七年某施設ヲ縣下東諸縣郡木脇村、八代村ノ通稱六野原ニナスニ當リ、八代村大字八代北俣ニ屬スル字戸角、狐平、桃木畑、六野原、吹上、大字伊佐生ニ屬スル字大外等ニ縣指定ノ封土墳十二基ト、所在不明ノ地下式古墳若干ヲ存スル所カラ、之ガ移轉改葬ヲ要スルコト、ナリ、縣ハ同年六月四日ヲ以テ宮内大臣及ヒ文部大臣ニ申請シ、宮内省ハ七月廿一日、文部省ハ八月十日ニ承認ヲ與ヘラル、事ニナツタ。

### 古墳所在地ノ地形及ヒ古墳ノ位置 (圖版第一圖)

六野原ハ東諸縣郡木脇村大字三名、八代村大字八代北俣大字伊佐生ニ跨ル臺原デ、日向有數ノ平野ノ一デアル、西部ハ南俣川ノ平地ヲ隔テ、南俣ノ丘陵地ト相對シ、其西北ハ臺地更ニ延ビテ三財、八代ノ間ニ盡キ、北ハ都於郡村ノ山田ニ境シ、丘陵ト小溪谷ト相參差シ、東ヨリ南ハ木脇村内ノ小丘陵ト相連リ標高一〇〇米、其面積三百町内外ニ及ンデキル。

臺地ノ下層ハ第三紀層ノ岩石カラ成リ、其上ニ洪積層ノ礫石ガアリ、上部ハ火山灰土ニ覆ハレテキル。

南口ナル木脇村三名カラニキロノ坂路ヲ登レバ字吹上ニ達シ廣茫ノ原野ヲ展開シ、滿地悉ク畑地トナツテキル、吹上カラ臺地ノ西邊ニ近キ字六野原、狐平、桃木畑、戸角、等ニ古墳無慮數十基ヲ存シタガ大部ハ耕鋤ニ依ツテ失ハレ、今餘ス所ハ十數基ニナツテキル。

## 記録ニ見ユル八代古墳

八代村ハ江戸時代鹿兒島藩ニ屬シテ居タガ、同藩デハ數十年ニ一度位史蹟名勝、神社佛閣等ノ記録ヲナスヲ例トシ、此地關外四ヶ郷ニモ高岡名勝誌ノ記録アリ、本藩ノ鹿藩名勝考、三國名勝圖會及ビ縣治時代ノ陸奥日地理纂考等ニ次々ニ記録サレテキタガ、古墳ニ對シテハ關知シナカワタト見ヘテ記述ヲ殘シテキナイ。明治八年ニ至リ當時ノ宮崎縣ハ飢肥ノ平部嶺南ニ屬シテ日向地誌ヲ編纂スルコト、ナリ、ハジメテ陵墓トシテ記録サル、コトニナツタ。今之ヲ録スル

日向地誌八代北俣村陵墓ノ條ニ

第一號古塚一墓 六野原ノ中央ニ在リ高サ一丈四尺周圍四十七間其形隆然トシテ圓ナリ

第二號古塚一墓 第一號塚ヲ南東ニ距ル一町二十間高サ一丈周圍三十五間塚形上ニ同シ

第三號古塚一墓 第二號塚ノ北ニ距ル一町餘高サ一丈八尺周圍一町三十四間塚首ハ東ニ面シ隆然トシテ圓ニシテ大ナリ

中腹稍低ニシテ塚尾ハ西ニ面シ又少シク張ル恰モ伏臘ノ如シ

古塚十基 第三號塚ノ左右相距ル十間如クハ五十間許、散錯シテ高サ六尺如クハ三尺周圍二十間如クハ三十間左右ノ小

塚アリ其ノ原圃中ニ在ルヲ以テ圃主漸次ニ鋤削シテ其全形ヲ存スルモノナシ今一々詳載セス

第四號古塚一墓 第三號塚ノ東南ニ距ル凡十六町六野原ノ東南許都於郡往還ノ西側一町許ニ在リ高サ一丈八尺周圍四十

八間其形隆然トシテ圓ナリ其巔松樹一株アリ

第五號古塚一基 第四號塚ノ東南ニ距ル十間餘高サ六尺周圍三十二間塚形上ニ同シ

第六號古塚一基 第五號塚ノ南一町許ニ在リ高サ九尺周圍四十間塚形上ニ同シ

古塚三基 第五號塚ト第六號塚トノ中間ニ在リ皆高サ三尺ニ滿タス周圍十五六間ニ過キス塚形上ニ同シ

古塚二基 第六號塚ノ東ニ距ル三十間、都於郡往還ヲ隔テ隔テ三名村ノ疆域ニ在リ今皆殘毀シテ其全形ヲ存セス

第七號古塚一基 第四號塚ノ西ニ距ル二丁三十間六野原ノ南畔ニ在リ高六尺周圍三十五間塚形上ニ同シ

第八號古塚一基 第七號ノ南五間許ニ在リ高六尺周圍二十四間塚形上ニ同シ

第九號古塚一基 第八號塚ノ西五間許ニ在リ高サ六尺周圍三十間塚形上ニ同シ

今之ヲ別圖(實測圖)ニ照スニ古塚第一號ヨリ第三號ニ至ル古墳ハ實測圖ノ同號ニ該當シ、次ニ古塚十基トアルハ實測圖ノ第四號ヨリ第九號ナドニ當リ、第四號古塚一基トアルハ實測圖第十號墳ニ當リ、其他ハ畑地トナリ今現形ヲ存シナイ。其ノ後昭和年間ニ入り縣ハ縣下全部ノ古墳ヲ指定保存スルコトトナリ八代村古墳ハ昭和九年四月十七日縣告示第二百十三號ヲ以テ史蹟トシテ指定サレタ、内大字八代北俣及ビ伊佐生ニ於ケル分ハ左ノ通デアル。

大	字	字	地	番	地目	地	積	古墳ノ種類
同	八代北俣	戸角		三、六二四	畑		三、二四	圓
同		狐平		三、二四六	同		二六、〇〇	圓
同		戸角		三、五六六	同		一一、一八	前方後圓
同		桃水畑		三、二六三	同		〇、〇九	圓
同				三、二六五	同		〇、〇九	圓
同				三、二六八	同		〇、一五	圓
同				三、二七二	同		〇、二七	圓
同				三、二六〇	同		五、一四	圓

## 八代古墳ノ移轉改葬係員ノ任命

伊佐庄	大外	三、三五九	同	一九、二八	地下式横次
同	吹上	三、一九四	同	五五、二五	同
同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同
同	六野原	三、三七二	同	四四、〇八	同
同	源野	三、四五九	同	一、〇〇	同
同	同	三、二七七	同	一、〇六	同

八代古墳ノ發掘移轉改葬ハ十月ヲ期シ京都帝國大學教授文學博士梅原末治氏ヲ招聘スルコトニ決定シ、同氏ノ内諾ヲ得テ居タガ、軍ノ方ヨリハ九月一日ヨリ移轉ヲ開始サレタシトノ要求アリ、暫ク開始延期ヲ願ヒ置キ九月廿日頃ヨリ出張ヲ交渉シタガ、梅原教授ハ同廿五日頃ヨリ十月十五日迄ハ他ノ用務アリ出縣出來難シトノ事、然ルニ一方軍ノ方ハ再度延期ヲ許可セザル事情ニアルヲ以テ途ニ縣ノ方ノミニテ之ヲ決行スルコトトシ、史蹟主事潮之口傳九郎ヲ主査ニ、上代日向研究所特別委員石川恒太郎ヲ副査ニ、上代日向研究所書記樋渡正男ヲ助手ニ、縣書記溝邊寛一ヲ場内監督ニ任命シ之ニ當ラシムルコトニシタ。

## 移 轉 奉 告 祭

發掘ニ先タチ九月二十二日縣主催ニテ字六野原古墳第十號前ニ移轉奉告祭ヲ行ヒ八代村北保神社社司緒方清俊ヲ齋主ニ、宮崎縣知事祭主トナリ軍部、土木請負者、所轄警察署長、八代、木脇兩村長、學校長、關係地村會議員、同區長、元地主、有志者四十餘人參集シ嚴カニ其儀ヲ終了シタ。

## 古墳ノ發掘調査改葬

九月廿三日軍供與ノ人夫ヲ以テ字六野原第十號墳ヨリ始メ、十月四日マデ二週間ヲ費シテ封土墳ヲ發掘調査シタ、今各墳ニツキ一々之ヲ記スコトニスル。

### 第一號墳

此ノ古墳ハ當地ノ古墳中デ最モ西ニ位置シテキタ圍墳デアツタガ、既ニ墳丘ノ東部及ビ西部ノ兩側面ヲ著シク破壞サレテキタ。古墳ノ東側ハ一段低イ畑ニナツテキテ、古墳ト畑トノ間ニハ一條ノ小徑ガアリ此ノ小徑ノタメニ墳丘ノ東側面ヲ削リ取ラレテキタ。古墳ノ西側ハヤハリ畑デアルガ、古墳ノ近クハ高ク西スルニ從ツテ低イ傾斜ヲナシ、墳丘ガ漸次削平サレテ面影ヲ殘シテキタ。古墳ノ南方ニハ道路ガアリ、北側ハ東側ト同ジク一段低イ畑ニナツテキタ、而シテ南側ハ古墳ニ向ツテ稍々傾斜ヲナシテキタ。斯クノ如ク此ノ古墳ハ兩側面ヲ著シク削ラレテ墳形ハ南北ニ長イ砲彈形ニ近イ形狀ヲ呈シテキタ。昭和十七年九月二十四日コレヲ發掘調査シタガ、墳丘中表土ヨリ一尺深イ所ニ於テ地器ノ破片ガ數箇所ニ散亂シテキタノヲ認メタ。更ニ深ク掘リ進メタルニ、古墳ノ西南隅ニ近ク地表下ニ米ノ所ニ四個ノ丸石ヲ積ミ重ネタモノガアリ、ソレヨリ一米位キ北方ニ於テ鐵ノ破片二個ヲ發掘シタノミデ、ソノ他ニハ何物ヲモ見出スコトガ出來ナカツタ。尙ホ此ノ四個ノ石ノ位

置ハ、殘存スル墳丘ノ南側及ビ西側ノ地面ノ傾斜部ヲ古墳ノ原形トシテ考察スレバソノ略ホ中央部ニ當ルトコロデアアル。四個ノ石ハ稍々扁平ナ丸石デ、三個ハ重ナリ一個ハソノ北側ニ脱落シテキタ。石ノ大サハ最上部ノモノガ長徑二十二厘米、短徑十三厘米、厚三厘米、第二段目ノモノガ長徑二十四厘米、短徑十四厘米、厚三厘米、第三段目ノモノガ直徑二十四厘米厚二厘米五毫、下方ニ脱落シテキタモノガ長徑二十七厘米、短徑十七厘米、厚三厘米デアツタ。コレラノ石ハソノ遺存シタ状態カラ見レバ、初メ四個ノ石ヲ積ンデアツタノガ一個ハ下ニ脱落シタノデハナイカト思ハレルヤウデアツタガ、ソノ點ハ確言シ得ナイ。事實ハ三個ガ重ナリ一個ハソノ北側ニ存シタノデアアル。最初コノ石ヲ發掘シタ際、或ハ粘土層ノ周縁ニヨク見ル石デハナイカト思ヒ充分注意シテ掘ツタガ、粘土モ粘土層モ無ク、此ノ石ハ獨立シテキルモノデアツタ。

鐵ハ鐵鏃デ破片ガ二個デアアルガ、一ハ闕ノ部分カラ身ノ一部デ先端半バヲ缺イデキル。身幅二厘米五毫、他ノ一ハ鏃ヲ矢殺ニ緊縛シテキル膨レノ部分デアアル。從シテ此ノ二片ハ一個ノ矢ノ破片カモ知レナイ。

此ノ古墳ハ右ノ如ク、墳丘ノ殘レル部分ヲ殆ンド全部掘ツタガ、墳丘ノ表七ヨリ二米ノ深部ニ於テ右ノ遺物ヲ見出シタノミデアツタ。古墳ノ中ニ斯カル積石ノアツタ例ハ未ダ聞カナイノミナラズ、副葬品モ鐵鏃ノ破片二個トイフ事實ヨリ見レバ、或ハ此ノ古墳ハ既ニ早ク發掘ノ厄ニ遭ヒ、ソノ副葬品ハ殆ンド持テ去ラレ、僅カニ鐵ノ破片ノミ發掘者ノ眼ヲ脱レタノデアアルマイカ。而シテ此ノ積石モソノ際發掘又ハ盜掘者ガ、古墳ノ靈ヲ弔フ意味ニテ積ミ上ケテ置イタモノカ、或ハ上部ニ在ツタ葺石ノ一部ガ落ち込シタモノデアアルマイカト考ヘラレル。勿論ソレハ報告者ノ想像デアアルガ、此ノ古墳ノ表土下一尺ノ所ニ在ツタ埴器ノ散亂モ注意スベキコトデ、嘗テ發掘セラレザリシモノナラバ斯様ニ散亂スル等モ無イノデアアル。併シ茲ニハ積石ト鐵ノ存在ヲ一ツノ事實トシテ報告シ將來ノ參考トシヤウ。

## 第二號墳

第一號、第三號墳ト相對シテ踏足ヲナシ、其間一五〇米字孤平ノ畦圃中ニアリ、墳ハ不規則ナル圓形ヲナシ、高サ三米餘、

東北ニ栴檀樹アリ、其中部ヨリ西方ニカケ約六米方ヲ入念ニ發掘シタルモ何等ノ遺構ニモ達セズ、遂ニ工事ヲ中止シタ。

### 第三號墳 (圖版第二圖上)

六野原古墳ノ東北端ニ位置シ前方後圓トシテ唯一ノモノデアル。長徑六一米、前方幅二一米、後圓部ハ耕跡ノ爲原形ヲ損シ幅三六米殘存、高サ四米三〇、頂上ニ樹齡三〇年許ナル松、外二、三ノ雜樹アリ。墳ノ方向ハ本庄町ノ古墳ニ同ジク西ニ面シ、正シクハ角度方位北五度東デアル。本墳ハ第十號墳ト前後シテ後圓部中央ヨリ掘リハジメ、深サ三米五〇ニ及ビタルモ何等遺物ヲ發見セズ、又奥室等ノ遺構ヲ見ザルヨリ後圓部ノ中心ヲ失セシモノト思ヒ、漸次掘リ廣ゲテ徑十數米、深サ三米餘、人夫ヲ使用スルコト二百餘ニ及ビタルモ得ル所ナクシテ止ミタリ。蓋シ久シキ以前盜掘ニ遭ヒタルモノナルベシ。

### 第四號墳 字桃木畑三、二六三畑地内 (圖版第三圖)

第三號墳ノ南々西約七三米ニアル圓墳デ、字吹上カラ字境ヲ北走スル道路ノ北側ニ恰モ魚ノ切身ヲ置イタ形ヲナシ、幅二米七〇釐、長サ八米、高サ九十釐ヲ殘スノミデアル。元圓墳デアツタモノヲ周圍ヲ削平シ僅ニ中央部ノミヲ殘シソレモ上部ヲ分厚ニ取去ラレタモノデアル。

本墳ハ中央部ノ芝生ヲ先ヅ削去シ、其下ノ封土ヲ入念ニ取去リ、基盤上五〇釐ニ及ンダ所、粘土ノ一片ヲ見ツケ、ソレガ略ホ東西ノ方向ニ走ツテ居タ所カラ粘土層ナルコトガ分ツタ。

サテ此八代ノ古墳ハ縱穴式石室ナルカ、ソシテソレガ割石又ハ切石乃至ハ河原石ヲ以テセラレタモノカ、又ハ木柵デアルカ粘土層デアルカ、柵内更ニ石棺ヲ存シテ居ルカ、是ハ最初カラ興味アル問題トシテ注意サレテキタガ、第一號墳外三墳ヲ發掘スルコト三日ニ及ブモ、未ダ一モ棺柵ニ達セズ、焦塵ト困惑トヲ以テ滿タサレテキタガ、茲ニ至リ一種ノ粘土層ナルコトヲ知ルコトヲ得タ。

サテ粘土ヲ以テ梯トシテノ處置ヲナシタモノハ、縣下兒湯郡妻町西都ノ原古墳ノ發掘調査ニ依リ。昔ク天下ニ知ラル、ニ至ツタガ、京大教授文學博士梅原末治氏ハ、粘土梯ニハ左ノ各種アルコトヲ上代墓制ノ沿革（原史時代ノ研究）ニ述ベラレテキル。即チ

一、粘土ヲ以テ特殊ノ裝置ヲ施シ遺物等々瘞メタ形式、大和國北葛城郡佐味田貝吹山一古墳ノ構造ハ其ノ一例デアアル。

二、基底部ニ木材ヲ並べ遺骸、副葬品ヲ安置シ上部ヲ覆フニ厚キ粘土ヲ以テシタモノ、實例近江國野洲郡大岩山ノ一古墳

（考古學雜誌一二ノ一）

三、粘土ヲ以テ長方形ノ棺狀ノ都ヲ作ツテ其ノ内部ニ遺骸ヲ葬リ副葬品ヲ置イタコト、例ハ山城國久世郡宇治町ノ一古

墳ノ如キ形式（同誌三ノ七）

四、粘土ヲ以テ細長キ船形ノ都ヲ作り、内ニ遺骸ヲ仰臥葬シ覆フニ粘土ヲ以テシ更ニ礫石ヲ以テ周圍ヲ包ムモノ其ノ最モ

著シイ實例ハ學者ノ發掘調査シタ日向西都原古墳群ノ第二號（内藤、今西兩博士調査）、第三號（鳥居博士調査）ノ兩

古墳（共ニ立派ナ前方後圓墳）等是デアアルガ（宮崎縣史蹟調査報告第三冊）近江國ノ東淺井郡ノ一古墳ニモ其ノ例ガ

アル。

五、粘土ト礫石トヲ以テ成ルコトハ前者ト同一デアアルガ、遺骸ヲ包ムニ礫石ノ船形構造部ヲ以テシ粘土ヲ其ノ外ノ覆トシ

タ形式、山城國乙訓郡物集女ノ一古墳ハ其ノ好例デアアル。（京都府史蹟調査報告第一冊）

六、礫石ヲ以テ不整ナ楕圓形又ハソレニ近イ石築物ヲ造ツテ内ニ遺骸ト副葬品トヲ置キ粘土ヲ以テ覆フタモノ（大和國北

葛城郡佐味田寶塚ノ如キ此類デアアル。（佐味田及新山古墳研究）

本墳ハ一種ノ粘土梯ナルコトガ分ツタカラ、シヅカニ封土ヲ去リ其方向ヲ檢セシニ略東西ノ方向ニ一線ヲ引イタ其ノ上ニ巾

五センチ、厚サニセンチ位ニ粘土ヲ置カレタモノデアツタ。シカシマダ之ト或ル角度又ハ正交スル線ハ見ツケナカツタカラ

梯ノ前後左右ヲ決定スルニハ至ラナカツタ。其ノ後以下各號ノ古墳ヲ發掘調査シテ八代古墳粘土梯ノ構造ハ大方長サ二米、

巾一米位ノ長方形ヲ割シ、巾五種内外ト厚サ二種位カラ五種位ニ其界線ノ上ヲ粘土デ覆ヒ掃ラ定メタダケノモノデ時々餘分ノ粘土ヲ一部ニ捨テタ様ナモノモアルガ、西郡原又ハ新田原古墳ノ如キ遺骸ヲ包ンダモノト思フモノハ次ノ七號墳ニ其ノ一例ガアツタ丈デアル。本墳ニハ遺骨ハナク、只刀ノ殘欠ガアツタダケデアル。

遺物刀殘欠、長サ二八種、身巾二、五種、身ノ約半分ヲ失ツテキル。(圖版第三圖上)

## 第五號墳

(圖版第三圖、第四圖上)

此ノ古墳ハ第三號ノ前方後圓墳ト第七號墳トノ中間ニアリ、第三號墳ノ南方ニソノ陪塚ノ如キ位置ヲ占メテキタ。コレモ圓墳デアアルガ、四周ノ畑地ヨリ墳丘ヲ蠶食サレテ形態ヲ著シク損ジ始ンド南北ニ長イ長方形ニ近イ形狀ヲ呈シテキタ。

昭和十七年九月二十九日此ノ古墳ノ發掘調査ヲ行ヒ、墳上ノ草ヲ除キ發掘ニ着手シタルニ、古墳ノ北部ニ於テ地表下一尺ノ所ニ早タモ粘土礫ノ一側邊ヲ發見シタノデ、此ノ礫ノ粘土ヲ追フテ其ノ形ヲ掘リ出シタ。

粘土礫ハ東西ニ方位シ、ソノ一部ハ既ニ耕作者ノタメニ切り取ラレテキタガ、長サ二米二十五種ヲ遺存シテキタ。幅ハ一米十五種アリ礫ノ厚サハ三種位キデアツタ。粘土礫ノ狀態ハ、東端ト西端ハ古墳ノ殘存スル岸ニ達シ何レモ若干切り取ラレテキタ。

礫内ノ上ヲ除イテ遺物ヲ見ルニ、礫ノ東端ヨリ十八種西方ノ所ニ南側ノ梯壁ニ近ク刀一振柄部ヲ東ニシテ東西ノ方向ニアリ刀ノ西端ヨリ三十八種離レテソノ一直線上ニ鐵一本アリ、又此ノ鐵ノ北方二十二種ノ所ニ更ニ鐵一本アリ、何レモ及先ヲ西ニシテアツタ。次ニ刀ト南側ノ鐵トヲ結ブ一直線(東西)上、鐵ノ西方ニ鐵先ガ及ッ北ニ向ケテ置カレテキタガ、鐵ノ及ノ東端ト鐵トノ距離ハ六十四種アリ、又鐵ニハ斧頭一個ガソノ表面ニ鑄ビ附イテキタ。

右ノ遺物ハ皆粘土礫内ニ整然ト置カレテキタガ、鐵ノ南方ニ鐵ヨリ八十六種ヲ距ル所ニ鏡一面ガ鏡背ヲ上ニシテアリ、鏡面ノ一部ニハ小サイ穴狀ノ破レガアツテ此所カラ草ガ生ユ立ツテキタ。又鏡ノ南ニ接シテ劍ノ折レガ一本、劍先ヲ東ニシテ置

カレテアツタガ、ソノ附近ヲ極メテ綿密ニ發掘シタケレドモ此ノ劍ノ殘部ハ遠ニ發見スルコトガ出來ナカツタ。コ、ニ注意スベキハ此ノ鏡ト劍先トノ位置デアアル。前ニ記シタ如ク刀ト鐵ト鐵トハ東西ニ整然ト置カレテキタノニ對シ、此ノ鏡ト劍先トハ意外ナ場所ニ存在シテキル。刀ト南側ノ鐵ト鐵トハ一直線ヲナシテ粘土層ノ南壁ニ接近シテ在ツタノニ、此ノ鐵ヨリ八十六種ヲ距ル南方ニ在ル鏡ト劍先トハ明カニ粘土層外ニ位置シテ居ル。加之、劍ノ殘部ガ裏ハレテ居ルコト、イヒ、鏡ガ鏡背ヲ上ニシテ置カレテ居ルコト、イヒ、殊ニ鏡ト劍先ノアツタ場所ノミ深ク草ガ入ツテキルコト、イヒ、此等ノ事實ハ、皆テ此ノ鏡ト劍先トガ何者カニ一度掘リ出サレテ再ビ此所ニ埋メラレタモノデアアルコトヲ示シテキル。現地ノ狀況ヨリ之ヲ察スルニ、恐ラクハ耕作者ガ畑ヲ擴張シテ此ノ古墳ノ一部ヲ削リ取ツタ際鏡ト劍トガ出土シタノデ驚ロイテ之等ヲ殘リノ墳丘ノ中心部ト思ハレル場所ヲ掘ツテ埋メタモノデアアラウト思フ。劍ハ當時既ニ破損シテキタカ、或ハ鐵先等デ打チ折ラレタカ何レニシテモ尙ホ殘部ガアツタノガ耕作者(發掘者)ノ眼ニ觸レナカツタモノデアラウ、ソレハ粘土層ノ一部ガ切り取ラレテキルコトカラ推定サレルコトデ、此ノ鏡ト劍先トハモトヨリ此ノ古墳ノモノデアツタト假定シテ大ナル誤デアアルマイト思フ。

次に此ノ古墳ヨリ發掘シタ各遺物ニ就イテ少シク詳述シヤウ。

一、刀、圖版第三圖(下6) 刀ハ言フ迄モナク直刀デ平造リデアアルガ、總長七十一種、身ノ長サ五十九種、莖ノ長サ十二種、莖ノ端ハ斜線ヲナシテ圓ニ接シ長〇、八種、幅〇、五種ノ三角形ノ面取りヲナシテキル。身幅ハ三種、棟ノ厚サ〇、八種アリ、鋒ハ豊カニ外曲線ヲ描イテキル。及先ニ近ク大キイ鐵錆ノ垢ガ附着シ又鞘ノ木片モ相當ニ殘ツテヤリ鞘ノ厚サ〇、五種ヲ計リ得ル箇所ガアル。

二、鐵(圖版第三圖下3、4) 鐵ハ二本アリ、何レモ鐵製デ大形デアアル。ソノ一個ハ二ツニ折レテキルガ完全形ニ接ギ合セラルコトガ出來ル。菱形ニ近イ形ヲナシ總長十八種、最廣部ノ幅四種五種アリ、莖ノ部分ニハ矢筈ガ附着シテ居リ、鐵ニ接スル部分ハ櫻ノ皮ノ様ナモノデ寒イデアアル。鐵ノ身ハ最廣部ノ稜ヨリ及先マデハ劍先ノ如ク兩及トナツテ居ルガ、稜ヨリ上ハ

尖ツテキナイ。他ノ一個ハ三ツニ折レテキルケレ共之モ接ギ合セテ完全形ニ復原サレル。總長二十種六耗デ、先ノ尖ツタ獨結形ニ似タ形デ二段ノ突起シタ稜ガアリ、及先ニ近イ方ノ稜間ノ身幅（最廣部）五種、柄ニ近イ方ノ稜間ノ幅三種、中央ノ身幅二種三耗アリ、總兩及ノ極メテ銳利ナモノデアル。

三、鐵（圖版第三圖下5） 鉄ハ及ノ兩端ヲ缺イデ居ル。殘ツテ居ル及渡リ十六種、最廣部ノ幅六種、柄ニ接スル部分ノ兩端ノ距離七種五耗アリ此ノ部分ニ木ヲ挿シ込ム穴ガアルガ、ソノ穴ハ幅一種二耗アリ、鉄ノ此ノ部分ノ厚サハ〇、七種デアル。鉄ノ一端ニ接シテ斧頭一個ガ附着シテ居ル。

四、斧頭（圖版第三圖下5） 斧頭ハ勿論鐵製デ鉄先ニ鑄ノタメ密着シテキテ分離スルコトガ出來ナイ。斧頭ノ大サハ總長七種、及渡四種四耗アリ柄ヲ差シ込ム袋ノ穴ハ長方形ヲナシ長サ二種五耗、幅一種三耗アル。

五、劍（圖版第三圖下2） 椰外ニ鏡ト共ニ在ツタ劍先ハ、ソノ鋒部ヲ僅カニ長サ八種殘シテ居ルニ過ギナイ。從ツテソノ形狀ヲ知ルコトハ出來ナイ。身幅ハ三種三耗デアル。

六、鏡（圖版第四圖上） 鏡モ椰外ニ在ツタモノデ、直徑九種七耗、丸紐デ紐部ノ高サ〇、五種アリ、〇、四種ノ反リヲ示シテキル。背文ハ外圍ニ橢圓文ヲ内圍ニ七弧ヨリ成ル内行花文ヲ有シテキル簡單ナモノデ、縁ハ所謂蒲鋒形デアル。從ツテ此ノ鏡ハ小形ノ仿製鏡デ内行花文鏡ノ一種デアル。

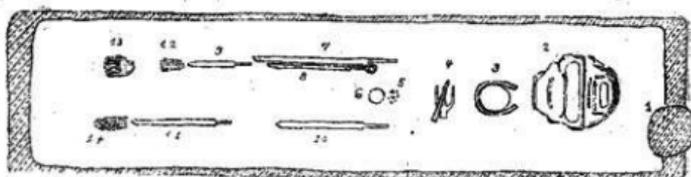
## 第六號墳 （圖版第四—七圖）

此ノ古墳ハ第五號墳ノ東方、郡於郡ヨリ法華嶽ニ至ル舊道ノ南側ニ接シテアリ、圓墳デ一部ヲ破壞サレテキルノミデ墳丘ハ稍々完全ニ遺存シテキタ。

昭和十七年九月二十九日コレヲ發掘調査シタルニ、墳丘ノ頂上ヨリ約一米ニシテ粘土礫ニ達シタ。

粘土礫ハ東西ニ方位シ完全ナル形ヲ殘シテキタガ、他ノ古墳ニ於イテモ同様デアルガ當地ノ粘土礫ハ、單ニ棺ノ四周ヲ知ラ

六野原第六號墳土內實圖 第八圖



14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
鉄塊	鉄塊	鉄塊	銅	銅	銅	環状土器	直刀	鏡	玉	銅	土	土	粘土塊
			六ヶ五物	七ヶ五物	六ヶ五物	六ヶ五物	九ヶ五物	七ヶ五物	五ヶ五物	二ヶ五物	二ヶ五物	二ヶ五物	

シメル程度ニ過ギズ、厚サ四疊内外ノ粘土壁ヲ以テ長方形ヲ描キ東西ノ兩端ノ壁ハ多少厚ク或ル場合ニハ厚サ十五疊ニ達スルモノガアル。此ノ古墳ノ柵ノ如キモノ一例デ、東端ノ壁ハ厚サ十五疊以上アツタ。柵ノ長サ四米二十五疊。幅一米デ柵内ニハ多數ノ遺物ガ整然ト存シテキタ。斯クノ如ク此ノ古墳ハ未ダ嘗テ何者ニモ冒サレザル状態ニテ柵ト遺物トガ存在シタ點ニ於テ今回調査シタ古墳中唯一ノ盛土墳デアツタカラソノ内容ヲ詳シク記シタイト思フ。

粘土柵内ニ遺物ノ存在スル状態ヲ記セバ、柵ノ東端ヨリ三十疊ヲ距テ、柵内中央ニ鏡ガ疊マレタ状態デ置カレ、鏡ニ接シテソノ西ニ兜ガアツタガ、鏡モ兜モ前面ヲ東ニ向ケテ置カレテキタ。兜カラ約二十疊ヲ距テ、ソノ西ニ二本ノ鉾身ガ重ネテ置カレテキタガ、寫真ニ示ス如ク一本ハ三又鉾デ他ハ細身ノ鉾デアリ、三又鉾ヲ下ニ何レモ穂先ヲ北ニ向ケテ横タヘラレテキタ。鉾カラ又二十疊ヲ距テ、勾玉二個ト管玉五箇トガ見出サレ、玉ヨリ約十疊西ニ鏡一面ガ鏡面ヲ上ニシテ存在シタ。以上ノ鏡ヨリ鏡マデノ各遺物ハ柵ノ中央ニ一直線上ニ存在シテキタ。次ニ鏡ヲ中ニ挟ンデソノ左右ニ刀劔ガアツタガ、ソノ位置ハ、鏡ノ北側ニ長イ刀ガ東西ニ鋒ヲ西ニシテ置カレ、ソノ内側ニ之ト併行シテ環頭大刀ガ同ジク鋒ヲ西ニシ

テ置カレテキタ。又環頭大刀ノ西ニハ同ジ直線上ニ短カイ劔ニシテ置カレ、コノ劔ノ鋒ニ接シテ一東ノ鐵ガアリ、此ノ鐵カラ十七種西方ニ又一東ノ鐵ガアツタ。劔ノ南側ニハ長イ刀ト對稱ノ位置ニ劔ガ一振、鋒ヲ西ニシテ東西ニ置カレ、此ノ劔ノ鋒カラ同ジ直線上ニ更ニ一振ノ劔ガ鋒ヲ西ニシテ東西ニ置カレ、此ノ劔ノ鋒ニ接續シテ一東ノ鐵ガ置カレテキタ。尙ホ劔ノ兩側ニアル長イ刀ト劔トノ距離ハ四十種デアツタ。

斯クノ如ク刀ト劔トハ劔ノ兩側ニ二列ニ置カレテアツタガ、此等副葬品ノ配列ノ状態カラ見テ、此ノ柩内ニ收メラレタ屍體ハ頭ヲ東ニ足ヲ西ニシテ直葬サレテキタモノト考ヘラレル。而シテ屍體ノ存在シタ位置ハ、鋒カラ西方ノ柩ノ中央部デ、玉ヲ頸ニ銜テ胸ニ、刀劔ヲ左右ニシテ足ノ兩側ニ近ク置イタモノデアラウト考ヘラレル。以上ノ遺物ノ外ニ、鏡ノ下ニハ斧頭及ビ農具ガ置カレ、北側ノ劔ノ西ニアリタル鐵ノ中ニハ用途不明ノ鐵具ガ一個入ツテキタ。尙ホ柩内ノ遺物配置状態ハ實測圖版ヲ參照サレタイ。

次ニ柩内ニ於テ發見シタ各遺物ニ就イテ詳述シヤウ。

一、刀(圖版第五圖下1・4) 刀ハ二振アリソノウチ一振ハ前述ノ如ク環頭大刀デアツタ。環頭ニ非ザル方ノ刀ハ極メテ長イモノデ、中央ガ折レテキルガ完全形ニ接ギ合セルコトガ出來ル。總長九十五種七耗、身長七十七種、莖ノ長サ十八種七身幅三種、平作りデ棟ノ厚サ〇・七種、莖ハ直角ニ關ニ接シ刃關五耗ヲ計リ得ル。鋒ハ豐カニ外曲線ヲ描キ、身ニハ鞘ノ木片ガ所々ニ附着シテキル。

環頭大刀ハ、總長七十三種アリ、身ノ長サ五十六種、身幅二種七耗、棟ノ厚サ〇・九種デ、莖ハ長サ十三種アリ、此ノウチ柄頭ハ環形ヲナシ、環部ノ長サ四種アリ、莖ノ幅ハ極度ニ狭ク僅カニ〇・七種デ、刃關二種ヲ計ルコトガ出來ル、シカモ棟關ハ殆ンド認め難イ。柄頭ノ環ハ莖ヲ二分シテ曲ゲテキルノカ、其ノ儘曲ゲテキルノカヲ見ルコトハ出來ナイガ、環ノ厚サハ〇・六種アリ、環ノ描ク穴ノ直徑ハ三種五耗アル。尙ホ莖ハ直角ニ關ニ接シテ居ル。コノ大刀ノ環部ニ接スル柄ニ鐵裝ノ金具ヲ殘シテキルガ、金具ハ薄イ鐵板デ柄ヲ卷イタモノ、表半分ヲ遺存シテキル、ソノ長サ四種、幅二種デアルカラ柄ノ幅

ハ四種アツタコトガ察セラレル。又柄部ノ木片ハ關ノ附近ニ鞘ノ木片ト共ニ多ク残ツテキルガ、木片ニヨツテ柄ノ残ツテキル全長ヲ計レバ十四種五耗トナル。更ニ此ノ大刀ハ鋒ニ於テ他ノ大刀ト異ツテキル、即チ今同發掘シタ古墳出土ノ大刀身ノ鋒ガ殆んど皆豊カナ外曲線ヲ描イテキタノニ反シ此ノ環頭大刀ノ切先ハ端切先形ニ角度ヲナシ、鋒ノ先端ヨリ切先ノ描ク斜線ノ接スル刃先ノ接點マデハ一種五耗アル。斯クノ如ク此ノ大刀ハソノ作りニ於テ種々特異ナ點ガアツテ大イニ注目スベキモノデアアル。而シテ此レガ鑿製ノ環頭大刀デアランコトハ明カナコトデアレガ、日向ノ古墳ヨリ環頭大刀ヲ出シタノハ此ノ古墳ヲ以テ最初トナス。

二、劍、圖版第五圖下(3)(3)(3) 劍ハ櫛内北側ニ一振、南側ニ二振、合計三振ヲ出シタ。北側ニアツタ一振(圖版第五圖下(3))ハ三個ニ折レテキルガ接ギ合セテ完全形トナスコトガ出來ル。總長四十三種、身ノ長サ三十二種、莖ノ長サ十一種、身幅二種四耗、厚サ〇、六種デ、關ハ斜ニ四耗出テキル。鞘ノ木片ガ附着シ莖ハ少シク曲ツテキル。此ノ劍ハ三本ノ中ノ最短ノモノデアアル。

南側ニアツタ二振ノ劍ノウチ東方ニアツタモノハ(圖版第五圖下(3))最モ長ク、四ツニ折レテキルガ完全形ニ接ギ合セルコトガ出來ル。總長七十六種五耗、身ノ長サ六十種、莖ノ長サ十六種五耗、身幅三種八耗、身ノ厚サ〇、七種、關ハ〇、九種出テキル。ソノ西方ニ在ツタ一振ハ(圖版第五圖下(3))五ツニ折レテキルガ之モ完全形ニ接ギ合セルコトガ出來ル。總長六十七種五耗、身ノ長サ五十六種三耗、莖ノ長サ十一種二耗、身ノ幅三種二耗、身ノ厚サ〇、七種デ關ハ〇、九種出テキル。端カラ二種八耗ノ所ニ目筈孔ガアル。

三、鉞(圖版第六圖上(7)) 鉞ハ二本アリ一ハ細身ノ鉞デ、他ハ珍ラシキ三又鉞デアアル。細身ノ鉞ハ、總長三十種四耗アリ、柄部ハ袋穂ヲナシ、袋ノ柄ニ接スル端ニハ三角形ニ切込ミガアル。柄部ノ長サ十七種四耗、身ノ長サ十三種、ケラ首ノ幅一種八耗、身幅二種九耗アリ、ケラ首ノ最狭部ヨリ身ノ最廣部ヲナス稜ノ間ハ〇、六種アツテ内曲線ヲ描イテキル。袋穂ノ部分ハ、柄ニ接スル最廣部ノ直徑三種三耗、穴ノ徑二種六耗、三角形ノ切込ミノ深サ一種五耗デ、切込ミノ頂角ヨリ一

條ノ線溝ガ身ノ方へ通フヲキル。コレハ後世ノ鐵身ニ等シイ造リデアアルガ、袋穂ヲナシテキルノデ銚ト呼ブコトガ適當デア  
ラウト思フ。

三叉銚(圖版第六圖上7、下)ハ、總長二十一種、三本ノ枝ト柄トヨリ成ル。柄部ハ長サ四種五種デ袋穂ヲナシ、一般ノ銚  
身ニ似テ刃ニ近イ方ガ幾分小サク柄ヲ差シ込ム端ニユクニ随ツテ幾分大キイ。此ノ最廣部ノ幅四種デ穴ノ直徑ハ二種三種ア  
リ切込ミハ無イタレドモ左右ヨリ鐵板ヲ合セタル合セ目ガ認メラレル。身ノ長サ十六種五種デ三本ノ枝ヲナシ、中央ノ枝ハ  
直線ヲナシ左右ノ枝ハ穂先ハ之ト始シテ平行デアアルガ中央頃ヨリ内曲線ヲ描イテ基部ニ合スル。三枝ヲ合セタル銚ノ總幅ハ  
十二種二種アリ、枝間ノ距離ハ中央部ニ於テ三種八種デアアル。三枝ノ先端ヲ結ブ線ハ一直線ヲナシ、中央ノ枝ハ長サ十四種  
幅ハ附根ニ於テ二種、厚サ同ジク〇、九種デ刃先ハ銳利デアアルガ他ノ部分ハ刃ヲナシテキナイ。ソノ他ノ枝モ同様デアアル。

斯クノ如キ銚ノ出土ハ、我が國ニ於テ未ダソノ例ヲ聞カナイノデ恐ラク之ガ最初ノ出土デアラウト思ハレル。ソノ形ハ農具  
トシテノ三本鐵ヲ思ハセルモノガアルガ、袋穂ノ柄ノ附ケ方ハ明カニ利器タルコトヲ物語ルシ、細身ノ銚ト共ニ置カレテキ  
タコト、及ビ及先ノ附近ヤ枝ノ根元等ニ布ノ遺存レテキルコトカラ、此ノ物ハ布ヲ用ヒタ袋ニ收メラレテキタコトガ察セラ  
レルノデ到底農具ト考ヘルコトハ出來ナイ。要スルニ我が國ノ武器發達ノ資料トシテ貴重ナルモノト謂フベキデアラウ。

四、鐵(圖版第五圖下6—19、21—25) 鐵ハ皆鐵製デ礪内ノ三ヶ所ニ東トナツテ存在シ甚ダ多數ニ上ツタシソノ種類モ  
多イガ、大別シテ片及ノモノト兩及ノモノトニ分ケルコトガ出來ル。片及ノモノハ小刀子形ヲ(圖版第五圖下10、11、17—19  
24、25) ナシ總長十種五種、身長五種七種、身幅一種二種アリ棟關ナク及關ノミデ、莖ハ先端ガ細ク尖ツテキル。兩及ノモ  
ノ、ウチ最モ多イハ廣銚ノ身ノ如キ形ヲナシタモノデ(圖版第五圖下6—11、12、13、21、22)之ハ身ノ長サ七種三種、最廣部  
ノ幅二種アリ、此ノ種ニ大小二種ガアリ右ニ記シタモノハソノ大キイモノニ屬スル。又菱形ニ近イ形ノ身ヲ有スルモノモア  
ルガ(14、15、16)コレハ身長十二種、身ノ最廣部ノ幅三種三種アル。本墳出土ノ鐵ハ大體右ノ四種デアツタ。之等ノ鐵ニハ  
矢殺ノ附着シテキルモノモアルガ、莖ノ入ツテキル部分ハ櫻ノ皮ノ如キモノデ緊縛シ膨レテキル。

五、兜（圖版第六圖上1.5.5）兜ハ顔面ノトコロヲ東ニ向ケテ置カレテキタ。ソノ置カレテキタ状態ハ鉢ヲ上ニ鍔ヲ下ニ恰モ伏セテ如ク置カレテキタ。鉢ト二段ノ鍔ヨリ成リ、鉢ノ頂上ノ八幡座ハ既ニ破壊サレテラシク認メルコトガ出来ナカッタ。頭ノ頂ヲ蔽フ丸イ鉢ノ周圍ヲ上段ノ鍔ニテ卷キソノ顔面ニ當ル一部ハ開イテキル。總テ鍔ノ薄イ板ヲ草デ綴ヂテ作ラレタキル。鉢ノ形ハ中央ヨリ稍々後方ニ最廣部ガアリ、後部ヨリ前部ノ方ガ少シク狭イノデ上部ヨリ之ヲ見レバ卵形ヲ呈シ、ソノ大サハ長二十二釐五耗、最廣部ノ幅十八釐、最廣部ト後部ノ端トノ長サハ九釐五耗、最廣部ト前部ノ端トノ長サハ十三釐デアル。眉庇ハ存在セズ、鍔ハ（圖版第六圖上2.2）二段アリ、上段ノ鍔ハ幅十釐デ鉢ノ後部ヨリ兩側面ヲ卷キ兩端ハ前面ニ於テ後世ノ吹返シニ相當スル如ク鉢ノ端ヨリ前方ニ出デ、キル。鍔ノ鉢ヲ圍フテキル形ハ、兩側面ハ最廣部ヨリ鉢ノ線ニ沿フテ前方ニ出デ、兩先端ハ著シク狭マツテ兩端ノ距離ハ約十釐デアツタ。此ノ形ガ又兜ヲ上方ヨリ見ル際ニ著シク卵形トシテ印象ヅケテキタ。又鍔ハ上縁ガ下縁ヨリ三種長ク其ノ端ハ曲線ヲ描イテキル。第二段ノ鍔ハソノ下ニ埋マツテキタ。兜ノ構造ヲ見ルニ三角形ノ薄イ鐵板ヲ草紐デ綴ヂテ作ツテアル。皮ニヨル綴ヂ方ハ、裏面ヨリN字形ニ綴ヂテ表面ニ出ル部分ハ二ツノ板金ノ接ぎ目ニ丸イ革ガ見エルノミデアル。極メテ巧妙ナ綴ヂ方デ革モ大部分遺存シテキル。又鍔ノ縁ハ草紐デ覆輪ガ施サレテキル。此ノ兜ハ、ソノ構造、形トモニ鳥居龍藏博士ガ東曰杵郡南方村字大貫ノ淨土寺山枯土棺中カラ發掘サレタモノト甚ダ酷似シテキル。（鳥居龍藏博士著「上代ノ日向延圖」八一頁—八四頁參照）

六、鍔（圖版第六圖上3.3）鍔ハ短甲デ、疊マレタ状態デ見出サレタガ、コレハ疊マレテキタノデハナク、ソノ綴ヂ目ガ腐朽シテ斯クナツタモノト思ハレル。コレハ兜ト異ナリ三角形ノ鐵板デハナク、長方形ノ鐵ノ薄イ板ヲ綴ヂテ作ツタモノノデ、鐵板ノ大サハ幅三釐二耗位ノモノデ長短ガアル。又兜ハ草紐デ綴ヂテアルガ、鍔ハ鍔留メデアル。此ノ點モ亦兜ノ製法ト異ツタキル。鍔ノ縁ハ革ヲ以テ覆輪ガ施サレテキルコトハ兜ノ場合ト一致シテキル。綴ヂ目ガ鍔デアツタタメニ腐朽シテ全貌ヲ知ルコトヲ得ナイノデ詳細ニ就イテハ復原ノ日ヲ待ツヨリ外ニ致方ガナイ。此ノ鍔ヲ鳥居博士發掘ノ前記南方村淨土寺山出土ノモノト比較スルニ（同博士著「上代ノ日向延圖」八三頁—八四頁參照）鳥居博士發掘ノモノト形ハ似テキルガ、南方村

出土ノモノガ革綴デアルノニ對シ此ノ古墳ノ飯留メデアル點方相違シテキル。

七、鏡(圖版第七圖上) 鏡ハ直徑十釐六耗、丸紐デ蒲鋒線ノ小形ナ仿製鏡ニ屬スル。コレハ鏡面ヲ上ニ、鏡背ヲ下ニシテ置カレテキタ。注目スベキハ裏面ニ紐ト鏡ヲ包シテ居キタ布トヲ殘シテキルコトデ、紐ハ白イ纖維トナツテ紐穴カラ左右ニ垂レタ儘附着シテ居リ、布ハ紺ノタメニ青色トナツテ鏡背ニ密着シテ居リ折リ重ナツテキル部分ハ三重ニ布ガ重ツテキレ。布ガ如何ナルモノデアツタカハ知ラナイガ、織リ方ハ縱絲ニ比シテ橫絲ガ非常ニ多イ織リ方ニナツテキル。鏡ハ發掘ノ際一部ヲ破損シタガ、紐ノ高サ八耗デ鏡背ノ文様ハ布ノタメニ見ルコトガ出來ナイ。

八、玉類(圖版第七圖下) 玉ハ勾玉二個ト管玉五個トデ、何レモ小形デアル。勾玉ハ、一個ハ長二釐、中央ノ幅〇、九釐、厚サ〇、七釐、頭尾ノ間隔一釐二耗アリ、穴ハ一方ヨリ穿タレ大キイ方ガ徑三耗五、小サイ方ガ二耗デ濃綠色ノ硬玉製デアル。他ノ一個ハ長サ一釐五耗、幅〇、七釐、厚サ〇、七釐、頭尾ノ間隔ハ〇、八釐アリ、穴ノ徑ハ大キイ方ガ三耗、小サイ方ガ二耗デ、質、色共ニ前者ト同様デアル。

管玉ハ五個アツタガ極メテ小形ノモノデ、質ハ出雲石デアル。色ハ三個ハ濃綠色ヲ呈シ二個ハ灰白色ヲ帶ビテキル。濃綠色ノ三個ノウチ二個ハ長サ一釐三耗、徑〇、四釐、穴ノ直徑〇、一五釐アリ、一個ハ長サ一釐二耗、徑〇、四釐、穴ノ直徑〇、二釐アル。灰白色ノ二個ハ長サ一釐五耗、徑〇、四釐、穴ノ直徑〇、二五釐〇、二釐ノモノト、長サ〇、九釐、徑〇、三五釐、穴ノ直徑〇、二釐〇、一釐ノモノトデアル。コレニヨツテ此ノ管玉ガ甚ダ小サク所謂竹玉ニ類スルモノデアアルコトガ知ラレルガ、小サイ勾玉トヨク釣り合ツテキル。

九、斧頭(圖版第六圖上) 斧頭ハ鏡ノ下ニ一個アツタ。總長七釐三耗、刃渡五釐、袋穂ノ長サ二釐三耗、及ノ長サ五釐(但シ片側ハ四釐三耗) 袋穂ノ幅二釐七耗、柄ヲ差ス穴ノ長徑一釐六耗、短徑一釐一耗デアル。

一〇、農具(圖版第六圖上) コレハ斧ニ似テキルガ、後世ノ山鋸又ハ犁ノ類ト見ルベキデアラウカ。袋穂ノ一端ガ開イテ又ワナシテキルモノデ、鐵ノ金具ガ鋸ビ附イテキル。長サ十四釐七耗、及渡五釐五耗、袋ノ柄ヲ挿ス穴ノ長徑四釐、短

徑三種二種アリ、利器トイフヨリハ、土ヲ掘リ起ス農具デ衆ノ一種デアラウト思フ。

一、鐵具 コレハ前ニ記シタ用途不明ノ鐵具デ、鏃ノ中ニ混ジテキタモノデ、最初ハ鏃ノ一種カト思ツテキタガ、三ツニ折レテキルノヲ接ギ合ハセテ仔細ニ見レバ、鏃デ無イコトガ知ラレル。復原シタ形ハ圖版第五圖下20ニ示ス如キモノデ、先端ガ二股トナツテキル金具デアアル。柄部ノ端ハ稍々丸ク曲ゲラレテ二重トナツテ居リ、二股ノ枝ハ先ノ方ハ大體平行デ、基ニ近イ所ハ内曲線ヲナシテ柄部ニ附イテキル。總長十二種五種、二股ニ分レテキル部分カラ枝ノ先端マデノ長サ九種、柄部ノ長サ三種五種、二枝ノ先端ノ距離ハ二種デ、金具ノ幅〇、七種、厚サ〇、四種トイフ小サイモノデアアル。此ノ復原形ヲ見テ感ジタコトハ、何處カデ斯カルモノヲ見タ記憶ガアル。ソノ記憶ヲ辿ツテ鳥居博士ノ發掘品ニ似タ物ガアツタコトヲ思ヒツイタ、即チ前掲ノ同博士著『上代ノ日向延岡』ノ圖版第六八(書物ニヨツテハ圖版六三トナツテキルノモアル)ニ「粘土棺ニ存在セシ銛式鏃」トアルモノ、上段ノ寫真ガソレデアアル。此ノモノニ關スル博士ノ説明ヲ見ルニ、博士ノ説カレテキルトコロハ、此ノ物ノ下ノ段ニアル鏃ニ對スル説明デ、此ノ物ニ就イテハ同書ニ説明ガ無イ様デアアル。此ノ寫真上段ノモノト、此ノ金具トヨク比較對照スレバ、ソレガ同ジ品デアアルコトガ知ラレル。先ヅソノ柄部ノ端ガ丸ク曲ゲラレテキルコトヲ注意シタイ。コレハ鏃ト考ヘルニハ無理デアアル。此ノ曲ゲラレテキル一端ハ何カノ用途ノタメニ曲ゲラレテキルノデアラウガ、金具ノソノ部分ニハ獸ノ毛ノ如キモノガ附着シテキタ、ソノ毛ノ如キモノハ二枝ニ平行ナル一方へ柄部ヲ卷イテ折リ曲ゲラレテキル。即チ柄部ノ端ガ曲ツテキルノハ此ノ毛ガ外レヌヤウニ挟ムタメノモノデアアル。又金具ノ一枝ノ先端ニ近ク小枝ノ如キモノガ出テキル。コレハ博士ノ寫真ノ左枝ノ先端ニ近イ部分ニモ見ラレ右ノ枝ノ元ニ近イ所ニモ見ラレル。又兩枝ニハ布棧ノモノガ附着シテキテ兩枝ハ布デ包マレテキタコトヲ示シテキル。從ツテ此ノ物ハ鏃トハ如何ニシテモ見ラレナイノデアアル。ソレガ何デアアルカハ知り難イガ、同ジク粘土椽内ノ遺物ニシテ、共ニ相似タル甲冑等ヲ出シタ古墳カラ此ノ物ガ二個、同ジ日向國內カラ出テキルコトハ興味アルコトデアアル。ソノ用途ガ判ラナイノハ、元來此ノ物ハ金具ト布、毛等ヨリ成ルモノデアアルタメソノ大部分ノ形ガ遺存セズ金具ノミガ殘ツテキルタメニ解リ難イノデアラウ。其ノ用途ニ就イテハ將

來ノ類例ノ出土ト研究トニ待タネバナラナイガ、此ノ物ノ存在シタ位置ガ、鐵即チ矢ト共ニ在ツタコトハ、鳥居博士ノ場合ニ於テモ同ジデ、サレバコソ博士ガ鐵ノ部ニ入レラレタノデアラウ。コソ事實ハ此ノ物ガ弓矢ト關係アル物デハアルマイカトイフコトヲ示陵スル。斯カル金具ノ上下ヲ布等デ張ルコトハ中ヲ空虛ニスルタメデアラウ、ソウ考ヘテユクト、コレハ稱ニ用キラレタ金具デハアルマイカト想像サレル。稱ニ就イテ「安齋隨筆」ニハ

「上古弓射ル人左ノ腕ニ稱ト云物ヲ革ヲ以テ作り其圓クシテ腕ヲ彈クヲ防グ器ナリ其中ハ空虛ナル故弦當レバ鳴音アリ常用フルハ熊ノ皮ニテ作りテ無文ナリ、伊勢ノ神寶ニ獻ゼラル、稱ハ鹿ノ皮ニテ作り白キ紋ヲ黒ク描ク延喜式ノ兵庫寮式ニ見エタリ、上古稱張ト云フ工人有テ稱ヲ作りシガ後代ハ其工人絶エテナキニ依テ神寶ノ稱ヲ木ニテ形ヲ作り黒ク塗テ銀泥ニテ紋ヲ畫ク今此ノ如シ」

トアル。參考ニ記シテ將來ノ研究ヲ待タウ。

## 第七號墳 字桃木畑三二六〇番畑

第四號墳ノ東南四〇米畑中ニ在ル圓墳デアル。耕鋤ニ際シ東方約三分ノ一ハ削去サレテ全ク畑地トナリ、殘リハ畑地トノ間ニ高サ一米四〇程ノ切取面ガ略東南ニ互リ此高キ一線ヨリ南西ニ徐々ニ低下シ畑地ニ連リ、恰モ勾配ノ緩カナ切妻造ノ屋根ノ片側ヲ殘シテキル様ニナツテキル、ソレデ圓墳トシテノ原形ガ如何ニ變形サレテキルカハ窺ハルルダラウ。聞ケルハ明治ノ末年頃不要存地拂下ノ時地主ハ一旦之ヲ開キテ畑トナシ、其ノ後古墳ナルコトヲ注意サレ荒地トナシタモノトイフ。又發掘見學ニ來テ居タ一老人カラ聞ケルハ開墾當時東方ヲ削去セシ時土器多數ヲ出シタトイフカラ既ニ墳ノ大半ヲ失フタヤウナモノデアル。

墳ハ東邊ノ切取面ガ中央附近ナリト見テ切取面ノ中部約四米ノ間ヲ徐々ニ切開シタガ、現在ノ地表下五〇程切取線ノ北端カラ一米ノ所ニ粘土礫ノ一部ガ露ハレタ、依テ同ジ高サニ其續キテ南方ニ求メタガ須臾ニシテ消滅シタ。思フニ此處ハモト圓

墳頂上カラ一米位下ニアツタノヲ耕鋤ニ依リ今ハ地面下約五〇糎トナリ、シカモ柳ノ大部ハ東方ノ畑地開墾ニ當リ既ニ失ハレ今ハ其一部ダケ残ツヲ居ルモノデアツタ。遺物ハ斧頭一個ダケデ外ニ何モナカツタ。尙ホ他ノ古墳ヲ片ヅケテカラ今一應中央ノ方へ掘進メテ見タガ何モ得ル所ハナカツタ。

斧頭ハ(圖版第八圖上)長サ九糎、柄頭巾四、五糎、横巾三、二糎、及先巾六糎アリ、他ノ鐵片ト鑿着鑄化シ又瘤狀ノ鑄出ヲ異様ノ形狀ヲ呈シテキル。刀子一殘欠、鐵殘欠數片、土師ノ坏殘欠一、何レモ寸法ヲ得ナイ。

然ルニ前記ノ發掘ヲ終ツテカラ約五ヶ月ヲ經テ本年四月ニ至リ地ナラシ作業中右ノ粘土柳アリシ所ヨリ約五米南斜面ノ所ニ新ニ一墳ガ檢出サレテ此第七號塚ハニヶ所ニ埋葬サレテ居タコトガ分ツタ。

此第二ノ墳ハ地下八五糎ニシテ粘土柳ノ上部ニ違シ、柳ノ方向ハ東南ヨリ西北ニ流れ長サ一、二米、深サ四五糎、巾六〇糎舟形狀ニ基盤ノ赤土ノ上ニ處理シ粘土ヲ以テ一糎以下ノ厚サニ全部ヲ被覆シテアツタガ、諸所欠裂破綻シテキタ遺物ハ劍一口(圖版第八圖上)ヲ存シテキタノミデ遺骨ハ既ニ土化シテキタ。

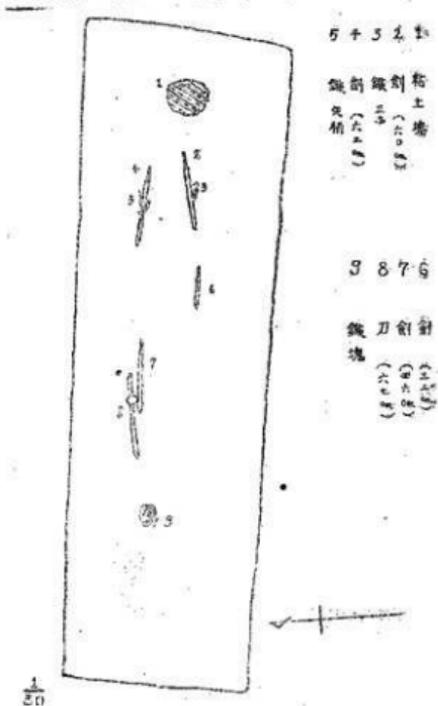
コレニ依ツテ第七號墳ハ塚上ニ二ヶ所ニ埋葬サレタモノデ、シカモ第二ノ墳ハ粘土デ遺骸ヲ包ンダ八代墳トシテハ特殊ノ一例デ、アノ西郡原古墳ノ或者ヤ昭和十四年三月新田原改葬古墳第四十二號ナド、同じ式ノモノデアル。

#### 第八號墳 字桃木畑三二七七番畑 (圖版第八圖下)

第七號墳ノ東東南ニ相並ビ相距ル三〇米、周圍ハ削去サレタルモ高サ二米二〇糎、徑一九米八〇糎、ヤ、完形ニ近い圓墳デアル。

本墳ハ中央部ヲ方一米三〇糎、深サ二米ニ發掘シタガ何等棺槨ヤウノモノガナカツタ。然ルニ東壁ノ黒土ノ間下底カラ三〇糎ノ處ニ何かアルヤウナルヲ以テ注意シテ之ヲ取出シテ見タラ一東ノ鐵鏝デアツタ。此時丁度第四號墳ヲ發掘シテ當地ノ古墳ハ粘土柳ニシテアルコトガ分リ、此處ニモ粘土ノ片ヲ得タカラ更ニ發掘ヲ東方ニ進メ、鐵鏝ノ位置ニ達シタカラ柳ノ位置

第六原野第八號遺物配列平面圖



- 1 粘土
- 2 劍 (一)
- 3 劍 (二)
- 4 劍 (三)
- 5 劍 (四)
- 6 劍 (五)
- 7 劍 (六)
- 8 刀
- 9 鐵塊
- 10 鐵塊

モ次第二明了トナリ東々南カラ西々北ニ長方形ヲ割シテ其巾一米五〇糎、長さ二米ノ線上ニ粘土ヲ置キ其ノ中央ノ左右ニ刀二口、刀子一口、更ニ劔刀鐵鏃ナドヲ出シタ、中央ニ遺骨アリシ筈ナルモ全ク腐朽シテ骨片ノ一ツダモ檢出スルコトハ出来ナカツタ。

本墳副葬品ノ排列ハ次圖ノ通デアル。

リ(刀第一號、劍第二號)刀ノ鋒ヨリ七〇糎西ノ稍中央ニ鐵鏃ノ一團アリ(最初ノ發掘ニヨリ檢出シタモノ)之ヲ東方カラ見た右側ノ一列トスル。

コノ一列ノ南方ニ〇糎ヲ隔テ第一號ノ劔ト畧相對シテ劔一口アリ、矢股莖ハ東方ニナツテキル(劍第三號)其ノ南側ニ鐵鏃

粘土都ノ長邊ハ(南北ノ二邊)南八十度東ノ方向ニ一米五〇糎ノ巾ヲ以テ東々南ヨリ西々北ニ流レ、其長さ約二米之ト正交スル一線ニテ東方ヲ限ラレ長方形ノプランヲナシ其線上ニハ二糎乃至三糎ノ厚サニ粘土ヲ置キテ壙ノ位置ヲ定メテアツタガ西邊ノ線ハ明カデナカツタ。

遺物ハ東邊ヨリ一米五〇糎、北邊ヨリ五〇糎ノ所ニ劔一口(劍第一號)莖ヲ東方ニシテ置カレ十數本ノ矢ヲ其北側ニ並ベテアツタガ筈ト鐵鏃トガ一カタマリトナリ、ソレヨリ西方七五糎刀ト劔各一口ア

## 三箇アル第三號劍ヨリ七〇種西方ニマタ劍一口アツタ。(劍第四號)

本墳ノ遺物ハ現在ノ墳丘ノ中央部ヨリモ著シク東方ニ偏シ割ラレタ郡ノ東端約一米ダ畑トナリ居レルガ、東端ハ第七號ト同ジク、ソシテ周邊ノ狀況カラ推察スルト第七號ヨリハ、モツト久シキ以前ニ耕鋤ニヨリ切崩サレ現在ノ狀態トナツタモノト思ハレル。

劍第一號(圖版第九圖上<sup>1</sup>) 全長六二種、内身ノ長サ五一種、身巾圍ヨリ六種ノ所デ三、三種、莖ノ長一〇、五種、尖端少シク折レテキル、ソノ折口カラ三種ノ所ニ莖先孔折口カラ四種七種ノ所ニ目莖孔ガアル。

劍第二號(圖版第九圖上<sup>3</sup>) 殘缺デアアル、鋒近ク折レ殘リノ全長六〇種、身幅ハ中部デ三種七種、莖長サ一二種七種、尖端カラ二種七種ニ目莖孔ガアル。

劍第三號(圖版第九圖上<sup>4</sup>) 全長四六種、内身長三八種、身幅三種二種、莖長サ八種。

劍第四號(圖版第九圖上<sup>5</sup>) 全長三三種、内身長サ二五種五種、身幅中部デ二種五種、莖長サ七種五種。

刀一口(圖版第九圖上<sup>2</sup>) 殘缺、全長六七種、内身ノ長サ六五種五、身幅二種八種、背幅七種、身ハ鋒一種程折レテキル身ヲ布様ノモノデ卷イテアツタヤウデ所々ニ其痕跡ヲ留メテキル。莖ハ一種五種ノ所カラ折レテ殘リハナカツタ。以上ノ刀劍ハ土中スルコト久シク稍ヲ殘シテキルモノハ一モナカツタ。

鐵鏃 大形二種、其一ハ有莖蓋形ナルガ二段ノ菱ヲナスコト圖ノ如ク他ニ類型ヲ見ザルモノデアアル。長サ一三種、幅ハ外第十圖 六野原第八號墳出土鐵實測圖



ノ菱ヲナス所ニテ四、四種、厚サ〇、四五種、内ノ菱ニテ幅二、六種、筧ヲ存シテキル。其二ハ内ノ菱ヲ缺キ長サ一三種、菱ノ幅四、五種、厚サ〇、四五種アル。他ハ小形デアアルガ、一東十數本ヲナシ有莖柳葉式ノモノ、有莖柳葉式ノモノト相半バシ、出土ノ狀態ヨリ見レバ物ニ入レタ儘ト思ハレルモノデアアル。

## 第九號墳

第九號墳ハ、第三號前方後園墳ノ東方、第三號墳ト第六號墳トノ中間ニアリ、園墳デアルガ、墳丘ハ上部ヲ著シク低メラレ又形モ破壊サレテキタケレドモ尙ホ古墳トシテ認メラレ得ル程度デアアツタ。

昭和十七年九月二十八日此ノ古墳ヲ發掘調査シタガ、表面ノ草ヲ剝ギ取ルヤ、墳丘ノ中央ニ須惠器ノ破片ヲ見出シ、ソノ北方ニ當ツテ早タモ粘土槨ノ一部ヲ認メタ。須惠器ハ腹カ高坏ノ一部ト考ヘラレタガ、突起シタ線ノ上下ニ櫛目ノ波形文様ヲ附シテキタ。

粘土槨ハ東西ニ方位シ、東部ヲ破壊サレテキタガ、槨ノ長サ三米十糎、幅五十糎アツタ。

槨内ノ遺物ヲ見ルニ、槨ノ西端ヨリ五十七糎東方ニ柄ヲ西ニシテ刀一振ガ、槨ノ北側ニ接シテ東西ニ在リ、刀ノ鋒ニ當ル槨ノ南側ニハ鐵及ビ斧頭、鋏其他ノ鐵片ガアリ、又槨ノ西端ヨリ二米東方、即チ刀ノ東ニ當ル槨ノ中央部ニ朱ガ直徑二十糎ノ地面ニ附着シテキルノヲ認メタ。朱ノ附着シテキル状態ヲ見ルニ黄土ノ上ニ朱ガ附イテキルノデ、此ノ古墳ハ槨ノ底ニ黄土ヲ敷イタノデアアルマイカト考ヘラレタ。其他ニ副葬品ハ見出サナカツタ。

發掘ノ副葬品ヲ詳述スレバ次ノ通りデアアル。

一、刀(圖版第九圖下6) 刀ハ一振アリ、柄ノ端ヨリ十八糎ノ所ガ折レテキルガ、完全形ニ接ギ合サレル。總長九十六糎今回發掘ノ盛土墳カラ出土シタ刀劍中最長ノモノデアアル。身ノ長サ七十八糎、身幅二糎八糎、棟ノ厚サ〇、七糎、莖ノ長サ十八糎、平造リデ圓ハ破壊サレテキルガ直角ヲナシ〇、八糎出テキル。柄頭カラ四糎ダケ莖ノ幅ガ狭ク寫眞ニ見ル如キ特徴アル形ヲナシテキル。鋒ハ他ノ大部分ノ刀ト同ジク豊カニ外曲線ヲ描イテ居ル。此ノ刀ニモ鞘ノ木片ガ圓ノ部分ニ遺存シテ居ルノガ認メラレル。

二、鐵(圖版第九圖下45) 鐵ハ完全ナモノガ一本、他ハ破片デアアツタ。完全ナモノハ杓子ニ似タ形デ、總長十一糎五

耗最廣部ノ幅一種三耗アリ兩及ヲナシテキル。

三、明器(圖版第九圖下) 此ノ古墳ヨリ見出サレタ明器ニ斧頭、鍬等ガアル。何レモ鐵製デアアルガ、極メテ薄イ鐵デ作ツタモノデ、斧頭(同圖下3)ハ長サ四種三耗、及渡四種三耗、袋穗ノ形ヲナシ柄ノ長サ二種、身ノ長サ二種三耗、穴ノ長徑一種二耗、短徑一種デ、袋ノ部分ニハ木ノ柄ヲ差シテアル。ブリキノ如キ薄イ鐵板ノ中央ニ兩側カラ切目ヲ入レテ、上部ヲ兩端カラ曲ケ込ンデ袋穗トシタモノデアアル。

鍬(同圖2)モ及渡六種、幅三種デ、コレモ同ジ様ナ薄イ鐵板ノ長方形ノモノヲ、兩端ヲ曲ケ込ンデ鍬ノ形ヲ現ハシタ程度ノモノデアアル。

外ニ二個ノ鐵片ガアルガ、一ハ鎌デ(同圖1)長八種、幅二種ノ薄イ長方形ノ鐵板デ、ソノ一端ガ曲ツテ折レテキル。他ノ一ツハ總長七種、幅一種ノ一端ノ尖ツタ鐵片デ、コレモ尖ツテキナイ方ノ端ガ曲リ加減ニナツテ折レテキル。

而シテ此等ノ明器ハ、何レモ稍々厚イ同質ノ布ガ附着シテキルコトデアアル。布ノ附着ハ斧頭ニ於テ最も多ク認メラレルガ、此ノ點ヨリ見テ此等同ジ布ニ包マレルカ、袋ニ入レラレテキタモノデアアルコトヲ示シテキル。

## 第十號 墳 (圖版第十圖)

此ノ古墳ハ當地古墳中デ墳丘ノ最も完全ナ形ヲ遺存シテ居リ且ツ又最も大ナル圓墳デアツテ、第三號ノ前方後圓墳ト對立シ當地古墳群中ノ白眉トモイフベキ形狀ヲ呈シタ。

昭和十七年九月二十三日、同十月二日、十月三日ノ三日間ニ互リ此ノ古墳ノ發掘調査ヲ行ツタ。最初ノ九月二十三日ニハ發掘人員ノ寡少デアツタノト古墳ガ相當ニ大キカツタノデ、先ヅ中央部ヲ發掘シタガ、古墳ハ葺石ヲモツテ蔽ハレテキタケレドモ葺石ハ中央部ニハ稀薄デアツタ。發掘ヲ始メルト間モナク中央部ノ地表下約四十五種ノ場所ヨリ早タモ鏡一面ガ鏡面ヲ上ニシテ刀、劍、釘等ノ破片ト共ニ見出サレタ。シカモノノ四周ニハ粘土椰毛無ク、コレヲノ遺物ハ三尺四方位キノ箇所ニ

一塊リトナツテ見出サレタ。

此ノ古墳ニ就イテハ、八代村宇伊佐生ノ清水藤吉ナル者ガ、附近(古墳ノ西南)ノ畑ヲ耕作中、長イ刀ノ折レタモノヲ掘リ出シタコトガアリ、ソレヲ又此ノ古墳中ニ埋メタトイフ傳説ガアル。發掘以前ニ其ノ埋メタトイフ地點ヲ確メヤウト思ツタガ、當ノ藤吉ハ既ニ死亡シソノ子ハ出征中トイフコトヲ遠ニ確メルコトガ出来ナカッタ。然シ此ノ十號墳ノ附近ハ地下式古墳ノ群在スル地帯デアルカラ、此ノ傳説モ或ハ事實ト認ム可キデアラウカト思ハレル。此ノ傳説ガアルコト、遺物ノ存在ガ餘リニ淺過ヤルコト、又標モ棺モ認メラレズ、ソノ存在ガ不規則デアルコト等ノ理由カラ、此等ノ遺物ハ或ハソノ後ニ埋メタモノデハ無イカト思ヒ、更ニ本墳ノ棺槨或ハ遺物ガアリハシナイカトソノ底部ヲ深ク約三米ノ深サ迄掘ツタガ、ソレヲノモノヲ發見スルコトハ出来ナカッタ。依テ十月二日、三日ノ兩日再ビ本墳ノ殘部ヲ掘ツタガ、遂ニ何物ヲモ見出シ得ナカッタ。尤モ發掘ノ途上ニ於テ須惠ヤ彌生式土器等ノ破片ヲ多數發掘シタ。彌生式土器ノ破片ハ封土中ニ含まレテキタモノデ須惠ハ附近ノ畑中ヨリ投ケ上ケラレテキタモノガ多イト思ハレタ。又古墳ノ西側ノ甕ノ方ヲ掘ツタ際葺石ガ積石狀ヲナシテキル部分ヲ認メ、或ハ石槨デハナイカト思ヒ發掘ヲ續ケタガ、天井石ト思ハレルモノモナク何物ヲモ得ルコトハ出来ナカッタ。

右ノ如キ次第デ最初ニ掘リ出シタ遺物ハ到底此ノ古墳ノモノトハ考ヘラレナイガ、他ニ遺物ガ無イトスレバ此ノ古墳ノモノトシテ一應ハ取扱ハネバナラナイデアラウ。然シ發掘調査シタ感想トシテハ、恐ラク此ノ古墳ハ盜掘ノ厄ニ遭ヒ、最初ニ掘リ出シタ遺物ハ傳説ノ如ク、附近ヨリノ發掘物ヲ後ニ埋メタモノデアラウトイフ感ヲ深クシタ。サテ最初ニ發掘シタ遺物ハ次ノ如キモノデアツタ。

一、刀(圖版第十圖上4) 刀ハ七ツニ折レタ破片デアツテ、接ギ合セテモ完全形ニ復原スルコトハ出来ナイ。身幅二糎九耗デ、鋒ハ豊カニ外曲線ヲ描イテキル。

二、劍(全圖3) 劍モ六ツニ折レタ破片デ、接ギ合セテモ完全形トハナラナイ。身幅三糎三耗アル。

三、鏡(圖版第十圖上1及下) 鏡一面ハ完全デアアル。直經九釐五毫、九紐デ高サ〇、六釐、反リハ〇、四釐、裏面ニハ紐ノ附着シテキタ痕跡ガ認めラレ、表面ニハ布目ノ痕跡ガ一部ニ見ラレル。鏡背ノ文様ハ紐座ノ四隅ニ四ツノ突起ガアリ外帯ト、ソノ内側ニ鋸齒文二帯ヲ圍ラシ外縁ハ蒲鉾線デ、四ツノ突起ノ周圍ニ多數ノ小突起ガアル。即チ乳文鏡ノ一種ト思ハレルデアアル。

四、鉄鏃(圖版第十圖上2) 四角ナ断面ヲ持ツ鐵製ノモノデ、長サ九釐以上アリ、ソノ一端ハ尖ツテキル。斯カルモノ七個ガ鑢着シテ發見サレタ。他ノ出土ヨリ推シ鉄鏃ノ東ニナツタモノト思フガ朽敗シテ其形式ヲ彼是ト記述スルコトハ不可能デアアル。

### 木脇村内ノ圓墳 (第十三號)

縣道ノ三叉路ヲ以テ八代村ト境スル木脇村ノ内ニ、谷テ圓墳ガ二基アツタトイフガ、今ソノ形態ヲ認メ得ルモノハ殆ンド無イ。タダ一基ハ民家ノ裏側ニ稍々土地ノ高イ部分ガアリ、ソノ遺跡ト辛ウジテ認メ得ラレル程度デアツタ。

昭和十七年十月三日此ノ地ヲ發掘調査シタガ、現地ハ吹上ヨリ東北ニ走ル道路ニヨツテ墳丘ガ切り取ラレテ居リ、此ノ道路ヨリ更ニ小徑ガ直角ニ西ニ通ジテキルトコロデ、ソノ兩路ノ合スル點ニ近ク地表下十釐内外ノ所ニ粘土層ノ一部ガ東西ニ走ツテキルノヲ認メタガ、ソノ層ノ在ル部分ハ溝ニナツテキタタメ遺物ハ何物ヲモ見出スコトガ出來ナカツタ。

## 地下式古墳

日向ノ地ハ古墳至ル所ニ分布シ、中ニモ一ツ瀬、小丸川ノ沿岸タル兒湯郡ノ平野最モ多數デ、之ニ次テハ大流川ノ流域タル宮崎、東諸縣ノ沿岸平野、五ヶ瀬川流域ノ延岡、南方、其上流ノ高千穂等ニ多イ。古墳ノ種類カライヘバ圓墳最モ多ク、前方後圓式、柄鏡式、瓢形式、帆立貝式ノ各種ヲ具備シ、方墳モ六七基ヲ數ヘ、一方ニハ横穴古墳モ相當ノ數ニ上ルガ、更ニ地下式横穴ナル古墳ガアル。

### 地下式古墳所在地ノ地形及ヒ墳ノ形狀

地下式古墳ハ其ノ殆ンド凡テガ眺望ニ富メル臺地ノ上ニ在ル、日向ノ臺地ハ其下層ハ第三期層デアルノヲ普通トシ、ソノ上層ハ川原石ノ榮々タル洪積層デ、次ハローム層デアル、ローム層ノ上部ハ表土デ腐植土トナツテキル、コノローム層ハ赤褐色又ハ黒褐色デ、下部ニ至ルホド堅ク、厚サハ三四尺カラ七八尺モアリ穴ヲ穿ツニ堪ユル、地下式古墳ハ斯ル土質ノ所ヲ選ビ先ヅ地下堅ニ穴ヲ掘ルコト數尺デ、下底カラ横ニ羨道ヲ穿ツコト二三尺又ハ三四尺、其奥ニ玄室ガアル。玄室ハ羨道ヨリハ一層掘廣ゲテ、ソコニ遺骸ト副葬品トヲ納メタモノデアル。玄室ノ入口ハ岩石又ハ土塊デ塞ガレ入口カラ羨道部マデハ土モテ埋メラレタルコト圖ノ如クデアル。墳口ニハ何モ殘ツテ居ナイノヲ普通トスルガ、稀ニ平石ヲ以テ塞イダノモアル。封土ハ之ヲ缺クガ、時ニ之ヲ有スルノモアルヤウデアル。

### 地下式古墳ニ關スル從來ノ記錄

寛政庚申五月ニ出タ桂川忠良ノ『桂林漫錄』ニ左ノ記事ガアル。

寛政改元ノ春日州諸縣郡六日町トイフ所ノ彌右衛門トイフ農夫、埴田ニ流レヲ引カンガ爲溝ヲ掘ルコト數尺、忽チ一ノ古塚ニ逢フ、穴ハ横ザマニ掘リタリ、棺材既ニ朽チタルニヤ一片ノ板ヲ見ズ、穴ノ四邊ノ赤カリシトイフハ棺ヲ實ラタル朱ノ色ノ殘レルナルベシ、穴内骸骨ナク齒一枚、鏝三枚、刀身五把、鐵甲冑一點、玉數顆(俗ニイフ勾玉管玉ト稱スルモノ)、其他遺缺ノ

モノ若干ヲ獲タリ鐘ハ博古圖ニ載スル所ノ四乳鐘ニシテ(印羅鐘ニシテ一ホク殿)純青翠ノ如ク鏡背ノ花紋細キコト髮ノ如ク纖毫ノ模糊ナク刀ハ長短ノ差アルノミニテ反ナシ、土銹骨ヲ侵シテ其狀ヲ有セズ、甲冑モ亦繡積朽敗シテ全物ヲ見ルコトヲ得ズ云々

ソノ文中「溝ヲ掘ルコト數尺忽チ古冢ニ逢フ穴ハ横ザマニ掘リタリ云々」トハ實ニ地下式古墳ダトイフコトヲ示スモノデ、實ニ地下式古墳ヲ取扱フタ最初ノ記錄デアル。

明治十年、日向國本莊村劍柄神社祠官宮永眞琴氏ハ本莊村(後入宮)古陵墓見聞圖說ヲ著シテ松原塚、猪塚、樺塚及ビ鈴塚ナドノ附近ニ在ル地下式墳ニツキ記錄シ出土ノ遺物ヲ舉ゲテキル。

明治卅二年故理學博士坪井正五郎氏ハ日向ニ於ケル石器時代遺蹟及ビ古墳ヲ調査シ、其大要ヲ史學會例會ニ發表セラレタ、ソノ記事ハ史學雜誌第十卷第六號ニアル、曰ク

(前略) 塚ハ平地上ニ柳ヲ造リ其ノ上ニ土ヲ盛リタルヲ常トスレドモ日向ニハ此ノ他地下ニ土窟ヲ作り其ノ上ニ土饅頭ヲ築キ上ケタルモノアリ、故ニ此土饅頭ヲ去リテ耕地トシ其ノ上ヲ馬歩行スルトキ土陷リテ馬踏ミ込ムコトアリ云々

其ノ後文學博士喜田貞吉氏ハ日向國史上代篇ヲ書カンガ爲、再三日向ノ史蹟ヲ探訪サレ本庄町武居新氏ノ宅地内ナル地下式古墳ヲ調査シ古墳墓年代ノ研究(歷史地理第二十五卷第六號)ニ發表サル、ニ及ビ、初メテ一部考古學者ノ注意ヲ惹クニ至ツタ。

當時私ハ職ヲ鹿兒島縣ニ奉ジテキタガ、此ノ記述ニ動かサレ日向各地ヲ屢訪シテ敗壞セル地下式古墳ヲ調査シ「九州南部ニ於ケル地下式土墳」ナル一編ヲ考古學雜誌第九卷第八號ニ發表シタ。其ノ後本縣ニ職ヲ奉ジ史蹟ノ事ニ當ルニ及ビ各地ノ地下式古墳ヲ見タガ、縣ノ史蹟調査報告ニハ記載シタモノノ、遺物等ハ右雜誌ニ出シタ以外ノモノハ別ニ見當ラナカッタカラ學界ニ報告スルコトモシナカッタ。

#### 現在ニ於テ知ラレタ地下式古墳ノ所在

地下式古墳ハ決シテ九州南部ニ限ラレタモノデハナイ、喜田博士ニ依ルト福岡縣豊前國筑上郡黒土村字堀立(伊東屋四郎氏報)ニアリ

トイヒ、其他赤羽山ノ古墳(考古葬器五卷第十)越前國(傳士)東京小石川(上田三平)等ニモアルトノコトデ、其ノ分布ハ本州地方ニモ案外多カルベキヤウデアル。又笠井新也氏ニヨツテ報道サレタ阿波式石棺即チ箱式石棺ノ如キモ地下式古墳ニハ相違ナカラウガ、コレハ前期式古墳デ私ノコ、ニイフ地下式古墳トハ全然別系統ノモノデアル。今日隅ノ兩國ニ知ラレタモノヲ舉グレバ左ノ通りデアル。

- 一 日向國東諸縣郡本庄町六日町
- 二 同 宮王丸
- 三 同 犬熊祝子園
- 四 同 十日町
- 五 同 同 八代村大字深年字寺原
- 六 同 同 大字八代北俣字六野原
- 七 同 大字同 字大外
- 八 同 大字南俣
- 九 同 同 綾町
- 一〇 同 同 高岡町大字浦ノ名字茶屋原
- 一一 同 同 字久木野
- 一二 同 西諸縣郡小林町大字東方二ノ原
- 一三 同 同 大字細野字宮ノ下
- 一四 同 同 飯野町大字原田字南原田
- 一五 同 同 同 五日市

- 一六 同 真幸村島ノ内
- 一七 同 高原町西麓
- 一八 同 北諸縣郡高城町有水
- 一九 同 志和池村陣
- 二〇 同 三股村三王原
- 二一 同 高崎町繩瀬
- 二二 同 南那珂郡福島町大字西方東原
- 二三 同 郡城市植村
- 二四 同 宮崎市下北方
- 二五 日向國兒湯郡妻町西部ノ原
- 二六 同 三納村大字平郡字井ノ上
- 二七 同 字射場ノ上
- 二八 同 三財村前原
- 二九 大隅國噲嚙郡大崎村大字假宿字古牟
- 三〇 同 肝屬郡東串良村大字川西別府原
- 三一 同 西串良村大字岡崎字小塚字和田馬場
- 三二 同 高山村大字野崎字塚崎
- 三三 同 大字新富字上ノ馬場
- 三四 同 字永山

三五 同

字和田ノ上

三六 同

字錢神ケ尾

三七 同

始良村大字麓字西原

三八 同

大字下名字末次

三九 同

始良郡粟野町大字北方字池ノ川

四〇 同

吉松村大字川西字堀ノ原

## 八代村六野原ニ於ケル地下式古墳

本脇村三名カラ三財及ビ都於郡ニ通ズル道路ヲ開鑿スルトキ、字吹上カラ六野原ノ登リ口ヲ切開シテ地下式古墳ニ掘リ當テタ。昭和六年私ハ佛人アグノール氏ヲ案内シテ其縦断面ヲ目撃シ、此處ニモ地下式古墳ノアルコトヲ知ルコトガ出來タ。其ノ後昭和十二年字六野原封土墳第十號ノ西址カラ十數米ナル字大外ノ桑畑ニ飼牛ノ踏ミ込シテ古墳ノアルコトヲ八代村役場カラ届ケテ來タノデ同地ニ急行シテ取調べヲナシタガ、徑二米五〇釐、幅一米ノ地下式古墳ナルコトガ分ツタ、コンナコトデ今回我々ノ調査ヲ命ゼラレタ八代封土古墳ノ近傍ニハ相當ノ地下式古墳ノアルコトヲ豫想シテ居タ。ソレデ封土墳ノ移轉改葬ガ一通リスムト第二段ノ仕事ニ取懸ルベク心構ヘヲシテキタノデアアル。果セル哉昭和十七年十月十七日封土墳第二號ノ東南約三十米ノ所ニ發見セラレテカラ昭和十八年五月二十日地均シ工事終了マデニ檢出サレタ墳ハ二十數基ニ達シタ。今是等ノ各墳ニ就テ記述スルコト、スル。

## 第一號墳 字狐平三三四六地内

字狐平ニ於ケル整地工事ハ西北ヨリ東南ヘ「レール」ヲ敷キ、北東部稍高地ノ土ヲ次第ニ取去リ西北ノ低地ニ送ルノデアアル

ガ、封土墳第二號ノ西方數米ノ所デハ其切取面ノ高サハ一米ヨリ二米ノ間ニアツタ。此封土墳第二號ノ南側ヨリ東南へ約二〇米ノ處ニ地下式古墳ヲ工事中檢出シタ。墳ハ表土ヨリ直下一米二〇釐ノ所ニ忽然地盤ガ洞中ニ落下シタ。即チ地下式墳ノ奥室ヲ踏込シテ入ル。奥室ハ略東西ニ流レ長サ一米五〇釐、南北ノ巾一米二〇釐、高サ一米二〇釐、中ニ東西ニ流レテ遺骨ガアリ、東方ニ頭部ヲ置キ伸展葬ニシテアル、遺骨ノ左右ニ刀二口、斧頭一、鉄鏃十一本、鏃一ツ出シタ。尙ホ東壁ニ近ク頭部ノ奥ニ甲一領ガアツタ。

刀第一號(圖版第十一圖上) ハ全長九九、五釐、莖長サ一八、五釐、鞘ガ刀身ニ鑢着シテキル爲、身巾ノ寸法ヲ得難ク柄ハ全ク朽腐シ去リ、莖ハ其ノ巾二、四釐、背部ノ巾一釐、前部ノ巾〇、五釐ヲ計ヘ得ル。

刀第二號(同圖上) ハ全長一米三、五釐、身ハ長サ八五釐、鞘鑢着シテ莖トノ間明瞭デナイ。莖ノ長サハ一八釐、柄ハ巾一、四釐ノ綠銅ニテ製ラレ、柄頭ハ腐レテ分ラヌガ緣ヨリ次第ニ細クナリ葛繩デ縛リ糸ノ稍大キヲ用キテアル。

斧頭(同圖上) 長サ一二釐、頭部ハ鐵ヲ左右ヨリ折曲ケ柄ヲ挿込メルヤウニシテアルガ鑢化甚シク孔及其ノ深サハ計ラレナイ、及先ハ巾四、三釐アル。

鐵鏃(同圖上) ハ合セテ十一本アツタ、鑢化甚シイ有蓋式刀身形デ腸線ガツイラキル、矢ハ存シテナイガ、ソレデモ筈ノ竹ト糸卷ヲ存スル。

鏃(同圖上) ハ長サ一九釐、及先ハ内曲シテ銳利デアル、背部ハヤ、厚ク巾〇、四釐モアル、穂先ヨリ一〇釐折レ二片トナツテキル、其折レ口ハ鍛ヒニ依ルコト刀身ノ如キヲ見ラレル。

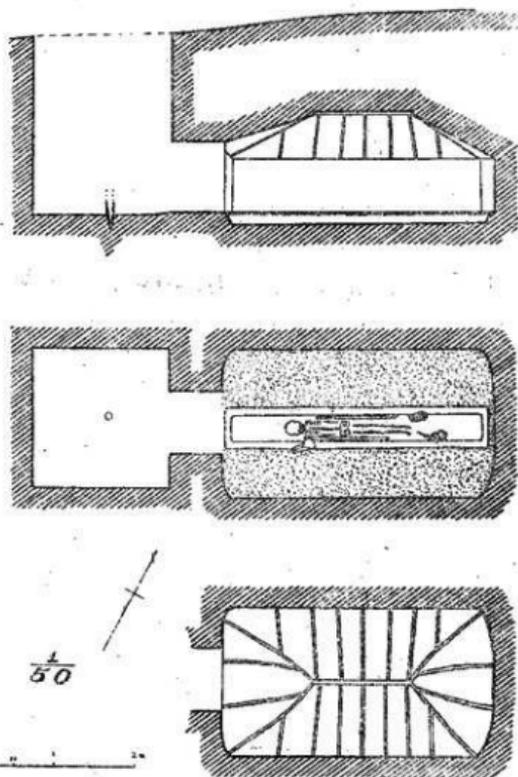
甲(同圖上) ハ短甲デ鐵板ヲ横ニ鑢デ矧キ合セ、上縁ト裾ハ革ノ編綴ニナツタモノデアルガ三枚ニ毀レ、其ノ他小破片トナツテキタ。

## 第二號墳

字狐平三三四六番畑地内

(圖版第十一下)

填古穴横式下地號二第原野六 圖一十第



封土墳第二號カラ南南東五二米ノ所ハ三二四六番畑ノ東端ニ當リ、多少小高クナリ、封土墳第一二號トシテ取扱フタ來タカラ之ヲ開掘シタガ、地下約一米ニ及ビテ何等得ル所ガナク至ク斷念シタノデアワタ。然ルニ整地作業ガ此處ニ及ンデ來テ切

取面ノ高サ一、三米ヲ算スルヤウニナツタ時端ナク地下式古墳ヲ檢出シタ。

墳ハ地表下二、二米デ一、八平方米ノ壓穴ノ下底ニ達シ、羨道ハコレヨリ東々北ノ方向ニ其中部ニ連リ幅七六糎、長サ六五糎高サ八六糎アリ、奥ニ女室アリ女室ハ長サ三、三米、幅一、八米之ヲ平面ニシテ見ルトキハ入口ト奥壁ハ稍彎曲シテ左右兩壁ニ接シテキタ。開掘サレタ天井ハ四注造ニナツテ羨道ヨリ見テ妻入ニナツテキル、棟ノ高サ一、二二三米、壁面六五糎ノ所ニ落チ

長サハ一米二〇糎、其端カラ羨道マデ一米一〇糎、他ノ一端カラ奥壁マデ一米、共ニ傾斜ヲナシテ左右ハ屋根ヲ形成シ而シテ棟ノ兩端カラ四隅ヘ棟ノ中線カラ左右兩壁ヘ幅四乃至五糎、深サ三乃至四糎ノ溝ヲ通シ屋根ノ各部構等ノ狀態ヲ明了ニ示

シテアル。(上圖 参照)

女室ノ底面ニハ屍床ガ施シテアリ、羨道ヨリ向ツテ左壁ニ少シク片寄り長サ三、二〇米、幅上部ニテ五〇種、底幅三二種、深サ入口ノ方一五種、奥ノ方ハ一三種ニ掘回メテ土ヲ去リ全面悉ク朱ヲ施シテアル、此屍床ヲ除ク他ノ床面ハ四種ノ厚サニ礎ヲ並ベテアツタ。

尙ホ施設ノ異トスベキハ堅穴ノ殆ンド中部ニ徑八種ホドノ圓キ穴ヲ有シ、下方ハヨク之ヲ存シ次第ニ細クナリ、壙底ヨリ十種下マダ及ンダ居タコトデアル、ソノ上方ハ分ラヌガ土砂ノ爲ニ塞ガレタモノラシク多分墳ノ位置ヲ表スル立テ棒ノヤウナモノデ墳ノ營マレタ際ニハ恐ラク上方墳前ニ何カノ施設ヲナシタモノデアラウ。

屍床ニハ羨道カラ八〇種ノ所ニ頭部ヲ奥壁ノ方ニ足部ヲ置キタル遺骨ガアツタ、頭部カラ足先マデ一米五〇種ヲ算ズルガ腐朽シテ僅カニ各部ヲ劈滅セシムルノミデアツタ。遺骨ハ凡テ之ヲ収集メテ改葬場ニ葬ツタ。

遺物ハ向ツテ左壁カラ中央へ六一種ノ所ニ及ノ床中ニ落チ込ンダ斧頭一個、ソノ及ノ一端ニ重ツテ刀一口アリ、又右壁ノ側ニ及ノ内側ニ鋒ヲ奥ノ方ニ向ケテ刀一口、コノ鋒カラ二〇種隔テ、鐵鏃一束、其左ニ鐵一本アリ、其向ヲニ又多數ノ鏃ガ塊狀ヲナシテ居タ。

刀第一號 殘缺(圖版第十一圖下1) 殘存長サ七九種、身ハ鋒ヲ失ヒ、莖モ端ヲ少シク缺失シテキル、身ノ長サ六七、五種、莖ノ殘存一一、五種、身幅中央ニテ三、五種、鞘ノ木質鑄ビ着キテ身ノ諸所ニ殘リ、鞘口ニ近ク一ノ足ノアトヲ見ルコトガ出來ル。

刀第二號(同圖2) 鋒少シク缺失、殘存長サ八三、五種、身殘存六八、五種、身幅三種、棟幅八種、莖長サ一五種、目釘孔ハ先端ヨリ一〇種ノ所ニアル。此刀ノ異トスベキハ莖ヨリ身ノ二五種位ノ間ニカケ内ゾリノアルコトデアル、即チ闕ノ棟ニテ八種、莖ノ中部ニテ一、二種、端デ二、二種ノ反ヲナシテキル。

斧頭一(同圖3) 長サ一五種、及先巾五、七種、柄頭巾五種、其横徑四種、柄ノ部分ハ左右カラ押曲ケテ環狀ニシツラフ

タアト一見シテ分ル。

鐵(同圖4)ハ十數本一束トナツテ居タガ、其形式モ愕然セザル程度ニ鑄化シテキルガ、尖根有莖式刀形ノモノデアツタヤウデアアル。其ニニ道刺ノアルノガ見ユル。

### 第三號墳

字吹上三一八〇

(圖版第十二)

字吹上ハ吹上ヲ通スル縣道カラ西北ニ分レタ作道ノ左方ニアアル。附近ニハ封土墳モナク道路ノ東方封土墳第十號カラ半軒近クモ隔テ、厩ルカラ、コ、ニ地下式墳ノアルコトハ豫想セナイ所デアツタ。然ルニ整地作業中此處ニ地下式墳ニ基發見サレタ。墳ハ地表下七〇釐ニテ奥室ノ上部ニ達シ長サ二米二〇釐、巾一米一〇釐ノ長方形ヲナシ東北カラ西南ニ流レテキタ高サ中部デ七〇釐、羨道ハ南側ノ中部カラ稍々西方ニ偏シ其中八〇釐ノ口ヲ開イテキタガ、ソコカラ入口ノ堅穴ハ土砂ニ埋メラレ調査ヲ得ナカツタ。

墳ノ西壁ニ近ク中央ニ頸部ヲ置キ、胴カラ足部ハ北側ニ片寄ツテ置カレタ遺竹ガアラハレタ、外氣ニ當ルト分解シ去ツテ殆ンド形ヲ留メナクナツタガ鄭重ニ收メテ改葬場ニ葬ルコトニシタ。遺物ハ頸部ト西壁ノ間ニ土師ノ高坏三個、羨道トノ境ニ近ク土師ノ埴三個ガアツタ。

高坏ハ上方ノ坏ト筒形柱部ト圓錐形ノ裾部トカラ成リ二個ハ完全ニ保存サレ、一個ハ少シク破損シテキタ。

一號(圖版第十二圖上3) 高サ一五釐、裾部徑一八釐、坏ノ徑二二、五釐、胴ハ下方中空トナリ坏ニ接シ下端ニ於ケル徑五釐。

二號(同圖2) 高サ二二、五釐、裾部ノ徑一五釐、坏ノ徑一八、五釐。

三號(同圖3) 高サ二二、五釐、裾部ノ徑一五、五釐、坏ノ徑一九、三釐。

埴(同圖1) 一ハ口徑一二、五釐、高サ二二、五釐ノモノ口ヲ下ニシテ伏セテアリ。他ノ二、一ハ(同圖6)口徑七、

九種、高サ八種。一ハ(同圖5)口徑六、五種、高サ八種ノモノ、前者ヨリ少シ中央ニ向ヒ合ツテ倒レテアツタ。

#### 第四號墳 字吹上三一八〇畑地内

第三號墳カラ東南約二〇米ノ所ニ檢出サレタ。墳ハ地表下六〇種デ奥室ノ上部ニ達シ、方向前者ト略同一デアアル。其ノプランモ同ジク長方形デ長徑二米、短徑ハ西側デ一米一〇種、東側ハ稍狭ク一米ヲ算シ不規則ニナツテキタ。高サモ西側ハ七〇種、東側ハ六五種デ一樣デナカッタ。羨道ハ北側ニナツテ居リ長サ七〇種、幅九〇種、高六〇種アツタ。入口ノ竅穴ノ調査ハ不能デアツタ。羨道部ノ奥室ト境スル所ニ扁平ナル岩石一個顛覆シテアツタガ、此式古墳ニ能クアル葬後ニ墳ヲ遷イダモノデアラフ。サテ中部ニ西側ニ頭部ヲ嵌キ伸展葬ヲナシタ遺骨ガアツタガ、前號ト同ジク丁重ニ之ヲ收メテ改葬場ニ葬ルコトニシタ。遺骨ノ下ニハ幅七種、深サ五種、長サ一米三〇種ノ溝ガ掘ラレテアツタガ排水装置ト思ハレル。遺物ハ奥室東ノ隅ニ近ク朱ノ塊ガアリ、遺骨左肩部ト思シキ所ニ近ク鐵鏝一本アルノミデアツタ。鐵鏝ハ長菱形デ長サ六、二種、幅最大二、五種アツタ。

#### 第五號墳 字六野原三三七二ノ畑地内 (圖版第十二)

封土墳第十號ノ西南約一二〇米ノ所ヲ西南ヨリ北東ニ通ズル一線ヲ劃シ、其北西側ヲ次第ニ整地中見出サレタモノデアアル。本墳ハ城ヲ縦斷シテアラハレ入口ハ六九種ト六〇、五種ノ方形ニ穿タレ、其底ハ表面下一、二米、羨道ハ巾六九、五種入り六〇、五、高サ六〇、五、奥室ノ左隅ヨリ三〇種右ノ隅ヨリ八二種ノ間ニテ奥室ト接シ、奥室ハ入口ニ對シテ横墳トナリ、長徑一、八二米、短徑一、一二米、天井ノ高サ九〇種アチ狀ヲナシテキタ、城壁ハ一面ヲ朱デ塗ラレ中央ニ遺骨二人分俣展葬ヲナシテキタ、副葬品ハ刀一口、劍五口、斧頭二、鏃數本ヲ納メテアツタ。遺品ヲ遺骨ノ右ヨリ舉グレバ、

劍一(圖版第十二圖下1) ハ全長七五種、内身ノ長六〇、六種、莖長一五種、身幅闊ヨリ一〇種ノ所ニテ四、三種、厚サ〇九種、闊ヨリ四〇種ノ所ニテ身幅三、七種、柄ハ葛藤ニテ縫糸ヲ用キ、其幅中部ニテ三種、厚サ一、八種、縁ハ一、五種ノ幅ニ銅又ハ鐵ヲ用キタルラシキモ取レテ其ノ跡ヲ印スノミデアル、柄頭ハ圓頭ヤウナルモ錆化シテ分明ナラズ。

劍二(同圖2) ハ前ノ右側ニ置キ劍身ノミ殘ル、全長三一種内身ノ長サ二七種、幅中央ニテ二、八種、莖ハ長サ四種、先端ヨリ一、七種ニ莖先孔ガアル。

刀子一(同圖3) 長サ一二、五、幅二種、厚サ〇、四種、莖ヲ包ミ鹿角裝ニナツテキルガ、朽腐シテ殆ンド原狀ガ分ラナイ。

斧頭一(同圖4) 長サ一四種、頭部ハ兩側ヨリ押包メル如ク柄孔アリ、廻リ一二種、横徑三、七種、深サ五、二種、刃先幅五、四種。

斧頭二(同圖5) 特種ノモノニテ柄ヲ挿入シタル所ニシテ考フレバ銚トモ思ハル柄ヲ含ミ長サ一二、三種、柄部ノ長サ九、五種、廻リ七、八種、身ハ三、七種、幅四、二種、厚サ〇、七種。

鐵錐(同圖6—9) 四個、内三個ハ長菱形デ長サ莖ヲ含ミ一六、五種、菱ノ幅三、五種、三個トモ同ジ。一個ハ長サ二二、二種、劍形ヲナシ幅二種、厚サ〇、四種。

遺骨ノ向ツテ左方ニアルハ

劍三(同圖10) 全長四七種、内身ノ長サ三五種、身幅二、九種、莖長サ一二種、錆化甚レキモ柄ハ二枚ノ木片ニテ兩側ヲ包ミ糸卷ニセシモノナルヲ知ル、柄縁ヲ鹿角裝ヲ施シテアルガ既ニ土狀化シテキル。

劍四(同圖11) 全長三四、四種、内身ノ長サ二五、四種、身幅中部デ二、二種、鞘ノ木質纏着シテキル、莖長サ九種、幅中部デ一、七種、厚サ〇、五種、柄ノ木質纏着シテキル。

刀一(同圖12) 全長四七種、身幅中央デ二、五種、背幅〇、七種、莖長サ七種、柄頭カラ一、二種ニ目釘孔ガアル。

鐵線五本(同圖13—15) 小形デアル、有莖小刀子形デアルガ、銹化缺損シテ寸法ヲ得ナイ。

## 第六 號 墳

字六野原三三七二ノ一畑地内

(圖版第十三)

封土墳第十號ノ南方約六〇米ニアツタ、此處ノ地盤ハ整地作業ニ依リ表面下一米五〇釐ノ深サニ切取レタガ、檢出サレタ墳ハ地表下一米二七釐デ奥室ノ天井ニ達シ、ソレヨリ六〇釐デ墳底ニ達スル、墳ハ東西ニ二、一二米、南北ニ一、二一米ノ長方形デ天井ハアーチ狀ヲナシ、羨道ハ南壁ノ少シ西ニ偏リタル所ニ幅六〇釐デ相接シテ居タ、入口ノ緊壁ハ工事ノ都合デ調査ヲ得ナカゾタ。

墳内中央カラ少シ左方ニ人骨四體アリ、頭蓋骨ト齒ハ稍完全ニ保タレ他ノ骨片モ少シハアツタガ、外氣ニ接シテ分解シテ仕舞ツタ。遺骨ノ器械的調査ダケデモ最モ必要ト認メタガ、宮内省許可ノ條件モアリ敢テ之ニ手ヲツクズ、凡テ改葬場ニ送ツテ之ヲ葬ツタ。

副葬品ハ不思議ナト思ツタガ皆無デアツタ。

## 第七 號 墳

字六野原三三七二ノ一畑地内

封土墳第十號ノ南約五十米ノ所ニ在ル。入口カラ羨道マデハ精査ヲ得ナイ、玄室ハ略南北ノ方向ヲ示シ羨道ハ其西側ニアツタ略中央ニ開キ幅七三釐、玄室ノプランハ長方形デ縦徑一、二二米、横徑七〇釐、掘壁ハ稍不完全デアル、玄室ノ高さ三八釐。

遺骨ハ既ニ朽敗シテ見エズ、遺物ニ劍一口アツタ。

劍(圖版第十二圖下16) ハ全長九七釐、内身ノ長サ七四釐、幅ハ關ニ近イ所デ五釐、中央デ四、七釐、背ノ徑〇、八釐デアル、莖ヲ含ム柄頭マデノ長サ二三釐、莖ハ柄木ニ包マレテ長サハ不明デアアルガ、柄木ノ間ヨリ窺ヘバ一六、五釐ニ達スル

ガ如ク、柄ハ身ノ長大ナルニ比ベテ割合ニ細ク、縁ハ二、三種ノ幅ヲ木地デ卷イタモノラシイ。尙ホ縁ニ接スル柄ノ二種ノ幅ニ互リ鐵デ卷イテアツタラシイ、此處ノ柄ノ廻リハ八種、横幅ハ二、五種、厚サ一、二種、柄頭ハ半バ缺損シ原狀ヲ知り難イガ原因ニナツテキタモノト思ハル。

鞘ハ地ニ伏サツタ半面ハ鏽化甚シク、他ノ半面ハ堅ノ木質マデ分明スルガ、鞘口ヨリ六、五種ノ所ニ一ノ責アトト思シキ幅一、二種ホドノ金屬具ヲ卷イタヤウナ跡アリ、二ノ責ハ分ラヌガ木質ノ諸所ニ糸目ヤウノモノアラハレルノハ纖維質ノモノデ卷イタモノデアラウ。

## 第八號墳

字六野原三三七二ノ一畑地内

(圖版第十三、十四)

封土墳第十號ノ南五十米ノ所ニ檢出サレタ、コ、ハ南北ニ通ズル切通面ガ一、六六米ノ高サヲナシテキタガ、工事ノ際突然スコツブノ下底ニ穴ヲ開イタ、ソコデ直ニ穴ニ這入ルト地下式墳トシテ是迄ニナキ大古墳デアルコトガ分ツタ、墳ハ切取線ト略直角ヲナシ東西ニ長ク入口及ビ羨道ハ東方ニアリ、没入セシ位置ハ支室ノ西端デアツタ、ソノプランハ他ト同ジク長方形デ中央ニ於テ稍フクラミ、東西兩端ノ幅一、五七五米、中部ニテ一、八六米、長サ五、四米、天井ノ高サ一、一二米、各部同ジ高サニナツテキルガ、東西ニ中央ヲ通ジ幅一〇種、深サ六種ニ刻サレタ線條ハ切妻造ノ棟ヲアラハシタモノト見ラル、ガ、切妻トシテモ兩側ノ傾斜面ハアラハシテナイ、斯クテ東方ノ羨道カラ見レバ妻入りニナツテキル四方壁面ニ眸ヲヤルト、コレヲ營ンダ鐵アトハ歴然ト其形ヲトメ、昨今ニデモ營マレタ如クデアアル、試ミニ鐵ノアトニ就イテ其幅ヲ計ツテ見ルトハ、六種アツタ、玄室ノ下底ハ平面デアアルガ中央ニ羨道カラ一米四〇種隔テタ所ニハジマリ幅四〇種、長サ一、八米、深サ五種ニ掘凹メ、ソコニハ封土墳ノ粘土層ニ使ツタノ同ジキ粘氣ノ多イ白イ精良ノ粘土ヲ他ノ底面ト同ジ高サニ充タシ遺屍ヲ其上ニ伸展葬ニシタモノデアアル。此粘土ガ封土墳ノ粘土層ト同質ナルコトハ本墳ガ封土墳ト同時代又ハソレト前後スル時代ノモノナルコトヲ想定スベキ貴重ノ資料デアアル。

遺骨ハ入口ノ方即チ東方ニ頭部ヲ置カレタト見エ羨道カラ一、四米ノ所ニ二ツニ割レタ頭蓋骨ト上下合セテ二十枚ノ齒ト齒骨トガアツタ、齒ハサソツテ見ルト、天井ヨリシミタ水氣ノ爲ニベト〜ニナツテ手ニ粘リツク、他ニ大腿骨ノ二小片ガアツタガ、粘土床ニ水ガ溜リ全ク腐朽シ去ツタキル。頭部ニ近ク鏡一面アツタ。他ノ副葬品ハ東壁カラ一、五米ニハジマリ、左右ニ刀劍ガ七口、柄ヲ東方ニシテ次々ニ置カレ東壁カラ三、一九米ノ處デ屍床ハ盡キ、ソコカラ五二種ノ間ニ甲冑一領置カレ西壁ニ近ク多數ノ鐵器ガ置カレテアツタ。城ノ兩側ハ年代ノ久シキ、土ガ落チテ一〇種内外ニ積ツテ居タガ冑ノアタリハ土ノ落チタ跡モナク完全ニ採收ガ出来タ。尙ホ四壁ノ土塊下ヲ限ナク取調ヘタガ何一ツナク、タゞ西壁ニ近ク勾玉一個ヲ得タノミデアツタ。遺骨ハ鄭重ニ取納メ改葬場ニ葬ツタコトハ申迄モナイ。

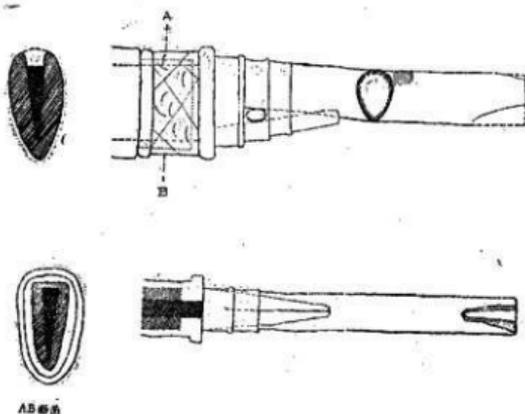
鏡ハ徑七種ノ小形白銅鏡デアルガ、紐區ハ幅二種、高サ〇、五種、内外區ノ別ナク縁ニ接シテ珠文様ノモノカスカニ見ラレル丈デアル、縁ノ幅ハ〇、八種デ、〇、二種ノ反リガアル。

刀劍ハ大小八口アリ、東方ニ鋒ヲ向ケ遺骨ノ左右ニ置カレテアツタ。

刀第一號(圖版第十三圖上) 平造デアアル甲ノ下ニ莖ガ鑄着シテアツタ、全長九四種、内身ノ長七九種、身幅三、五種、棟幅〇、八種、鞘木ハ木質モ明カニ見エルガ何ノ木カハ分ラヌ、櫻ノ皮ヤウノモノニテ包ミ一種位ノ間隔ヲ置テ糸デカラゲシヤウデアアル。木刀ハ柄縁ニ鹿角裝ガ施サレテアリ、長サ三、五種、縁ヲ圍ミテ厚サ〇、五種アリ、其表面ニハ直弧文ガ半肉彫ニセラレ居ルコト圖版第十四圖下ノ如クデアアル、鞘口ノ方ニハ遺存シテ居ナイガ裝具ノ中ニ鞘ヲ入ル、ヤウニセシモノト覺シク遺構ハ第十二圖ニ見ル通デアアル。

刀第二號(同圖下) 平造デアアル、柄先三分ノ一位缺損シ殘存長サ一、〇八米、内身ノ長サ九一種、莖殘存一七種、身ハ鞘木鑄着シ始メト調査ヲ得ナイガ身幅四種、棟ハ角棟デ幅〇、八種、其折レ口ハ鍛ニ當リ押曲ゲタ跡ガ見ラレル、莖ノ長サハ一五種、鐔ハ鐵製倒卵形デ横徑四種、縦徑六、五種アルガ、此ノ處特別ノ裝置アリ、鐔ニ接シテ鞘口ノ方へ二種ノ間木質ヲ金屬(鐵?)ニテ包ミ、第一ノ足金物ト思ハル、鐔ヲ含ミテ横幅八種アルガ、タゞ朽敗明カデナイ、柄ノ縁ハ三、五種鐵板ニテ包

圖源復測實刀裝角鹿土出墳號八第式下地原野六 圖二十第



マレ二段トナリ柄ハ木片ニテ左右ヨリ押ヘ糸卷ニシテアルガ、柄頭ノ方ハ缺失シテ分ラヌ。

劍第一號(同圖3) 全長八〇釐、内身ノ長サ六三釐、身幅五釐、莖長サ一三釐、縁ニ近キ所ニテ幅二、五釐、先端ノ幅一、八釐、端ヨリ一、八釐ノ所ニ莖先孔見ユルガ目釘孔ハ鍔着シテ見ヘヌ。鞘木ノ木質ハ分ルガ其上ヲ細イ糸卷ニシタモノヲ

シイ。本劍ニハ把縁ト鞘口ニ鹿角裝置ガ施シテアル、即チ把縁長サ三釐ノ間ニ見ユルガ既ニ腐朽シテキル。鞘口ハ其片方(刀身ノ背部)ニ四釐間ニ僅ニ其ノ痕跡ヲ留メ、更ニ鞘口ヨリ一、五釐ノ刀身及ニ近キ位置ニ長サ四釐、幅一釐内外、厚サ〇、四釐ニ互ル鹿角質ノ土狀化シタモノヲ殘留シテキルノハ此處マデ裝置ガアツタモノトハ受取レズコ、ハ地ベタニ接シタ方デアリ、角質ガ前記ノ齒同様水氣ニ遇ツテベトニナリ此處ニ殘留シタモノデアラウ。

刀第三號(同圖4) 全長八九釐、内身ノ長サ七三釐、身幅三、五釐、莖長サ一六釐、柄ハ左右ノ副木ヲ糸卷ニシタ所他ト同シイ、鞘木ハ所々身ニ鍔着シ錆化一層甚シイ。

刀第四號(同圖5) 全長八六釐アルガ鋒ニ近ク折レ鞘込ミ摧破シテキル、殘ノ身長七二、五釐、身幅三釐、莖長サ一三、五釐、柄ハ縁幅二釐、柄卷ハ前號ト同シイガ稍太キ糸卷デアル。

劍第二號(同圖6) 殘缺、莖折レ身モ又折レテキル、殘部長サ二七

釐内身殘部二五、五釐、身幅三釐、莖殘一、五釐。

劍第三號(同圖7) 全長三二釐身ト莖トノ界判然シナイ、身幅三、四釐、莖ノ下端幅二釐。

劍第四號(同圖8) 全長三二種、内身長サ二二種、身幅三、四種、莖長サ一〇種、柄ハ副木ヲ左右ヨリ合セ糸卷ニシテアル。

刀子一(同圖9) 全長二一種、身長八、五種、身幅一、七種、莖長サ二、五種、此刀子ハ鹿角裝ヲ施シタモノデ、莖ヨリ鋒マデ下敷トナツテキタ、半面ニ鐵鏽ノ間鹿角ノ土伏化セルノガ見ヘル。

刀第五號(同圖10) 甲ノ下ニアツテ鏽着シテキタ、全長九四種、内身ノ長サ七四種、莖長サ一七種、柄ハ他ト同ジク葛纏ヲ稍々荒イ糸卷ニナツテキルガ鈍化甚ダシイ。

斧頭一(圖版第十三圖下1) 長サ一三、五種、頭部廻リ一六種、先幅七種、コレニ挿込シタ柄木ハ枝木ノ儘殘存シ用途ヲ想察セシムルニ十分デアル、穂先ヨリ内側五種ノ所ニ三角形ヲナシテ各邊一種ノ孔ヲナシテキルノハ之ヲ作ルトキ柄ノ部分ハ先ヅ鐵ヲ平タク打ツク九ク内側ニ卷込ミ仕上ゲシタコトヲ示スモノデアル。

鍬頭一(同圖3) 身幅先端ニテ四、七種、側部上方ニテ二種、兩側ノ幅内側ニテ一〇種、受部(臺木ヲ受ケル)ノ入り一纏ト二纏ノ間ニアル。

鐵鍬(同圖3—11) 甲冑ノ周圍西壁ニ近ク鐵鍬ガ多ク見出サレタ、個々ニナツタノモアルガ、東ニナツタノモアツタ。多クハ篋ガ着イテキ櫻ノ皮デ卷イタノモアル、東ニナツテキルノハ鞆モアツタラウト推セラル、モ、遺物トシテハ檢出サレナイ。其ノ數ハ六七十本ニ上ル。鍬ノ種類ハ左ノ各種デアル。

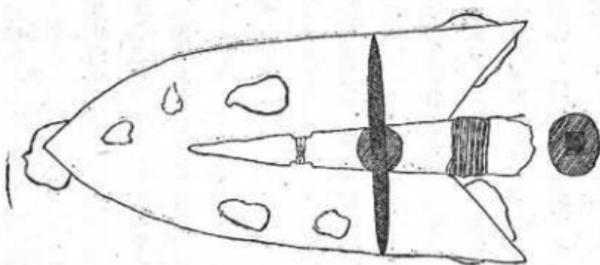
一、平根無莖式鐵鍬(同圖4) 廣鋒九四長三角形形式ト稱スベキモノデ、タゞ一個見出サレタノミデアル。長三角形ヲナシ頂點ヨリ左右ノ翼ヘノ長サ九種、幅四、五種、篋ノ先キガ腐レタ儘殘リ又ソレヲ卷イタ糸モ見ラレル。(第十三圖參照)

二、尖根有莖式ノモノ(同圖9) 此中ニハ膺縱式ノモノガ相當ニアル。

三、尖根有莖式刀身形ノモノ(同圖5、6) 右ト同ジク逆刺アルモノガ約半數モアル。

四、尖根有莖式劍形ノモノ(同圖7、8) 右ニ同ジ。

圖三十第 野原地下式第八號墳出土 鐵質圖測



甲冑(圖版第十三圖下12・15) 甲ハ短甲デ三角板革綴式トイフベキ様式ノモノデアリ、褌板ト副板又副板ノ上ニ三角板ヲ上下交互ニ配シ。ヨクアル鋳留デナク、革ヲ以テ之ヲ綴テ尙ホ上縁ト褌ハ革ヲ以テ編綴ニシ小縁ヲ作ツテアル、三角板ニハ革ガ取レタアトノ孔ガイクトツモ見ラレル。甲ノ一部分ハ押重ナリニナツテ居タ爲破損シテ居ル所モアルガ、大部ハ革ガ取レテバラト、ニナツテ居ル。サテ此類品ハ上野國碓氷郡八幡村大字劍崎字長瀨西古墳出土ノモノガアリ、帝室博物館ノ古墳發掘品調査報告ニ出テ居ル。本墳ノ甲ハ他日復原ヲ得テ更ニ報告ヲナス機會ガアルデアラウ。

冑(圖版第十三圖下15及ビ圖版第十四圖上) ハ厩庇式鐵製ノモノデ、小札形ヲ上下二段トシ胴卷板ヲ中央ニ零イタモノデ、小札ハ上下各二十枚アル。鉢ハ扁圓形デ前後二一程、左右一七程、頂邊ノ伏鉢ハ徑五、五程、高サ二程、軸ノ長サ二、五程受鉢ハ高サ一、五、徑五程アル。鋳ハ都合四枚デ各ノ幅ハ三、五程カラ四程アル。又其長サハ五〇程ニ及ンデキル。厩庇ハ幅六程、大小十一個ノ二等邊三角形ノ透シヲ入レテアル、カクテ冑ノ内側ノ深サハ一四程トナル。

此式ノ冑ノ出土例ハ和泉國某御陵、筑後國吉井町月岡古墳ナドニアルノミデ、今此古墳シカモ封土墳デナキ地下式古墳カラ出タノハ珍ラシイトセネバナラス。

玉ハ勾玉ニシテ良質ノ硬玉製デアル。玄室ノ奥マリタル所ニ土塊中ニボツネント顯ハレタ、長サ二、七程、丁子勾玉デ一方ヨリ孔ヲ通シタモノデアル。頭部ハ風化ヲ受ケヤ、變質シテキル。(第一八圖版ノ下)

砥石 中部側方ニ砥石一個アツタ、一面ダケ砥イダモノデ見カケハ如何ニモ新シイ。岩質ハ石英粗面岩(天草砥)デ現今

此地方ニ用キルモノト同ジイモノデアアル。曾テ鳥居博士ガ東白杵郡南方村吉野ノ古墳發掘ニ當リ、舟形石棺ノ上ニ載セテアツタノガ同質ノモノデ、砥ギスラシテアツタガ、コ、ニモソレヲ見タノハ面白イ。

### 第九號墳 (圖版第十五)

整地作業中封土墳第十號ノ南方約五十米ノ地點ニ鍬先ノ下底陥没シテ地下式古墳ノ玄室ニ掘リ當ラタ。

玄室ハ南北二米三十程、東西一米六十程、高サ八十四程ノ長方形ヲナシ中央ハ稍々膨ラミラシキタ。墳ノ東ニ羨道ガ横ツ平中央ニ開カレ其ノ幅一米五程、長サ約一米アルガ、羨道カラ見ルト玄室ハ横城ニナツテキル譯ダ、竅穴ハ尙東ニアル筈ダガ其調査ハ不能デアアル。

羨道ノ部分カラ土砂ノ流レ込ダモノ、天井ノ一部崩壞シテ大ナル土塊トナリ落下シタモノ等デ墳内ノ東部及ビ南部ノ約半分ハ埋ツテキタ。

城内遺物ノ狀態 城内ニ落チ込ンデキタ土塊ヲ除キ其遺物ヲ檢スルト、竊ノ中央稍西寄りニ人骨一體アリ、頭ヲ北ニ足ヲ南ヘ直葬シテアツタ。頭骸骨、上顎骨、上膊骨、稍離レテ南方ニ脛骨ガアリ、頭骸骨ハ後方ニ轉落シ齒ヲ北ニ右頰ヲ下ニ轉ガリ居リ、下顎骨ハ正位ニアツタモノト認メラレタ。頭骸骨ノ城内ニ置ケル位置ハ北壁ノ南方二五程、西壁ノ東方四〇程ノ所デ、北壁カラ二〇程ノ南、頭骸骨カラ西方ニ鐵鏃多數一塊トナツテ居リ、此中ニ銚身一本混ジテキタ。西壁ニ接シテ劍一振柄ヲ北ニ鋒ヲ南ニシテアツタ、柄頭ノ位置ハ北壁カラ六十程南、西壁カラ一八程東方デアアル。此劍ニ接シソノ東六程ノ所ニ劍ト平行ニ刀一振アリ、柄ヲ北ニシ刀ノ折レト鐵ガ東方ニ或角度ヲナシ斜ニ附着シテ居タ。此刀ノ東ニ接シテ之ト平行ニ上膊骨ガアツタ。

頭骸骨ニ接シ其ノ北ニ劍一振柄ヲ東ニシテ東西ニ置テアツタ、即チモト頭部ノ北ニ横ヘタモノデアアル、下顎骨ノ東、遺骨ノ東側ニ之ト平行ニ大刀一振アリ、柄ヲ北ニシ柄ノ先端ハ北壁カラ三六程ニ位置シテキタ。尙ホ頭骸骨ノ南方、北壁カラ一米

六五種ノ所ニ脛骨ガアツタ、其ノ他ノ遺物ハナイ。是等ノ遺物ヲ精査スルト

頭骸骨 右ヲ下ニシテアツタカラ地ニ接セル部分ハ腐朽シテキタガ、他ノ大部分ハ残ツテキタ。上顎ニハ齒十五本（内一本ハ落チテキタ）下顎ニ十四本ヲ存シ、左大白齒ノ一ニ齒槽膿漏ガアツタコトガ認めラレル。頭周約五三種、眼窩、鼻骨、頬骨等備ハリ顔面ニハ朱附着シ骨洗ヲナセルモノデナイカラ思ハセル。其他ノ骨片ハ何レモ腐朽崩壊シテキタ。

以上ノ遺骨ハ凡テ埋葬場ニ送リ鄭重ニ之ヲ埋葬シタ。

劍第一號（圖版第十五圖上） 西壁ニ接セル大ナルモノハ總長八二種、内柄長サ一八種五種、身ノ長六三、五種、身幅ハ闊ニ近ク四、六種、鞘ハ殆ンド完全ニ殘リ鞘木ヲ纏ノ皮見タヤウナモノデ卷キ、尙ホ其上ヲ纖維質ノモノデ卷上ケテアツタ。本劍ニハ鹿角裝具ガ施サレテアリ、ソレガ把縁ニ遺存シテキルガ、地ニ接シテキタ片側ハ今ハ何モナクナリ他ノ一方ニ長サ三、八種、縁ヲ圍ミテ施サレタモノト見ヘ其一部ノ裂口ニ鹿角ノ骨質ガ見ユル。

劍第二號（同圖下） 長サ二九種、内身長サ二六種、身幅二、五種、莖長サ三種、幅二種、先端ヨリ一、五種ノ所ニ目釘孔ガアル。

刀第一號（同圖3） 環刀ノ大刀デ鐵製素環ノモノデアアル、總長サ一米内柄長サ一八、五種、身長サ七五種、身幅三、八種環部ノ徑五、五種アリ、四片ニ折レテキタ。

刀第二號（同圖4） 總長サ七一種、身長サ五九種、身幅二、五種鋒ヨリ一六種ノ所ニテ折レ、反轉シテ及部ト背ト鑄着シテキタ。此刀ハ把縁長サ四種ノ間ニ鹿角裝ヲ施シ大方ハ土狀化シテ仕舞フタガ其裂口ニ骨質ノ見ユル所ガアル。

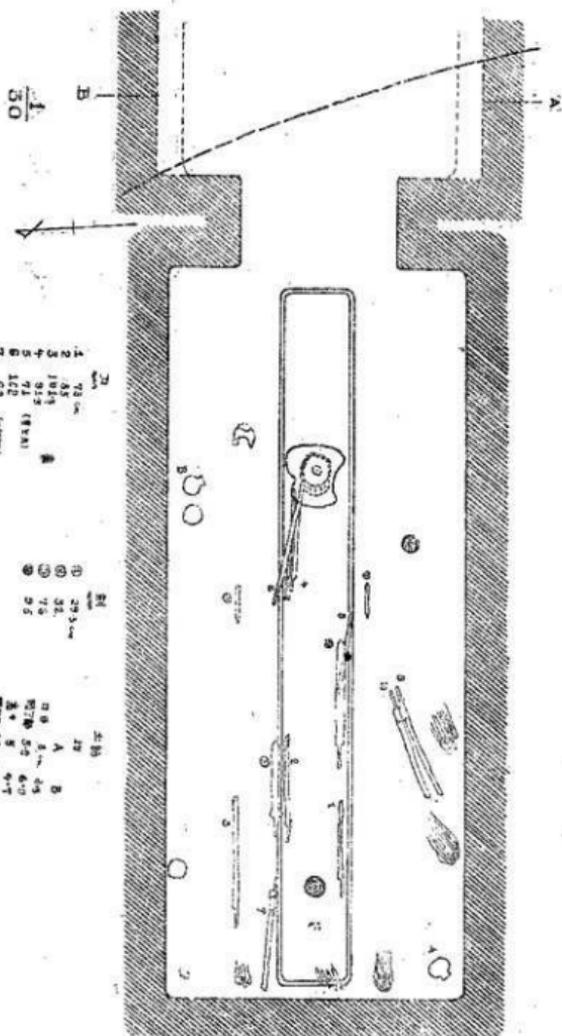
鉞（同圖5） 鐵中ニ混シテキタ鉞ハ細身ノモノデ、總長サ二九、五種袋穗ヲナシ、其ノ端ハ徑三種、厚〇、二種デアアル。鐵ノ附着セルガ爲柄ト身ノ長サヲ計リ得ナイガ、身幅ハ下方デ一、七種アツタ。

鍔（同圖6） ハ多數一塊ニ鑄ツキ他ニ離レタモノニ三アツタ、矢柄モ存シ最モ普通ナルモノデアアル。

第十號墳 字六野原三三七二ノ一 (圖版十五、十六、十七)

封土墳第十號ノ東側ニ位置シ、一部ハ封土ノ下底ニアツタ。封土墳第十號ハ其西方ヨリ次第ニ整地シ塚ノ東側面ニ達シタガ

第十號墳 字六野原三三七二ノ一 (圖版十五、十六、十七)



塚ノ周邊ヲ切取面一米四〇種ノ下底ニ於テ突然トシテ墳ニ没入シタ。依テ其ノ周圍ヲ掘リ廣ゲ墳内ニ這入ルト、地下式墳ノ

玄室ノ中央ニ當ルヲ見タ。

墳ハ東ノ南ヨリ西ノ北ニ流レ殆ンド東西ノ方向ニナリ、東部ニ入口ノ際穴ガアリ、表面ヨリ下方ニ至ルニ從ヒ次第ニ細クナリ逆梯形ノモノラシク深サ二米五十三糎デ下底ニ達シタ。羨道ハ其ノ西ニ續キ幅一米二〇糎、長サ七〇糎デ西方玄室ノ側面ニ達スル、而シテ其高サハ一米デアアル。

玄室ハ頗ル巨大デ長サ五米六〇糎、幅二米三〇糎、高サ一米一三糎、プランハ長方形デ天井部ニハ中央ヲ東西ニ幅一〇糎、厚サ五糎ノ棟狀突起ノ緩線ガアル。コレハ第八號墳ト同ジク切妻造ノ棟木ヲ示シタモノデアラウ。床面ノ中央ニハ上幅五五糎底幅五〇糎、深サ一〇糎、長サハ玄室ノ全部ニ互リ屍床ヲ設ケテアツタ。(平面圖參看)

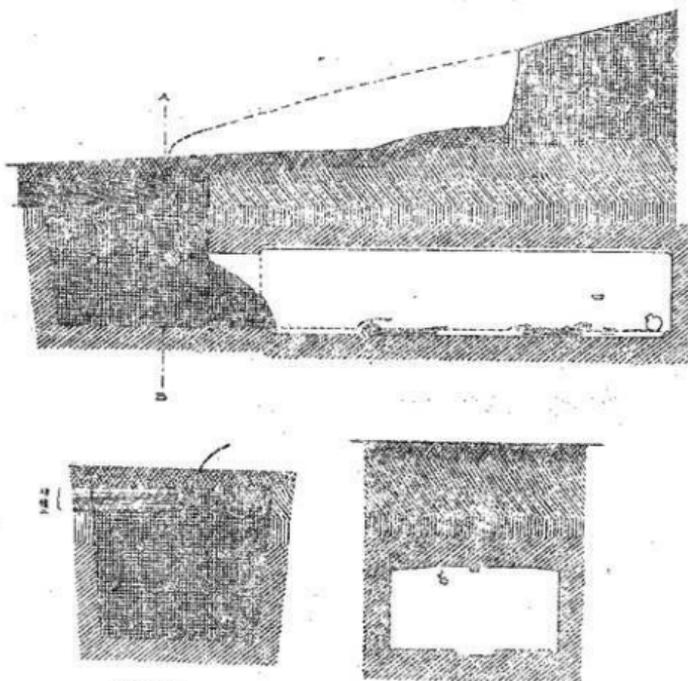
室内ニハ天井及側壁ヨリ火キナ土塊ガ落下シ室内約三分ノ一ヲ埋メテアツタ。

地下式古墳ノ堅穴ハ地表ヨリ刻下ゲ下底ニ達シ、ソレヨリ横ニ羨道ヲ開キ玄室ニ通シ、埋葬後ニハ羨道カラ堅穴ヲ塞グコトニナリ居レルガ、本墳モ無論此方ヲ依テマコト、思フ。然レニ第十四圖平面圖境界線ノ所ニ於テ積ス通り、此所堅穴ノ底面ヨリ一、七五米ニテ流レタ土砂ノ堆積セルハ、封土墳第十號ノ外洩ヲ築成スルニ當リ、コ、カラ表土マアチ切開カレ、コ、ニ土砂ノ堆積シタモノト解スベキモノデアアル。即チ封土墳ガ後ニ出來タコトヲ示スモノデアラハナラス。若シ地下墳ノ方ガ後ナラバ堅穴ハ下底カラ表土マア埋メ土ノ儘ニナリ、其中部ニ堆積セル土砂ノ所ヲ見ナイ筈デアアル。又本墳ノ玄室ガ他ノ地下式墳ニ比シテ天井ノ落下側方ノ崩落ナド特ニ甚シキハ、封土墳ノ築成ニ際シ地盤ニ動搖ヲ與ヘタ結果ニ依ルト思フ。以上ニ依リ本墳ハ封土墳第十號ニ先ダテ發マレタモノト見ルコトガ出來ル。(第十五圖參看)

遺物ハ西壁ヨリ約八〇糎ノ所ニ背面ヲ上ニシタ鏡一面アリ、コレヨリ一六糎西ノ方ニ極細キ管玉五個ガ朱泥ノ中ニアツタ。鏡ヨリ三米東方ニ短甲一領置カレ、其下ニ甕一個アツタ。

東壁カラ二米一〇糎、南壁カラ四〇糎ノ所ニ榊一個、短甲ヨリ四〇糎ノ北東ニ鐵先一個、西南隅ニ土師ノ埴ガアリ、更ニ西壁ヨリ一米北壁ニ接シ床面上三〇糎ノ所ニ坏一個アツタ、東壁ヨリ一米六〇糎、北壁ヨリ一〇糎ノ間ニ埴一個ソノ西ニ並ンデ坏一個アツタ。

圖五十五 地下式墳第十號縱斷圖



A B 断面

帶（幅六ミリ）外行鋸齒文帶（幅四ミリ）ト續キテ縁トナル、縁ハ平縁デ幅一釐二耗、鏡面ノ反リハ三耗位アルガ全體トシ

刀劍鏃等ハ遺屍ノ左右ナル屍床内、ソレニ近キ床面甲冑ニ近キ處ニ置カレタルガ、委細ハ別圖遺物配列圖ノ通デアル。

以下遺物ノ個々ニツキ詳記スル

鏡（圖版第十七圖上）鏡ハ獸形鏡デ徑一、六釐アル。土中シテアル間ニ土塊ノ落下ノ爲多少歪曲シテ居ルガ、鍔ビ乍ラモ原形ヲ保チ得テキル、紐ハ圓座紐（徑二、五釐）デ内區ハ四個ノ素乳ノ間ニ獸形ヲ配シテアルガ獸形ハ著シク變化セルモノデアル（幅一、五釐）普通ナラハ鏡帶ノアルベキ所デアルガ、之ヲ缺ヤ直ニ外區トナリ、次ハ櫛齒文帶（幅四ミリ）外行鋸齒文帶（幅五ミリ）ヤ、廣キ山形文

ヲ重シテ仕舞ツタ爲ニ確實ノ所ヲ示スコトガ出来ヌ。本鏡ハ無論仿製鏡デアルガ、之ヲ地下式墳第八號ヤ封土墳第六號ナドノ鏡ニ比ベルト完全ニ保タレタ方デアル。

鏡面ノ方ハ一段ト綠青ヲ見、其一部ニ布片ガコビリ着イテ居リ、葬時包シテ納ムララセタコトヲ知ル。

玉(圖版第十六圖下12) 玉ハ小サキ管玉ノミデアツタ、一ハ長サ七耗、徑四耗、碧玉岩裂、二ハ長サ一種三耗、徑三耗、

岩質前ト同ジ、三、四、五ハ二ト同ジク徑ハ三耗デアルガ、長サハ三ガ一種

二耗四ハ八耗、五ハ六耗デアル。質ハ何レモ前ト同ジイ。

甲冑(圖版第十六圖上7・8) 甲冑ハ天井土塊ノ落下ニ依リ打毀レテ居タ

甲ハ鉄留草織式ノ短甲ヲ背部ハ割ニ廣ク殘ツテキタ。横板ヲ鉄留ニシテアリ

上縁ト裾ハ草織ニナツテキルモノデアル。前部ハ凡テ斷片ニナツテ居リ復原

ナドハ曼東ナイ。

冑ハ眉庇小札鉄留式ノモノデ、小札ハ破損ノ爲メ其數ハ能クハ分ラヌガ約

六十枚ニ達スルモノト見ラレ、第八號墳ノニ比ベルト密デアル。胴卷板ハ幅

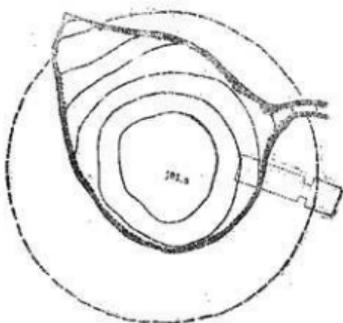
三種アル。鐵ハ四枚カラ成ルモノト見ラレ、一枚ノ幅ハ三、八、一四、〇種ア

ル頂上ノ伏鉢ハ折レテ仕舞ツテ居ルガ、徑六輓高サ三、五種アツテ受鉢ヘノ

軸高サ一、五種ヲ伴ツテキル、受鉢ハ殘存シテキナイ。

眉庇殘欠ヲ繼ギ合セルト、前部中央デノ突出八種ニ及ビ周圍ハ葉紋狀ニ切ラレ、庇元カラ三、五種マツリニ長一、五輓、幅八耗ノ長方形、ソレヨリ五耗位外方ニ長方形ノ兩者間ニ一邊一種ホドノ三角形、三角形ノ頂點カラ二種位外側ヲ更ニ又柳葉形、以上三種三ク様ノ透彫ヲ三段ニ附シテアル。此冑モ八號墳ノヨリ優レテ居ルガ遺憾ナ事ニハ破損ノ程度ガヒドイコトデア

圖六十第



## 刀 劍

刀第一號(圖版第十五圖下1) 數片ニ折レ繼ギ合セルト全長七九種、内身ノ長サ六八種、身幅三種、莖ハ柄ノ裝置ノ儘殘ツテ居ルガ先端少シク折レ、殘存長サ一一種、柄木ハ左右二枚莖ヲ包ミ、ソレヲ葛繩トシ稍大イ糸卷ニシタモノデアアル。刀身ノ各所ニハ塊狀ノ錆ガツキ鞘木ニ錆着殘存シテキル。

刀第二號(同圖2) 全長八一種但シ莖ノ先少シク折レテキル。身ノ長サ七一種、身幅ハ組元ニテ三、二種、二〇種ノ上方ニテ三種、背幅〇、六種、中央ヨリ先ハ鞘木錆着シテキル。莖ハ殘存一〇種、此刀ノ異トスベキハ身ニ對シテ莖ノ内ヅリガアルコトデアアル。莖ニ近キ身ノ四種ホド上方ヨリ曲リ莖ノ先一〇種ノ所ニテ一、五種ニ及ンデキル。

刀第三號(同圖3) 全長一〇三、五種、身ノ長サ八四、五種、身幅三、七種、莖長サ一八種、鞘木錆着シ所々錆ノ塊ガアル。

刀第四號(同圖6) 次ノ第五號ト錆着シテ分ツコトガ出來ヌ。其ノ上三ツニ折レ殘缺身ノ長サ九二、五種、莖ノ長サ一八種、柄ハ葛繩ニテ稍大キ糸ニテ(一ミリ五)卷イテアリ柄頭ハ圓頭ト推セラレ。

刀第五號(同圖5) 第四號刀ト錆着シテ一ツニナリ居ルコト右ニ述ブル通り、身六片ニ折レ之ヲ繼合セルト身長七二種、身幅三、三種、莖ヲナクシテキル。

刀第六號(同圖7) 全長一〇一種、内身長サ八四種、第四號刀、第五號刀ト錆着シ且ツ數片ニ折レテキル、身幅三、八種、棟幅八種、身ニハ鞘木錆着シテキル、莖ハ長サ一七種、幅二、二種、目釘孔二個アリ、一ハ關ノ方カラ五、五種ノ所ニ徑〇、四種、第二ハ同ジク一一種ノ所ニ徑前ト同ジキ孔ヲ穿ツテキル、莖ハ刀身ニ對シ内ヅリニナツテキルコト第二號ト同シデアアルガ、身ノ背ガ鞘木ノ錆着シテキルタメ其寸法ヲ完全ニ示スコトガ出來ナイ。

刀第七號 殘缺シテ刀身ノ六二種ヲ殘スノミデアアル、身幅三、五種。(圖版第十六圖上1)

刀殘缺(圖版第十五圖下9、10圖版第十六圖上2、5、6) 此外刀身ノ一部ノミヲ殘スモノ三口、莖ノミ殘レルモノ四個ア

ル。此莖ノ一個ハ第五號刀ニ當ルラシキモ折レ口ト刀身ノ接合不能ノ爲無理ニ當テルコトヲ避ケル。

劍第一號 (圖版第十五圖下) 數片ニ折レテキルガ、之ヲ繼合セルト全長七四釐、内身長サ五八釐、身幅四釐、柄ハ外裝鋪ビ乍ラ殘存シ、長サ一六釐葛纏ノ糸卷ヲ見ルベク、身ニ比シテ割合細ク中央デ廻リ八、五釐、柄頭ノ近クハ之ヨリモ小デア。莖ハ稍外リノアル半圓狀ノ把木ニ枚ヲ合セテアルガ、柄頭カラ二、八釐ノ所デ一方ノ把木ヲ莖ノ遺入ルホド別拔キ莖ハ此處ニハジマツテキル。莖ノ端カラ三、五釐ノ所ニ目釘孔ガアリ、又八、七釐ノ所ニ第二ノ目釘孔ガアル。孔ノ徑〇、四釐、目釘ハ竹材カラ成リ其長サ一、七釐、完全ニ遺存シテキル。把木ヲ卷イタ部分ハ厚サ三ミリアリ割レテ片々分離スル、多分ハ鐵ノ薄板ニテ卷キ其上ヲ糸卷ニシタト見ユル、ソレハ鐵ノ錆化ガ斷口ニ浸透シテ鐵質トナツテキルカラデア。

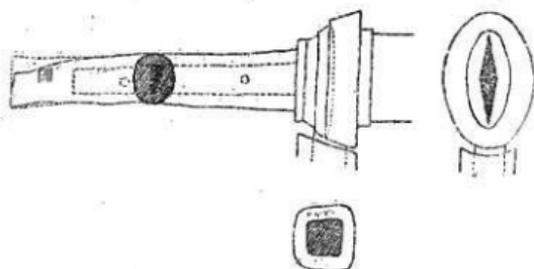
本刀ハ鹿角裝ヲ施シ把緣ハ長サ三釐緣ヲ圍ミテ施サレテアツタト見ラレルガ、錆化セル把緣鐵質ノ外部ニ殆ンド土化シタ鹿角ノ遺存セルヲ見ルダケデア。尙ホ仔細ニ檢スルト把緣ノ他方劍身ノ及部ノ方向ニ直角ニ方一、四釐ノ柄アトアリ、把緣ニ接着セシメタ圓筒又ハ方形ノ裝ヲナシテキタコト彼ノ大和宇智郡近内古墳鹿角裝劍ニ似タモノガアツタト想セラ、ノデア。 (末永雅雄氏日本上代ノ武器一六〇鹿角外裝及第十七圖參看)

劍第二號 (同圖4) 數片ニ折レテ居ルガ身ノ殆ンド全部ヲ殘シテ居ル、長サ七六釐、身幅四、三釐、一番長大ノモノデア。瘤狀ノ鑄鐵箇所ニ出テキル外中央ノ所ニ他ノ劍又ハ刀ノ柄部鑄着キ中部カラ鋒ニカケテハ鞘木ガサビツイテキル。

劍第三號 (圖版第十六圖上) 殘缺デア。身ノ全部ト莖ニ種ホド殘リ數片ニ折レ瘤狀貝殼狀ノ鑄ガアル、身長サ三〇釐、身幅三、五釐

劍第四號殘缺 (同圖3) 全長二九釐、身長サ二四釐、身幅三、二釐、莖ハ長サ五釐ノ所デ折レテキル、身ニ他ノ劍身鑄着シ且ツ瘤狀ノ鑄ガ出テキル。

第六野原地下第十號出土鹿角裝劍實測復圖 第十七圖



鐵 (圖版第十六圖上 9—14)

鐵ハ各種數十本アリ、中ニハ一塊ヲナスノモアツタ。

一、尖根有莖式劍身型 塊狀ヲナスモノハ此種デアアル。莖カラ身ヲ含ミ一五種  
 デ寬トナリ、竹ノ殘存一〇種ハカリ其東ネタル折口ヲ一方ヨリ見レハ蜂ノ巢ノヤ  
 ウデアアル。此鐵ニハ身幅一、八種、身長九、五種ノ稍大ナルモノト身幅一、二種  
 身長サ六種ホドノ小形ノモノガアル。篠篋殘存シ木皮ニ依ル口卷ヲ遺存スル所カ  
 ラ鐵鐵トシテマナク矢トシテ副葬セラレタルヲ知ルコトガ出來ルト共ニ恐ラク物  
 ニ入レタ儘ノモノデアラウ。

二、長菱形ノモノ 身長サ一〇種、菱ノ幅三、二種ニ及ベルモノ之ハ全部デ四  
 本ヲ得タ。

轡 (圖版一六下 3・4・5・6)

丸ニ十字ノ鏡板ノ一方ハ接合シ得ラル、程度ニ殘リ、銜ハ原形ヲ推スルホド引手  
 モ同様ニ殘存スルガ、鏡板ノ他ノ一方及附屬品ナドハ破損シテ一々之ヲ舉示スル  
 コトガ出來ヌ。

鐵頭殘缺

大部錆化且ツ破壞シ臺木ヲ受クル部分トソコカラ六種許ノ間ヲ殘存スルノミデアアル。他ノ古墳ニ幾ツカアツタモ、

ノハ幅方三櫃位、デ縁方圓ク納マツテキルノニ、本品ハ尙ホ毀レ先ガアルコトヲ推察サレル。(圖版一六下1)

土師器 (圖版二二上ノ下段)

本墳ニハ祝部土器ヲ存セズ、土師ノ埴二個ト坏二個アツタダクデアル。

埴一 高一五、五、口徑八、七、腹徑一五、口縁部ヨリ肩へ四、五。

埴二 高サ一六、口徑八、腹徑一七、口縁部ヨリ肩へ四、五。

坏一 高サ五、徑一三。

坏二 高サ五、徑一三。

附 轡及ヒ馬頸骨ヲ出セル遺蹟

六野原三七七二ノ二

地下式墳第八號カラ北ノ方二〇米ヲ隔テタ所ニ、北西ヨリ南東ニ長方形ヲ割シ長サ二米、幅下底デ六〇、底部カラ四〇、上方デノ幅八〇、算スルガ、上部ノ表土ニ近イ所ハ整地ノ爲既ニ土砂ヲ去ツタキタカラ精確ナル寸法ヲ得ナイガ、以上ノ割合デ相當ノ幅ヲ有シタモノト見ラレ、而シテ其ノ深サハ一、八米ニ及ンデキル所ノ一處ヲ得タ。

遺物トシテハ北西壁ヨリ五〇、東壁カラ二〇ノ處ニ轡ガアリ銚板、銜、引手等物色シ得ラレ、ソレガ馬ノ頸骨ニ挾マレタ儘遺存シタキタ。(圖版第十六圖下13)

本墳ニ就テハ成ハ後世ニ馬ヲ埋メタトノ見解モ得ラレヤウガ、若シ單ニ死馬ヲ埋メタトシタナラハ轡ヲ銜マセル必要ハナカルベク、寧ロ第十號墳ナド營マレタ際愛馬ヲ殉葬シタモノト見ル方ガ當レルノデハアルマイカ。馬ヲ殉葬シタ例ハ播磨風土記ニ雄略天皇ノ朝主人ガ死ンデ其ノ婢ト馬トヲ殉葬セシメタコトガ載セテアルカラ此地方デモ同様ノ例ガアツタトモ思フ。記シテ參考ニ供スル。

第十一號墳

字六野原三三七二ノ二 畑地内

封土墳第十號ノ西南約二二〇米、地下式古墳第五號ニ近ク、其ノ南方ニ見出サレタ。玄室ハ東西ノ長サ二米六、南北ニ一

米廿一穗、高サ六五穗、天井ハ東西ニ互ル中線ヲ棟木ト見、南北へ斜面ヲナシ底面ヨリ四五穗ノ所ニテ南北ノ兩壁ニ接シテ居タカラ羨道カラ見テ切妻造ノ平入トイフコトニナツテキル。中央ニ形許ノ遺骨ガアリ其傍ニ劍一口アツタノミデアル。

劍ハ全長三二穗、内身ノ長サ二三、五穗、身幅ハ中央ニテ三、三穗鎗ノ厚六耗、莖ノ長八、五穗アツタ。(圖版十八上)

#### 第十二號墳

字六野原三三七二ノ一 畑地内

封土墳第十號ノ東一五米ニアツタ、玄室ハ東西ノ長サ二米四〇穗、南北ノ幅一米二〇穗、高サ七〇穗、羨道ハ南壁ノ中央ニアリテ幅七五穗、第十號ト同ジク天井ハ南北ニ流レテ底面カラ五〇穗ノ壁面ニ落テ切妻屋根ノ平入ニナツテキル。遺骨ハ燐燐シ去リテ僅カニ痕跡ヲ殘シ遺物ハ劍一口アツタノミデアル。

劍ハ殘缺身ノ一部ト莖ヲ失ヒ殘存ノ長サ一七穗、身幅二、五穗アツタ。(圖版第十八圖上)

#### 第十三號墳

字桃木畑三二五六 畑

封土墳第七號ノ西方約七〇米ノ所ニ位置シ、玄室ハ南北ニ一米九七穗、東西一米二〇穗、高サ七五穗、羨道ハ南壁中央ニ開キ幅六一穗、中央ニ僅ニ形ヲ留ムル遺骨アリ其ノ右側ニ刀一口ヲ存シテ居タ。

#### 第十四號墳

字桃木畑三二五九 畑

封土墳第七號ノ南方ニアリ、玄室ハ不規則ナル長楕圓形ヲナシ南北ノ長サ一米五二穗、横幅三六穗、高サ六二穗、入口ハ北端ヨリ稍西ニ寄リテ開キ、埴二個ト勾玉、管玉各二個ヲ存シテキタ。

土師ノ埴ハ口縁部ヲ缺失、肩ヨリ腹へノ一部モ失ツテキル。底ヨリ肩マデノ高サ一一、五穗、腹部ノ徑一一穗、底拵ヲ安定シテキル。(圖版一七下上段)

祀部土器高坏 脚部ノ底徑ハ一〇、八種、ソノ高サ五種ヲ椀形ノ坏ノ下底ニ接シテキル。脚部ニハ下幅一種乃至一、五種  
 上部七種長サノ邊シヲ都合十箇所開ケテアル。坏部ハ高サ六種、上幅徑一五種アツテ内側ハ椀狀ヲナシテキルガ、上方ハ縁  
 ヲリ一、五種ニ高サ一、五種ノ環狀ニ蓋受ヲ作り、蓋ハ高サ五、五種、徑一五、二種、頂上ニ徑三、八、高一、三種ノツマ  
 ミヲツケ蓋ノ周邊ハツマミヨリ二種カラ三種ノ間ニ五ツノ環狀沈文ヲ其外邊カラ一、四種隔テ、同ジク四個ノ環狀沈文ヲ繞  
 ラシ、兩者ノ間ト第二ノ沈文ノ外側ニ米粒形ノ四ツヲ一東ニシタ椀狀斜行刻文ガアル。外縁ハ高サ二種ノ所ニ突起帶ヲ繞ラ  
 シ、其下方ハ坏部ニ接合スベク稍急斜シテ縁ニ終ツテキル。此高坏ハ類品中獨特ノ手法ニ成ルモノデアル。(圖版一七下)

勾玉 一ハ碧玉岩製、長サ三種、孔ハ一方的ニ穿タレテキル。(圖版十八上)

勾玉 二ハ碧玉岩製、黝白色ヲ呈シ所々ニ綠色ノ線條ガアル、長サ三、四種、同ジク孔ハ一方的デアル。(同圖3)

管玉二個 勾玉二ト同質デ小形ノモノデアル、共ニ長サ二種ニ耗、徑三耗。(同圖4)

#### 第十五號墳

封土墳第三號ノ北西趾ニアツタ、玄室ハ東西ノ長サ三米六〇程、南北ノ幅九〇程、高サ九五種、入口ハ東端カラ南ニ開キ室  
 内ハ九ク掘ラレテアツタ。遺骨ハ燻爛シ去リテ僅ニ其跡ヲ留メ、遺物ハ刀二口ヲ存シタノミデアル。

#### 第十六號墳

封土墳第七號ノ南ニ位置シ、東南ヨリ西北ノ方向ニ流レ、西側中央ニ入口ヲ開キ其幅七三種、玄室ハ長サ一米八二種、幅一  
 米二〇種、遺骨ハ存シタルモ外氣ニ接シテ跡形ナク、左右ニ土師ノ埴二個ト刀一口ヲ存シテキタ。

#### 第十七號墳

封土墳第七號ノ南ニ位置シ入口ハ東方ニアツタ、其幅七〇糎、奥室ハ南北ノ長サ二米一二糎、東西ノ幅一米三六糎、高サ七五糎、遺骨ハ僅ニ存シ刀一口、鐵三木ヲ存シテ居タ。

#### 第十八號墳

封土墳第七號ノ南ニアツテ奥室ハ東北ヨリ西南ノ方向ニ流レ、長サ二米二〇糎、幅一米一〇糎、高サ七〇糎、義道ハ東南中央ニ開キ其幅六一糎、遺骨ハ僅ニ其形跡ヲ留メ、鐵ハ一塊トナリ、斧頭一ヲ存シテ居タ。

斧頭ハ長一一、五糎、又先幅五、八糎、柄頭幅三、八糎、横幅三糎、鐵ハ十數本鑿着シテ有蓋式ノ蓋ノ竈トヲ見得ベキモ只一塊トシテ存シテキタ。(圖版第十八圖上6、7)

#### 第十九號墳

封土墳第七號ノ南ニ位置シ奥室ハ南北ニ流レ長サ二米四二糎、幅一米一五糎、高サ七六糎、入口ハ東方ニアツテ遺物トシテハ遺骨ノ痕跡ヲ留ムルノミデアツタ。

#### 第二十號墳

封土墳第十號ノ南六〇米ニアル、地表下一米二〇糎ニ位置シ北ニ幅五五糎ノ義道アリ、玄室ハ長サ一一、九米、幅一、五米、高七五糎、遺物ハ刀一口アツタ。

刀ハ全長八一糎、内身長六五、五糎、身幅三糎、棟幅七糎、莖長サ一一糎、左右ヨリ二枚ノ板ヲ副ヘ柄木トシ其上ヲ葛藤トシ徑一糎ノ糸ニテ卷イテアル、柄頭ヲ失シタ蓋ノ先端カラ五、五糎ノ所ニ目釘孔ガアル。(圖版第十八圖上8)

## 第二十一號墳 字六野原三三七四ノ一

地表下約六〇糎ノ所ニ奥室ヲ見出シタ。墳ノ方向ハ南々東カラ北々西ニ流レ、長サ一、六米、幅四〇糎、高サ三九糎、天井ハ割竹ヲ伏セタヤウニ中央ニ稍高イ、羨道ヲ西々南ノ壁ノ中央ニ開口シ幅七〇糎アツタ。

遺物ハ南壁カラ三一糎ノ所ニ斧頭アリ、ソレニ接シ北西ノ方ヘ刀一口アツタガ缺損シテ僅ニ刀身ノ一部ヲ得タ。

斧頭ハ長サ九糎、及先幅四、七糎、柄頭幅二、九糎、横幅二、四糎。刀ハ刀身ノ一部長一四糎アツタノミデアル。(圖版十八上リ、10)

## 第二十二號墳 字桃木畑三二六一

封土墳第八號ノ西北三〇米第七號墳ノ東北二〇米ニアツタ。地表下八〇糎デ奥室ガ見出サレタ。奥室ノ主軸ハ東々北ヨリ西々南ニ流レ長サ一、五米、幅八〇糎、天井ハ高サ七〇糎蒲鉾形ヲナシ南壁ノ中央カラ西ニ偏シテ幅五〇糎ノ羨道ガ開カレテアツタ。西壁カラ約一〇糎ノ所ニ上顎骨アリ、頭部ヲ西ニ足部ヲ東ニ伸展葬シタコトガ判ツタ。遺物ハ西壁下ニ土師ノ高坏二個、ソノ西ニ鉢形ノ土師器一、ソレヨリ三〇糎北ニ小形ノ埴一個アツタ。

高坏一 脚部ヲ破壊シテ居ルガ餘ハ完形デアル、脚部徑一四、四糎、總高サ一四乃至一六糎、脚部ノ上方柱部ハ中空ノ圓筒狀ヲナシ其高サ八糎デ坏ノ下底ニ接シテキル、坏ノ深サハ七糎、徑二三糎、燒ノ具合ニ依リ速ノ若葉ノ水中ヲ出ル時ノヤウデ他ノ徑二〇、五糎。(圖版第十七圖下ノ下段右端)

高坏二 脚部ノ大半ヲ失シテキル、總高サ一二、五糎、脚部ノ底徑不明、第一ト比シ稍小形デアル。(同圖中)

土師鉢形土器 高サ一三、五糎、口徑一三糎、底徑五糎、口縁ハ上ヨリ一二、五糎ノ間外方ニ開キ以下ハ漸次ツボマル。(同圖)

土師器小埴 肩ヨリ上ヲ失ツテキル、高サ七糎、徑一〇糎、腹部以下ハ次第ニ圓タ拮リ惡シ。(同圖左端)



タ所ニ頭部ヲ置キ、西方ニ足部ヲ向クタ伸展葬ノ遺骨ガアツタ、ソノ左側ニ直刀一口ガ副葬サレテアツタ。刀ハ全長八一極内刀身六三、七極、身幅三極、莖ハ長一五、五極、柄木ハ葛籬ニテ一、五耗大ノ糸ニテ巻イテアツタ、端ヨリ四、五極ノ所ニ目釘孔ガ見ラレタ。

第二十七號墳 字桃木畑三二六〇

封土墳第七號南一〇米ニ見出サレタ。墳ハ羨道ガ北ニ在リ幅七〇極デ之ニ對シ横處ナル玄室ノ略中央ニ開キ玄室ハ東西一米六八極、幅六八極、高サ三〇極、整地工事中天井ノ土塊落テ壁面ニ氣アトガアツタ爲地下式墳ナルコトヲ知り得タモノデア  
ル。副葬品ハ發見サレナカツタ。

## 附 地ナラシ作業地ヨリ檢出シタ變形獸首鏡

( 圖版第十八圖下 )

圖 八 十 第  
圖面斷測實鏡首獸土出平狐原野六

昭和十七年十月五日封土墳ノ發掘ヲ終ツタ後ハ調査員交互ニ連續又ハ隔日ニ同地ニ至リ、作業中掘當ツタ地下式墳ヲ調査スルコトニナツタガ、昭和十八年二月十一日樋渡正男ノ當番ニテ字狐平ノ作業地ヲ觀察中、當日勤勞奉仕隊高岡町浦ノ名ノ青年等ガ、地下一尺五寸ノ處デ藥罐ノ蓋ヲ拾ツタト稱シ、鐵先デ打碎キ破片ハ之ヲ載ニ投ジタト聞クヤ、或ハ之ガ鏡ニテハアラザリシカラ思ヒ、晝食時ニ之ヲ拾ハセタ所一部分ハ途ニ見當ラナカツタガ、殘レルヲ繼キ合セルト其全鏡ガ分リ、漢式鏡ナルヨリ之ヲ研究所ニ持歸リ、支那船載ノ獸首鏡ナルコトヲ知り得タガ、發見ノ地點ハモト耕地ノ荒レテ今ハ芝原トナツテ居ル所デ封土モナク出土ノ狀態カラ見ルモ古墳陸デナク地中單一ノ發見デアツタカラ、同地附近ニ中期彌生式土器ヲ出セルヨリ或ハ筑前須玖ノ壺棺遺蹟ヨリ古式ノ鏡ヲ出シタト同ジク彌生式土器ニ伴出セルモノデハナイカナド考ヘタガ、今回梅原博士ノ鑑定ニ依リ裏面ノ文様中ニ朱ノ浸潤セル所カラ古墳遺物ト斷ゼラレタ。

鏡ハ平面的手法ヲ示スモノデ徑一、九耗、而ノ反リハ二、五耗アル、中央圓座乳ノ紐ガアリ内區ハ紐カラ四出シタ糸形ノ區劃ニ依ツテ四分サレ糸形ニ近イ、圓形ノ中ニ入レタ筈ハ長宜ダケハ明カデアアルガ孫ノ字ハ確ニソレト見ルベク、他ノ一ハ損傷シテ分ラナイガ子ノ字ニ間違ナルベク、他ノ同式又ハ鑿風鏡等ニアル長宜子孫ト讀ムベキヲ知ツタ。獸首ノ所ハ熹平三年鏡ヤ、永壽二年鏡ナドニ見ル立派ナモノデナク、四個ノ丸形ヲ凹浮彫ニ表ハシタモノデ、右ノ鏡ナドヨリ鑄造年代ノ遙カニ下レル形式化セルモノナルヲ思ハシメル。外區トノ境ハ内側ニ僅カ許リ渦紋ヲ配シタ界線アリ十六個ノ半圓弧帶其外ニ在リ、各圓弧ノ間ニ一個宛ノ點紋ガアル。更ニ沈紋ヲ隔テ、外縁ノ葉紋帶トナル。

本鏡ヲ古墳遺物ト見ル時、出土地ハ古墳陸ノ形迹ナイコト右述ブル通トスレバ、或ハモト其附近ニ小封土ノ墳ガアツテ耕鋤ニ際シ之ニ掘リ當テ遺棄サレタカ、又ハ程遠カラヌ封土墳第一、二、三號ハ蓋掘サレテキルカラ其何レカノ遺物ナルカナドデアラウガ其ノ邊ノ所ハ結局不明デアル。

以上六野原ノ地下式古墳ニツキ大要ヲ記述シタガ、自分ガ是マデ調査シ又ハ見聞シタモノト比較總合シテ見タイ。

第一ハ墳其ノモノ、構造デアルガ、之ハ前文ノ初頭ニ述ベタ通りデアル。然ルニ茲ニ一ノ例外トシテ西諸縣郡飯野町南原田ノモノハ竪穴ノ入口ニ巨大ナル平石ヲ覆ヒ、之ヲ取去レバ竪穴羨道カラ奥室マデ通ツテ行ケル様ニナツテキルノガアル。

ソレカラ羨道ト玄室トノ境ニハ割石、川原石又ハ土塊ノ二三片ヲ以テ塞ガレテアルノガ、本庄、東中良等ニアツタガ大抵ハ土ヲ埋メタ許ニナツテキル。

玄室ノ天井ハ簡單ナモノハ、アーチ形又ハ方天井ニナツテキルガ、稍念ノ入ツタモノハ寶形造、切妻造、四注造ノ屋根ヲ象ツテアルコトダ(勿論之ハ後ノ建築命名デアルガ)當時ノ家屋ガ如何様ナモノデアツタカヲ想サル、コト普通ノ横穴古墳ト同ジデアル。

玄室ソレハ棺槨デ直ニ屍體ヲ埋葬シタモノデアルガ、六野原ノ第二號墳、第八號墳、第十號墳ナドニハ階底ヲ掘リ下ゲテ屍床ノ設ケガアツタ、又玄室内ニハ設備ノ都合上別ニ石棺ヲ置カレナイ筈ダガ、大隅西串良村岡崎及比同村字小塚ニ於ケルモノハ特種ノ組合式石棺ヲ納メタノガアツタ(考古學雜誌第九卷第八號參看)

竪穴ノ下底カラ棒ヲ立テタ形迹ノアツタコトハ地下式墳第二號ニ記シタ通デアルガ、八代村深年ニモ二本ノ棒ノ孔アトガアツタトイフコトヲ同村德滿七郎カラ聞イタ、之ニ依リ何カノ地上施設ヲ考察セシメル。

地下式古墳ニハ地上ニ小封土又ハ何カノ印シガアツタト思フガ、歳月ノ久シキ墳其ノモノハ畑地ノ下底ナドニ何カノ機會ニ見出サル、位デアルカラ地上ノ施設ハ尋ズベタモナイ。只一ツ西諸縣郡眞幸村島ノ内ノ原中ニアルモノハ高サ四尺許、徑六

間ホドノ封土ガ殘存スルノガアル。

次ハ遺物デアアルガ、遺骨ハ殆ンド殘ツテキナイガ、時ニ頭骨ナドノ稍完全ニ殘ツテキルノモアル。曾テ本庄町稻荷馬場武居新氏ノ偶然掘當テタモノニ二體ノ遺骨ガアツタ、顔面、四肢等ニ朱ノ塗ラレタモノガアツタ。故喜田博士ハ仔細ニ之ヲ檢シテ洗骨ノ風ガアツタト斷セラレタガ、今回第九號墳ニモソレト見ユルモノガアツタ。

副葬品ハドレモ同ジヤウニ刀ガ第一ニ擧ケラレル、劍ハ至ツテ少イガ刀ト半々位ニナツテ見出サレルノモアル。銚モ少數乍ラ時々見出サレル。斧頭、鉞先等モ出デ鐵ハ數多ク見出サレル。甲冑ハ大形ノ墳ニハ時々出ルガ小形ノニハナイヤウデアアル鏡ハ時々アルガ大抵仿製鏡デアアル。玉類ハ是マデ地下式墳トシテ知ラレタ本庄町ノモノニモナカツタガ、今回六野原ノニハ勾玉ト管玉トガアツタ、シカモ硬玉製ノ勾玉ガ第八號墳カラ出タノハ驚異トスル所デアツタ。

地下式墳第一〇號其ノ一部ガ封土墳第一〇號ノ下底ニナツテ居リ、天井ノ落チテ居タコトナドカラ封土墳ヨリ先ニ營マレタモノデアアルコトヲ想察セシメタ。此想定ニ若シ誤リナカツタナラハ原始的固有形式ノ鹿角裝具ノ刀劍ガ出土シタコトナドト思ヒ合セ地下式墳ハ後期古墳トシテ圓墳ノ縮小シタ頃、若クハ稍其ノ以前ニ既ニ行ハレ居タコトガ知ラル、ノデアアル。シカシ出土ノ鏡ハ其殆ンド凡テガ仿製鏡デアアルシ鐵鐵ノ多イコトナドカラ見テ後期ヨリ以前ニ遷リ得ナイモノト見ラル、又其ノ終期ハ本庄町ノ地下式墳デハ後鏡ナド出シタトイフカラ奈良朝末頃マデ行ハレテキタト見ヘル。

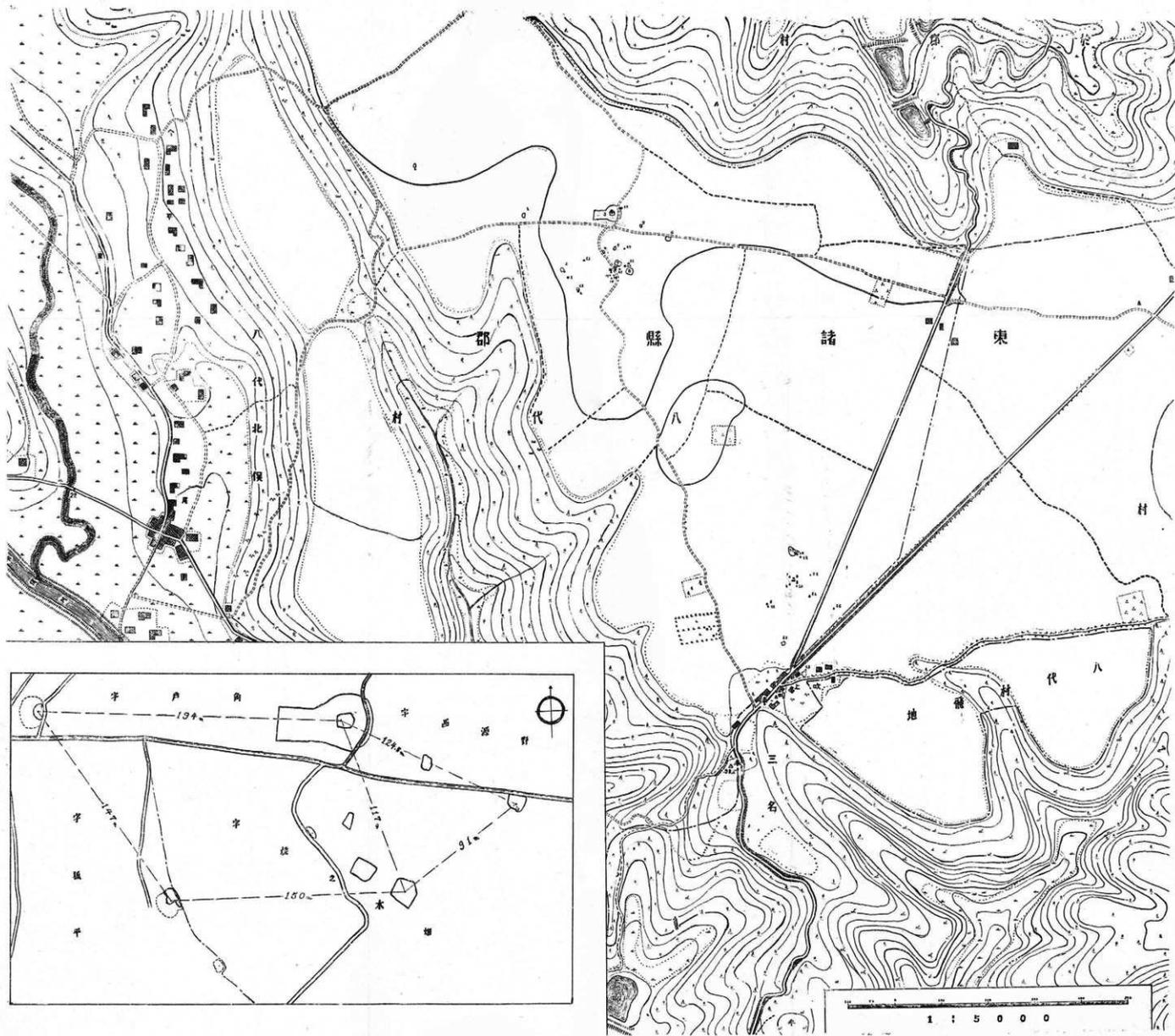
要スルニ地下式古墳ハ横穴式石室ヲ有スル封土墳ノ第二次的發生デ普通ノ横穴古墳ノ地下ニ應用シタモノデアアルガ横穴古墳トノ前後關係ハ尙ホ幾多ノ調査ヲ俟ツテ解決サレネバナラス。

## 古墳改葬報告祭

六野原古墳ハ某施設場ノ西北大字八代北俣字尾園ヨリ東ヘ二ツノ臺地ヲ上リ詣タル地番字種免越ニ、八八九ノ一原野反別一町二反八畝廿九歩ノ内實測反別二畝廿三步ヲ所有者三宅覺之助ヨリ購入シ、封土墳發掘ノ當時地平シヨナシ組合式石棺ヲ地下四尺ノ下底ニ埋メ遺骨又ハ奥室内ノ土ヲ同地ニ假埋葬シ置キ、次デ作業ト共ニ發見セラレタル地下式墳ニツイテモ同様取扱フテ來タガ、右改葬地ハ縣費ヲ以テ八代村ニ所有權移轉登記ヲ了スルコトニナリ昭和十八年十一月十二日地域内ノ修理及本葬ヲスマセ、碑石ニ改葬移轉ノ次第ヲ刻シタルヲ棺内ニ納メ同文ノ碑ヲ建立シ全ク改葬ヲ了ツタカラ同十三日ヲトシ八代木脇兩村當事者、區長、議員、警察署、學校、軍部、請負者、元地主トヲ主賓トシ、知事代理以下調査員一同參集シ午前十一時ヨリ改葬報告祭ヲ執行シ、祖先崇拜、報本反始ノ誠ヲ致シ式後尾園公會堂ニ於テ直會ヲ行ヒ茲ニ昭和十七年九月ヨリ一年有餘ヲ要シテ古墳移轉改葬ヲ全ク終了スルコトニナツタ。

圖

版

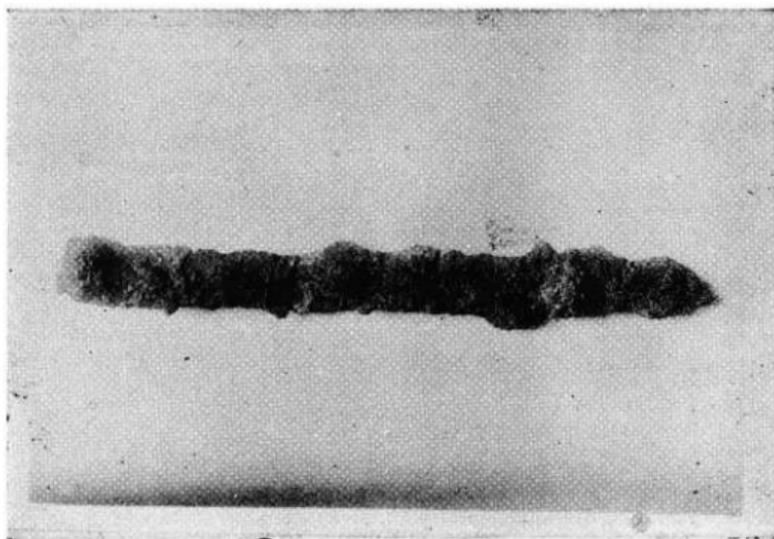




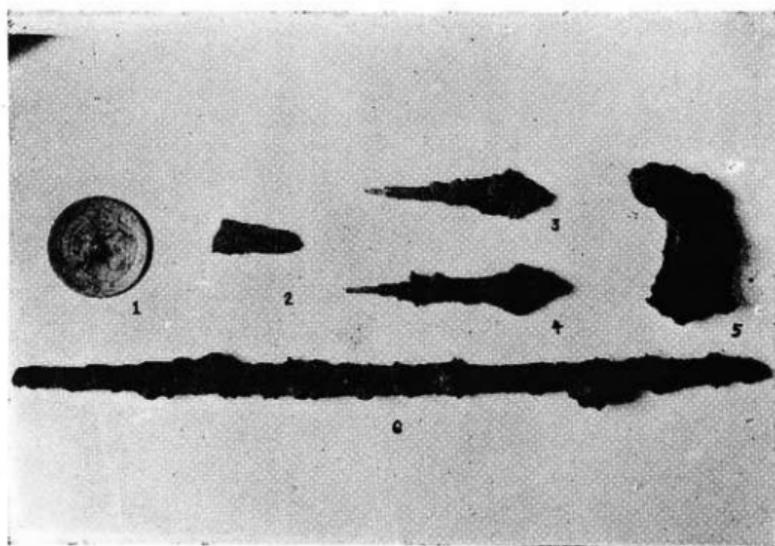
△望ヲヨ南西ヲ號三第墳土封



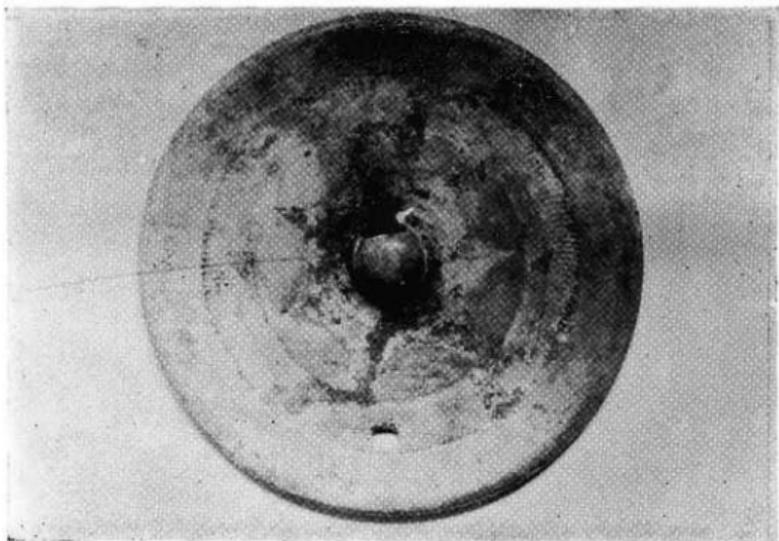
△望ヲヨ南東ヲ號〇一第墳土封



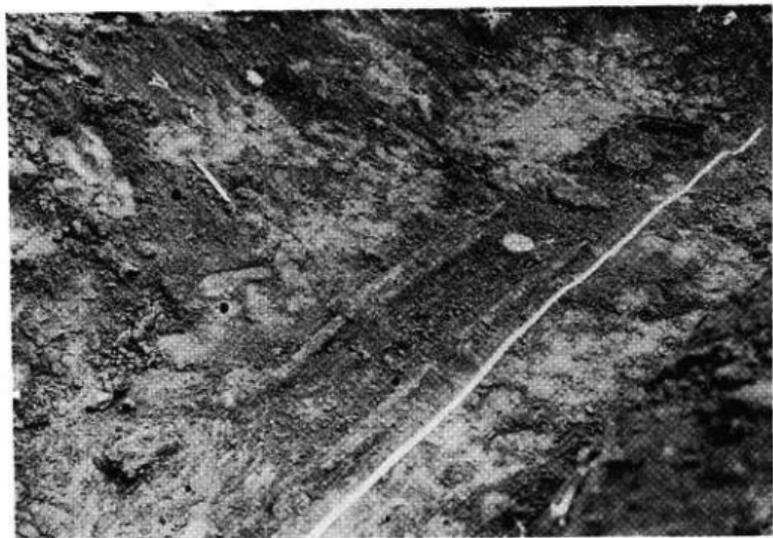
封土填第 四號出土刀殘缺



封土填第 五號出土其 他



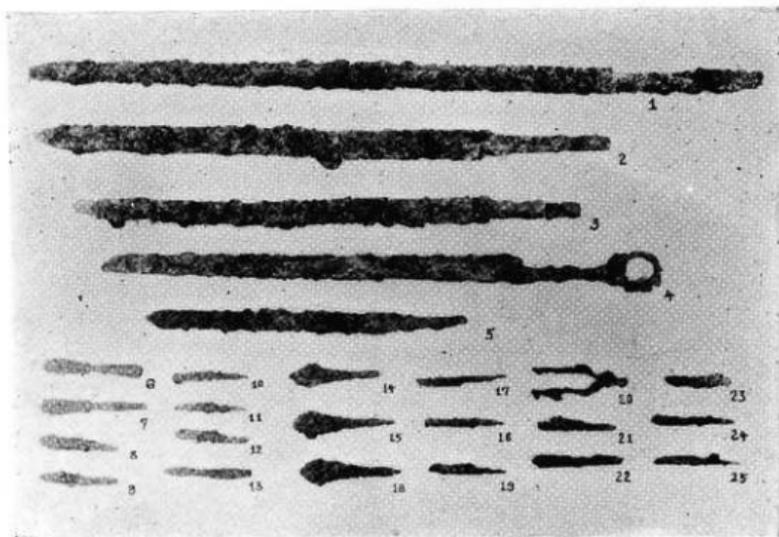
鏡土出號五第墳土封



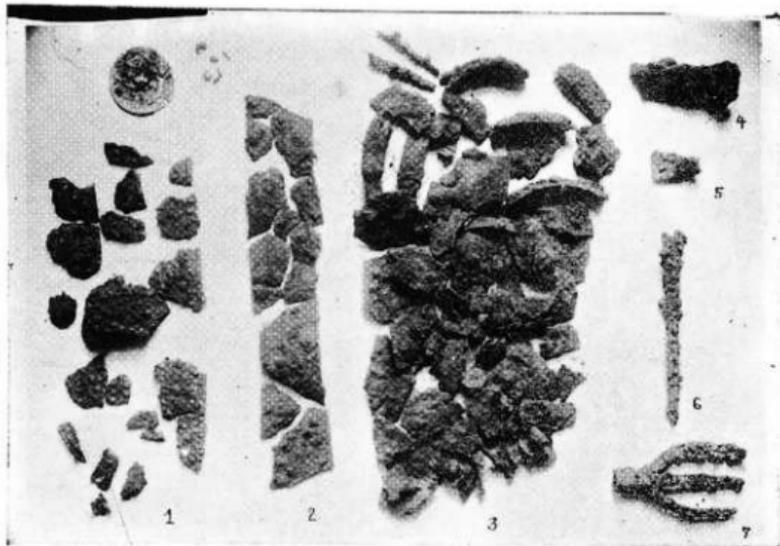
態狀列排品遺號六第墳土封



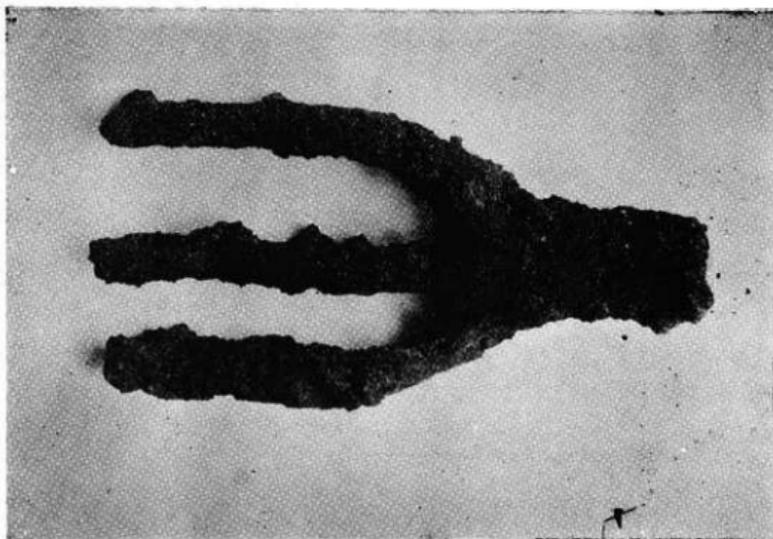
封土墳第六號品排列狀態



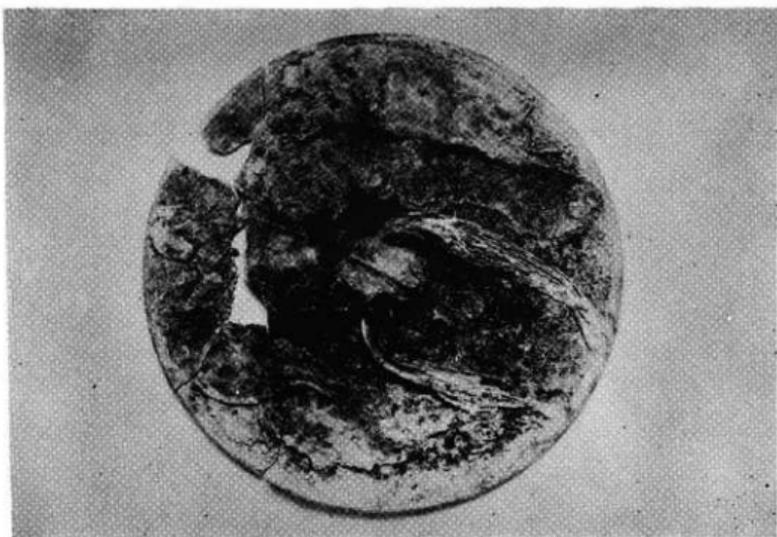
封土墳第六號出土品



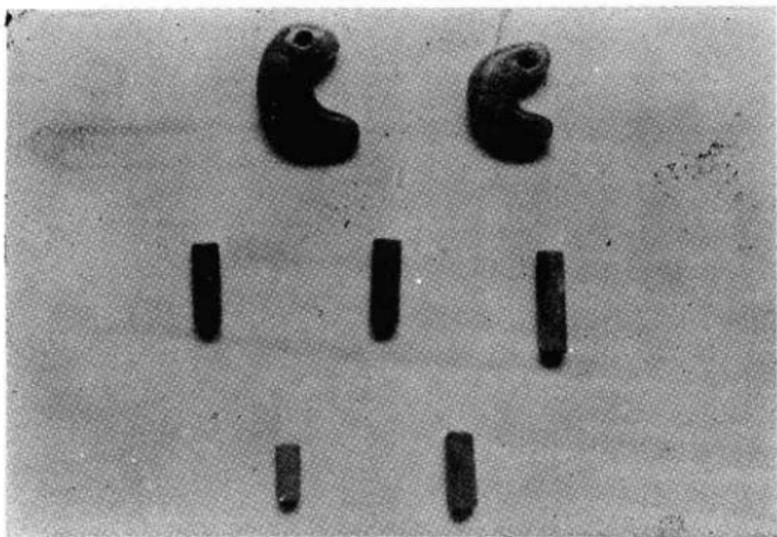
封土填第六號出土品



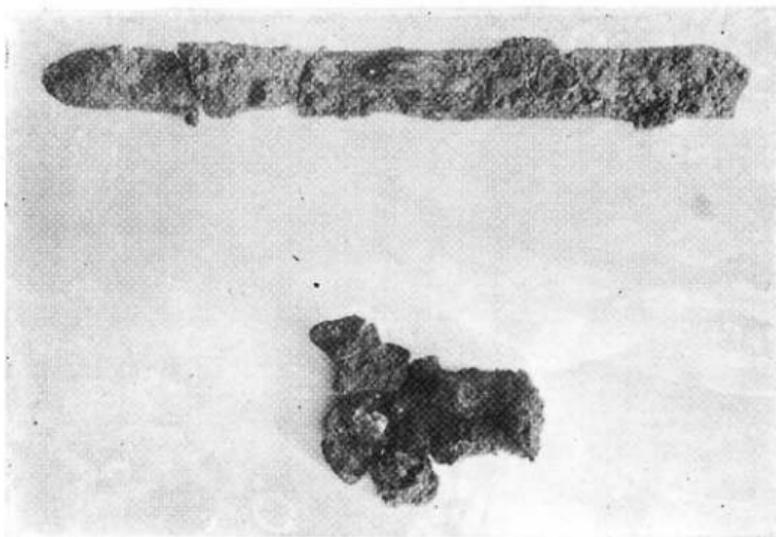
封土填第六號出土三叉鉞



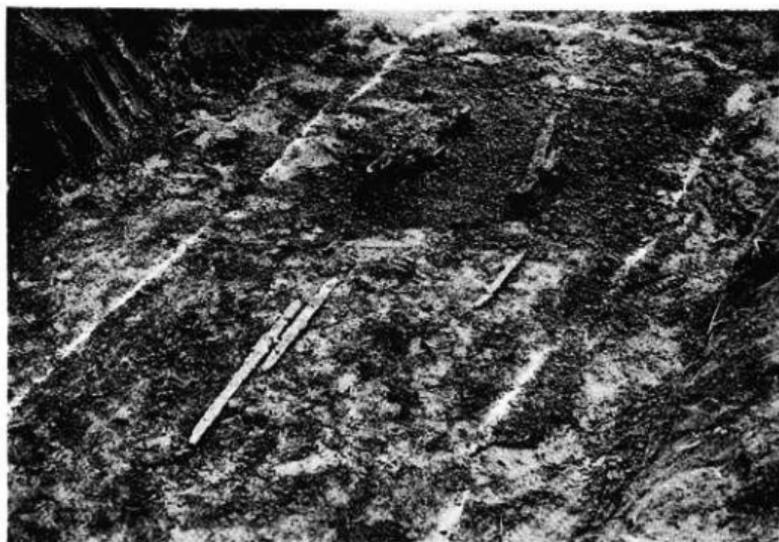
鏡土出號六第墳土封



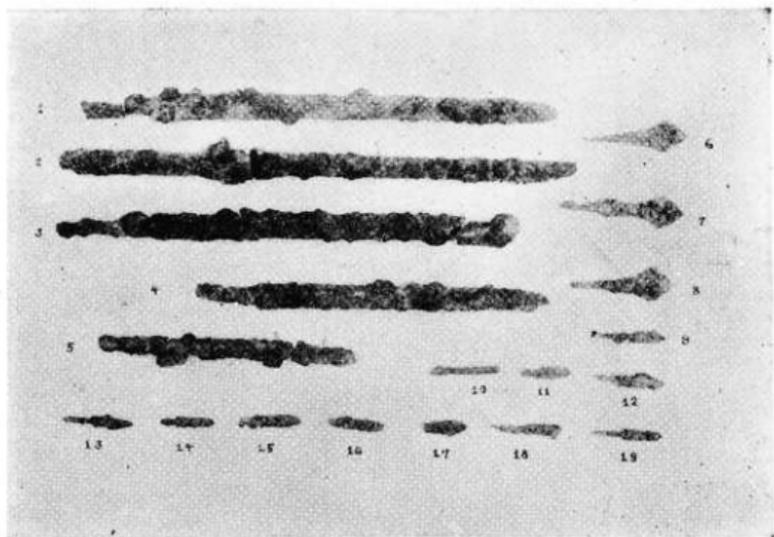
玉土出號六第墳土封



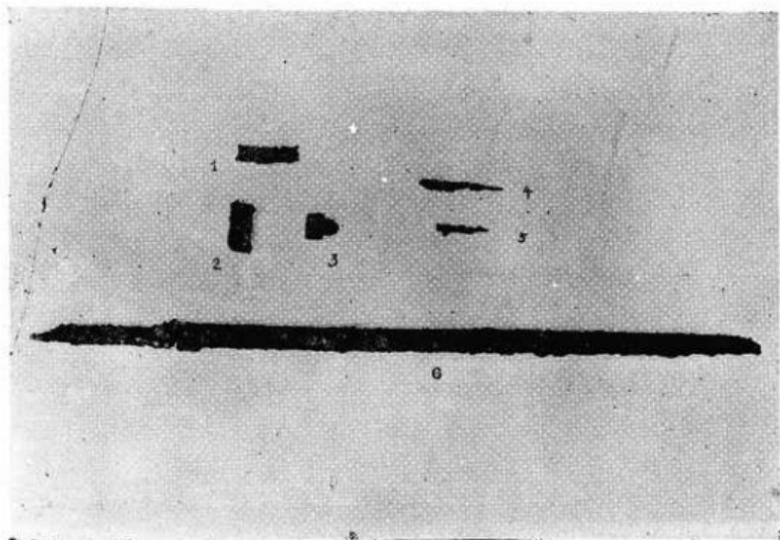
品土出號七第墳土封



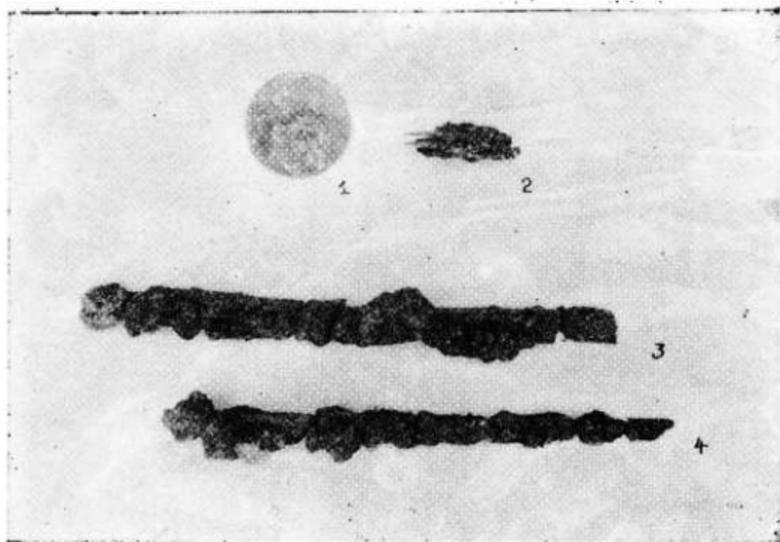
態狀列排品遺及城嶺號八第墳土封



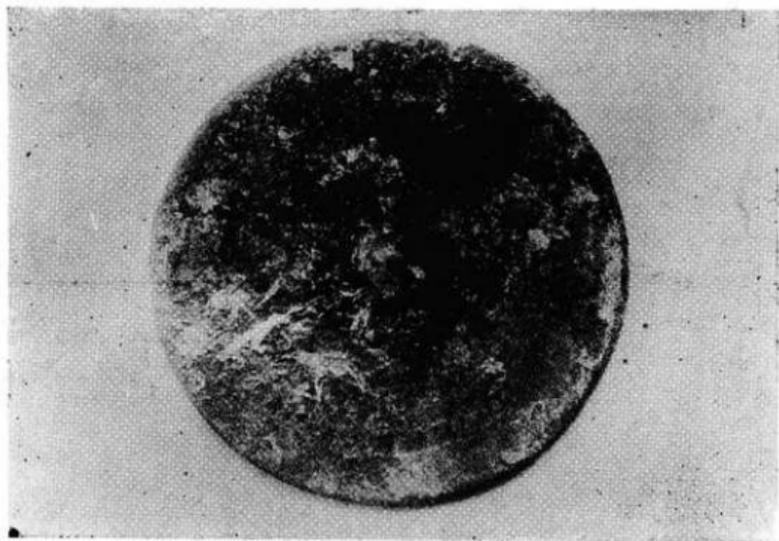
等鐵、刀、土出號八第墳土封



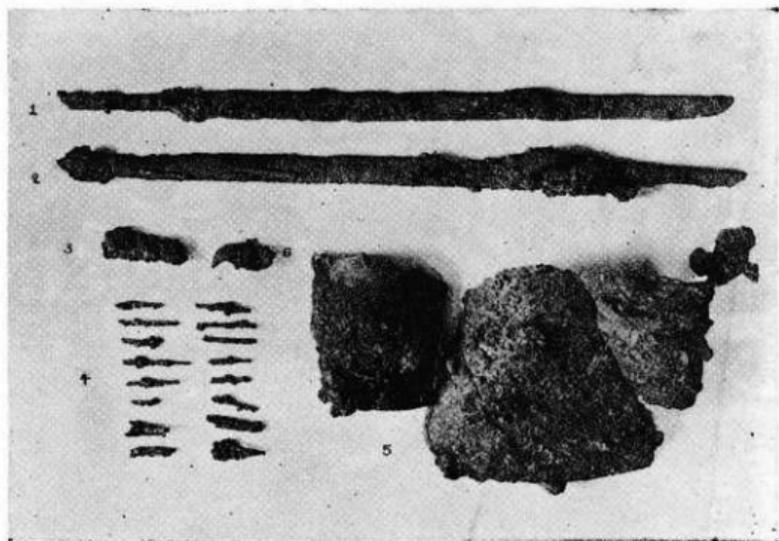
土出號九第墳土封



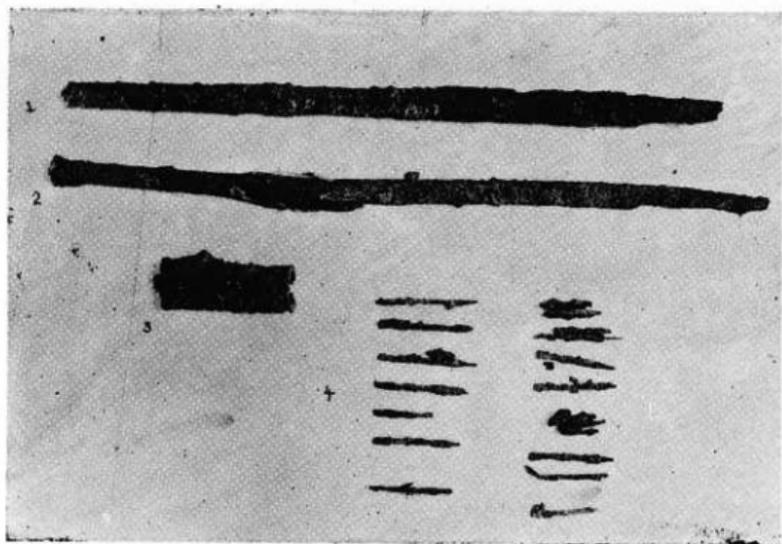
カ品遺ノ他シ但 土出號十第墳土封



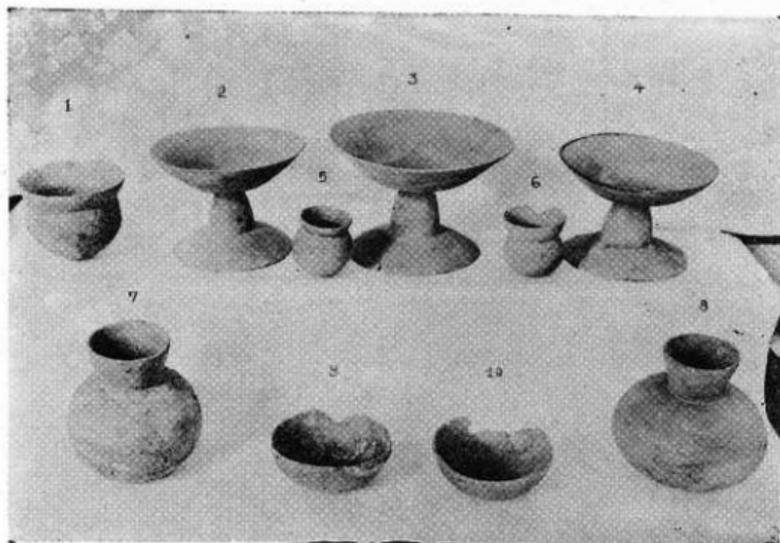
上 同



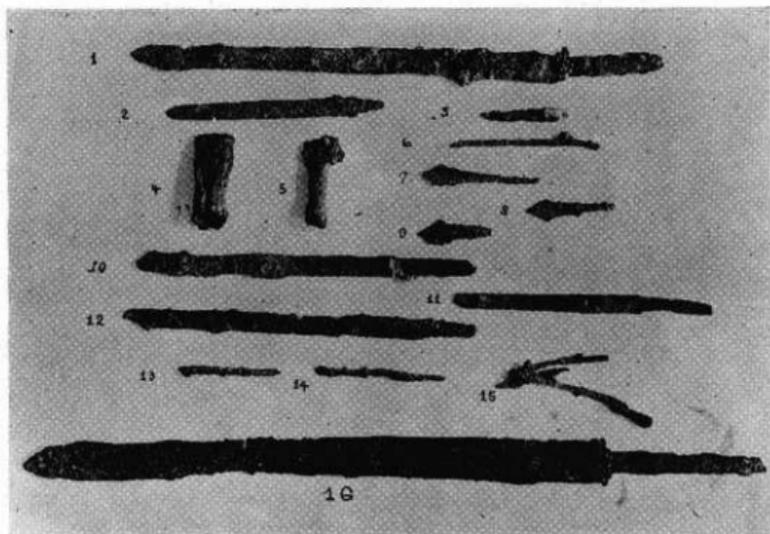
土出號一第墳式下地



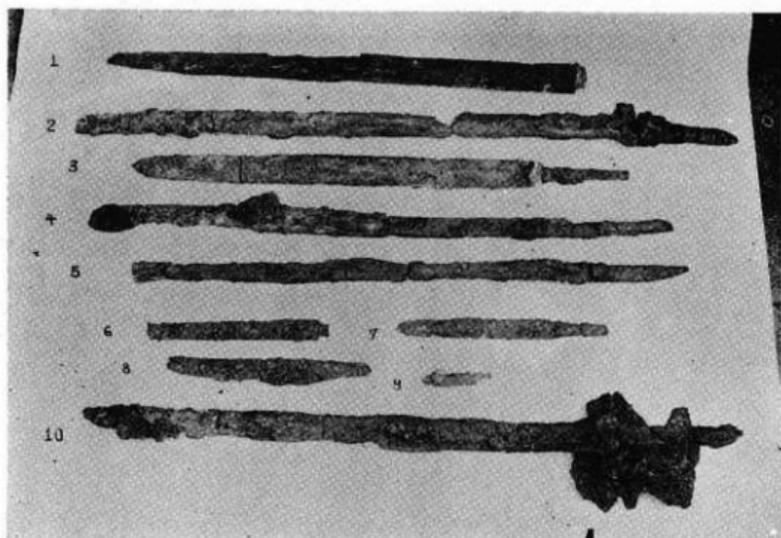
土出號二第墳式下地



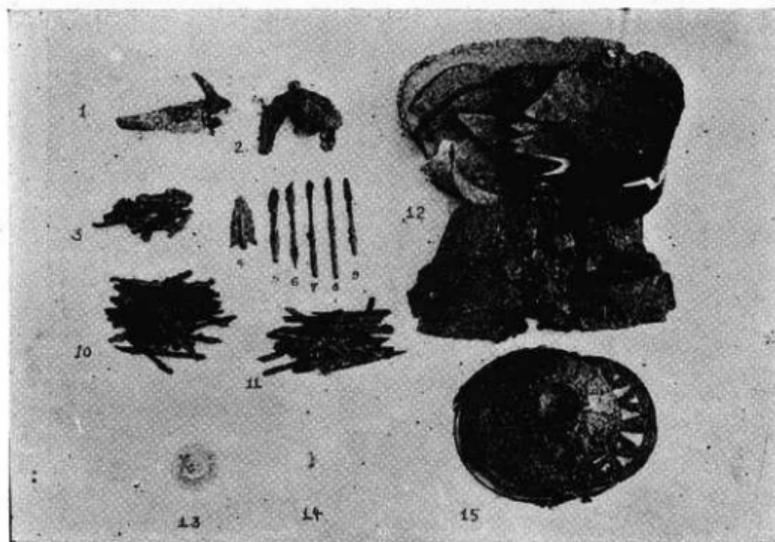
土出號十、三第墳式下地



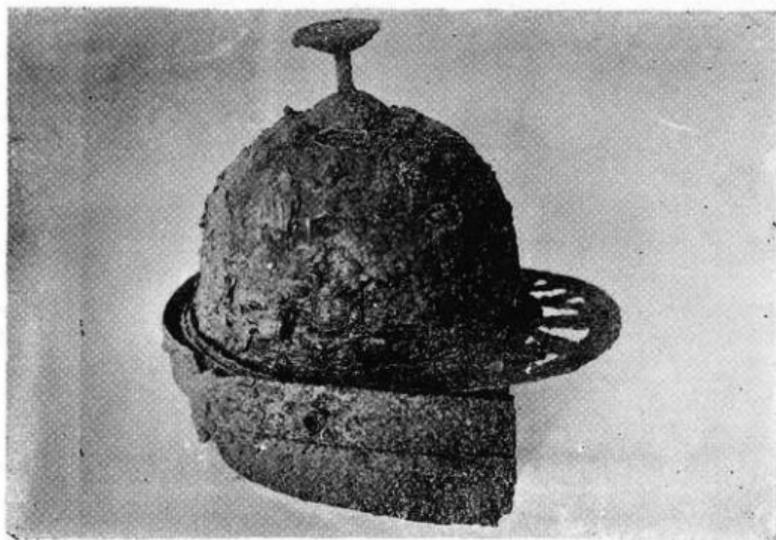
土出號七、五第墳式下地



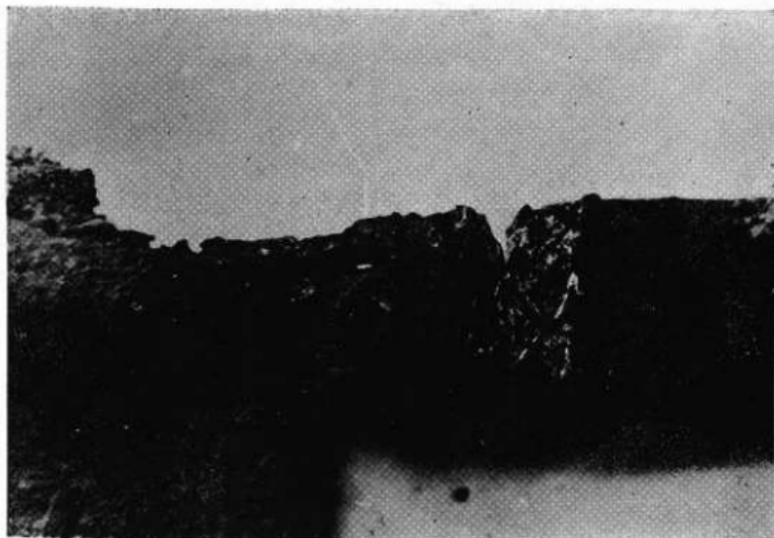
土出號八第墳式下地



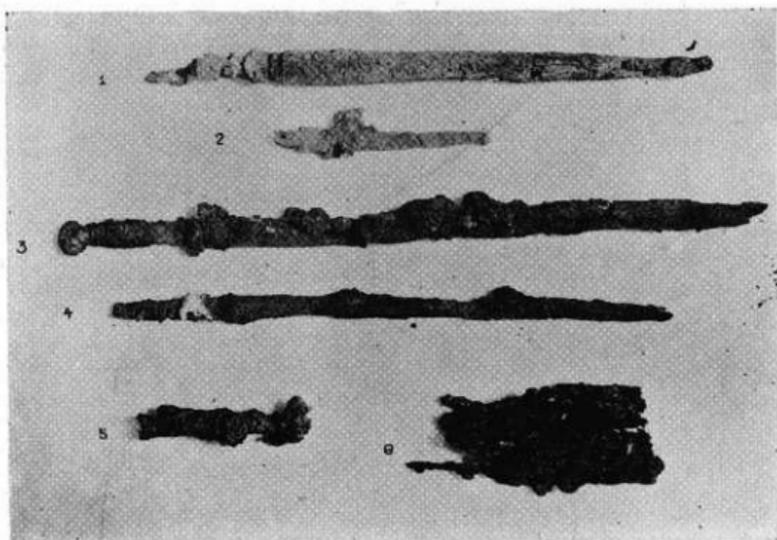
土出號八第墳式下地



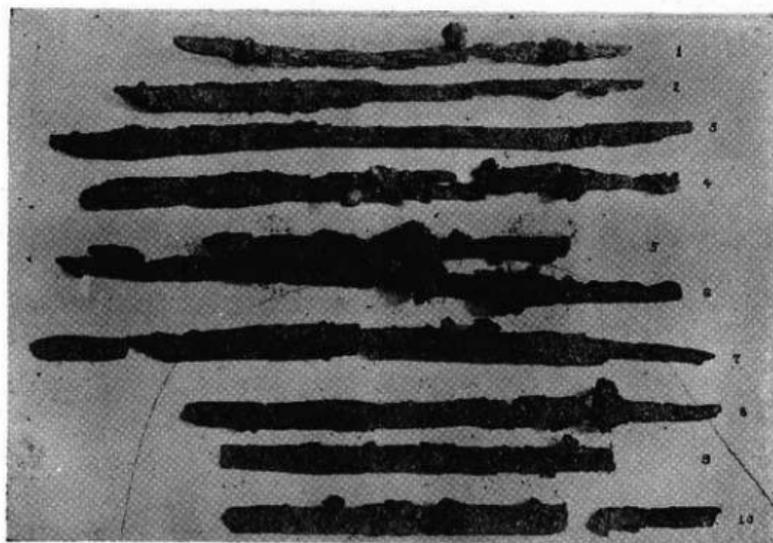
胃土出號八第墳式下地



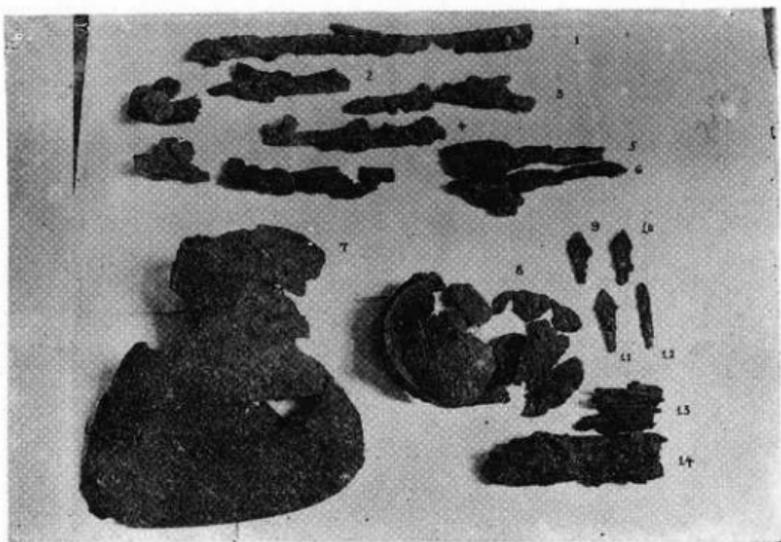
ス示ヲ裝角鹿 刀土出號八第墳式下地



土田號九第墳式下地



土田號十第墳式下地



土出號十第墳式下地



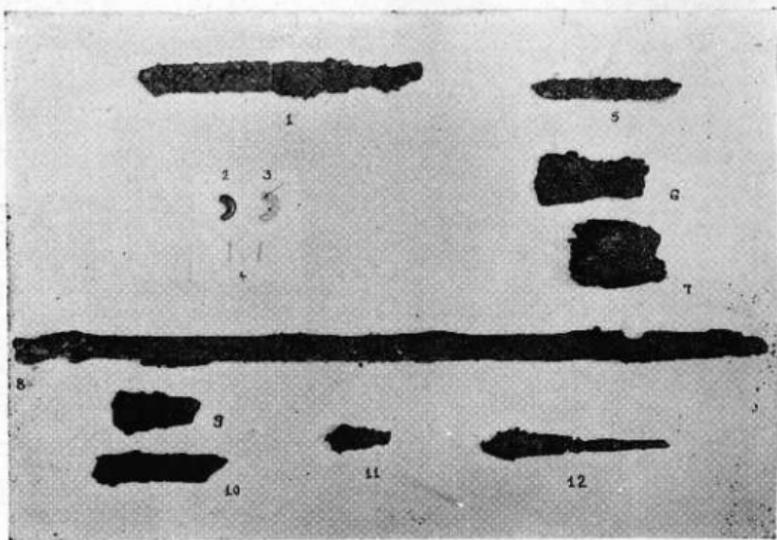
土出號十第墳式下地



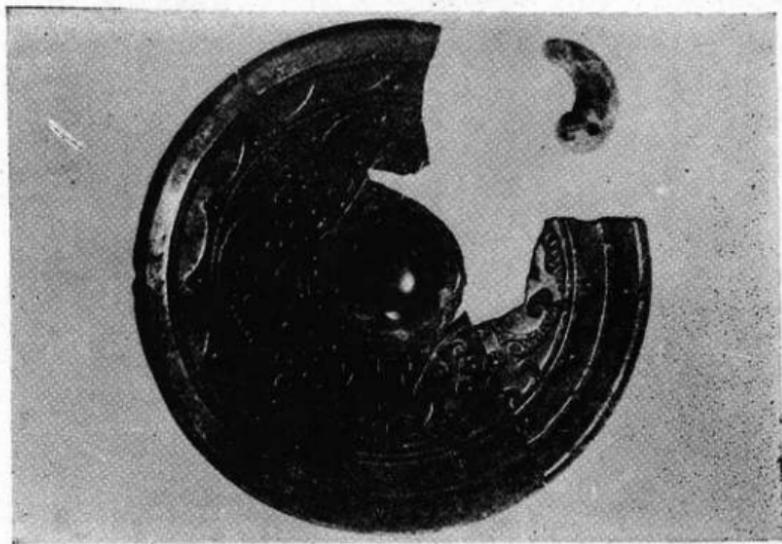
鏡形獸 土出號十第墳式下地



土出號二十二、四十第墳式下地



土出號 四十二、三十二、一十二、十二、八十、四十、二十、一十第墳式下地



土出墳號八第式下地ハ玉勾 鏡首獸シモ土出リヨ部一ノ地盤

昭和十九年四月十五日印刷  
昭和十九年四月二十日發行

宮崎縣

印刷人 壹 岐 晴 繁

宮崎市高千穂通二丁目二番地

印刷所 (宮崎五) 平 和 印刷所

宮崎市高千穂通二丁目二番地

